

# 機動戦記ガンダム・ナ ガレボシ

アルファるふぁ/保利滝良

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ユニバーサルセンチュリー

UC

宇宙世紀と呼ばれる時代、人は宇宙にその生活圏を伸ばしていた

宇宙における生活プラットフォーム・スペースコロニーで、人は子を産み、育て、そして死んでいく時代

しかし宇宙世紀0079、宇宙に住む民が為、スペースコロニーに住む者の一部がジオン公国と名乗り、地球連邦政府に宣戦布告する

新発見された物質ミノフスキー粒子によって、電子機器が大幅に性能を落とす宇宙世

## 紀の戦場

ジオンはミノフスキー粒子散布下においての有視界戦闘のために、巨大人型機動兵器モビルスーツを開発した

その性能はすさまじく、連邦はすぐさまモビルスーツ・ガンダムを開発し、ジオンに對抗する

このジオンと連邦の戦争は後に一年戦争と呼ばれ、双方の人口と生活環境を大きく犠牲にして終結した

はずだった

一年戦争より後に、宇宙世紀の人間は幾度もの抗争を繰り返し、多数の死者を出したモビルスーツによって人は様々なものを失ったが、得たものは更なる闘争への火種だけであった

一年戦争からさらに幾度の抗争を経た地球に、一つの流れ星が落ちてくる

そう、その流れ星の物語が、幕を開けることになった

また新たな戦いが、始まる

機動戦記ガンダム・ナガレボシ  
それは答えを求めない物語

# 目次

流星の夜、流星の朝	1
運命の邂逅	6
事情	13
奇々怪々機々械々	22
輝く夜に	34
唐突な硝煙の香り	42
ネクスト・ブレイクの記憶	49
地を駆けるスピードスター	54
血戦は大地にて	63
覚悟を決めた者	73
獅子身中の虫	82
二回目の攻撃	90

ウォルター・コバツクの記憶	99
激突	107
荒野に立ち上がる	117
息継ぎ	133
パルバライゼーション	141
ブルース・ウエインの記憶	148
砂塵巻き上がる合戦場	154
強敵、そして増援	166
嵐は過ぎ去る物	178
帰還三度目	185
午前九時にはミルクコーヒ	190
鍛練	196
アイアンファイトにて	202

起動戦志	297
CONVICTION	292
オアシスの惨戦	283
双面の戦場	278
レイゼン・ハウゼンの記憶	273
満開の戦禍	265
交差する敵意	257
スーパーエネミー	248
無数の一つ目	238
マーヴェル・クミクスの記憶	234
火蓋は落とされた	226
前兆	219
豚小屋と牛舎と鶏の巣箱	214

ナガレボシ・マックスモード 前編	302
ナガレボシ・マックスモード 後編	314
アウラ・ドレインバーグスの記憶	325
再び	330
ウォルター、猛る	336
新たななる目醒め	345
アウラ、猛る	351
傷だらけの戦士たち	364
戦いとは始まる前から終わっている	ア
イアンフィスト編	371

戦いとは始まる前から終わっている	連
邦編	375
戦いとは始まる前から終わっている	ジ
オン残党編	379
最後の戦い	383
グレッツクリー・ベンの記憶	390
三つ巴	394
宿命の対決	402
意地の戦い	411
信念の戦い	419
魂の戦い	427
立ちはだかる者	435



# 流星の夜、流星の朝

空を見上げた

いつもはホームシックを恐れてなるべく見ないようにしていた

だけど今日は、何やら胸騒ぎがする

今夜空を見ておかないと、後悔する気がする

瞼を開いて眼を見開き、光輝く無数の星達が黒い天に散らばっているその光景を、じつと見詰めた

それは時間に換算して約十秒も無かったであろう行動だった

しかし、見上げた本人にはそんな短い時間だとは思えない

永遠に近いほど空を見た、そんな気すらした

変な錯覚を覚えたものだ

そして結局何もなかった

変な予感は見事に外れたわけだ

なので夜天から目を離れた

その瞬間だったのだ

後悔した

流星がすぐ近くに着弾する瞬間を見られなかったことを

起きた

ベッドに寝かされ、白い掛け布団に包まれた体を見下ろす

次にベッド横の壁を眺めた

木製の、粗雑なものだった

体がギチギチ言っている

自分はどうやら、まだゆっくり休んだ方が良さそうである

「・・・ハッ!？」

そんなところで、意識が完全に覚醒した

何故、こんな所で寝ているのだろうか

記憶をたどろう

バックパッカーとして色んな所歩き回っていたら、厳ついゲリラに追い回され、リュックも捨てて命辛々逃げ出したら、疲労と脱水でぶっ倒れた

そして、ここにいた

つまり誰かに拾われて助かった、のだろう

それは誰なのだろうか、助けたお礼を要求するような輩だったら嬉しくない

とりあえず起きることにした

お世辞にも豪華と言えないベッドから飛び降り、親切にもベッドの近くに置いてあったサンダルを履き、寝室と思われるその部屋の窓に顔を近づけた

外の景色にはおかしいところは無いように見えた

果てしなく続く荒れ地は、ジオンと連邦が一年近く戦闘をした結果こうなったのだらう

そこに、木やらトタンやらで建てられた小さな家がぼつりぼつりと寄り集まっている  
いくつか大きめの家屋もあった

ここは、何かしらの集落なのだろう

実際、外には人が集まって何かの作業をしている

「冗談・・・だよな？」

しかしその作業がおかしかった

家の集まりの外に、巨大な岩が地面と垂直になるように突き刺さっている。辺りに飛び散ったかのように積もっている土の山々と、怪訝な目でその岩を見る町人の様子から、まず元から在るものでないことは確かだ。

ならば、何なんだろう

窓を見ているだけじゃしようがないので、駆け足で部屋のドアをくぐる

ドアの外には女性が立っていた

何事かと見てきた彼女の視線から逃げつつ、玄関らしき場所から外へ飛び出す

集落には意外にも、畑や池が多数あった

鶏や豚の鳴き声も聞こえる

こんな荒野に住んでいるからもう少しキツイ生活を想像したが、そんなことはない様

子だった

そんなことはどうでもいい

土煙と砂埃を巻き上げ、走る

あの隕石をもっとしつかり見るために

そして、立ち止まり、目撃する

人だかりど真ん中、重作業のために用意されたのであろうMS-06ザクⅡがヒートホークをあの大きな岩に叩き込んだ瞬間を

岩が割れ、剥がれ落ち、内部が現れる  
中から、モビルスーツが出てきた

## 運命の邂逅

それは、一機の奇妙なモビルスーツだった

いや、よく見るとモビルスーツであるかすら疑わしい

各関節は輪状

それぞれ六本の手の指

曲線が多い生物的なディテール

背中には、三角形の何かがぶら下がっている

ただただ歪な、とにかく歪な、人型の巨大な何か

だが、それを見ていた一人がある単語を口にする

「ガ……ガンダム？」

その色は、白を基調としたトリコロール

その頭には、二つの眼と二本のツノ

言われてみれば確かに、ガンダムに見えなくも、なかった

不思議だった

こんなただただ奇妙すぎる機体なのに、数個の要素だけで『ガンダムっぽく』見える

そしてそれすらも、この何かの不可思議さを加速させていた

「あああいた！探したんだからね！」

「ん、え？」

呼び掛けられた男は振り向いた

そう言えば、自分は看病してもらった身の上なのに家人を無視して隕石見物に出てきたのだった

ここにいるこの女性は、ダツシユで出てきた自分を心配して探しに来てくれたらしい何だか申し訳ない気持ちになった

「って何じゃありやあつ！」

一方その女性は、男の心など露知らず、今気付いたガンダムモドキに大いにビックリしていた

「何じゃありや、って・・・」

思わず苦笑する

「って君、ジュンじゃん！ジュンイチ・ヤマカワ！」

すると女性は、男を指差して名前を呼び始めた

どうやら、男・・・ジュンイチ・ヤマカワと知り合いらしい

ヤマカワの方には全く記憶がないが

「え？なんで俺の名前を？」

「覚えてない？リーア・カストレル！ハイスクールの同級生！」

ハイスクール、と聞いて、ヤマカワの顔が少し暗くなる

ああそれか、といった風情の、表情だった

「そ、それは・・・うん・・・ええと」

「え!？」

「覚えてないって、言うか・・・」

申し訳なさそうな表情でヤマカワが謝ると、今度はリーアの顔が暗くなった

「えー！そんなあー・・・」

「ご、ごめんな、なんか」

がつくりと肩を落とし、リーアがため息をつく

それを見て、ヤマカワはさらに顔を暗くするのだった

「おい、カストレル」

リーアの後ろから男の声があった

少し威圧的な、それでいて落ち着いた感じのバリトンボイス

ヤマカワは無意識的にその声の主へ視線を移した

「彼は？」

「あつ、ウォルコバじゃん！じゃああのゼロロクは誰が乗ってるの？」

その瞬間、バックパッカーの顔がひきつった

「一つ、名前を変な風に略すな……一つ、MSは型番じゃなくてペットネームで呼べ……一つ、質問に答えろ」

その精悍な顔立ちの男は、薄汚れた旧ジオン公国軍人の制服を着用していたのだ

しかもかなり着崩していたのだ

「それと、ザクに乗ってるのはアウラだ」

かつて地球連邦とジオン公国が全面戦争を行った頃からもう十数年、コスプレイヤーなんてのはいないわけでもない

戦争の本質を知らず、娯楽としてその内の要素を楽しむ者もないわけではない

しかし、ヤマカワの知るコスプレイヤーとは、あんな風に衣装を汚したり着崩したりするような連中ではない

むしろ逆に、シワも汚れも付かないよう大切に、イベント専用のスーツのごとく扱うような連中だと思う

が、この男は違った

「アンタ、ジオンの人か……？」

先程までリーアの方に顔を向けていたその男は、ヤマカワを見た

そして重々しく口を開いた

「……人の事情を聞くなら、そつちから名乗るのが筋だと思うんだがね？」

「あ、ああ、俺の名前は……」

チラリ、とリーアの方を見て、ジユンイチは口を開いた

「ネクスト・ブレイク……だ」

リーア・カストレルルの顔は驚愕と悔恨に歪んだ

「えええ!!別人!?!私の勘違い!?!」

「ああ……そうじゃないんだ」

頭を抱えて天を仰いだリーアに対し、申し訳なさそうにネクストは呟く

「俺、昔の記憶無いんだ」

「へ?どういう意味?」

「止せ、今はいい」

間拔けな顔で続きを促すリーアを片手で制し、ジオン軍人と思わしき男が喋りだした

「ようこそネクスト・ブレイク、俺はウォルター・コバック」

ウォルターは両手を広げ微笑むと、言った

「ようこそ、『アイアンフィスト』へ……歓迎する」

「ど、どうも」

いきなりのドラマチックな奇行に、ネクストはまたも顔をひきつらせた

「ここは、まあ、見ての通りジオンの残党が集まってる場所だ……だけど安心してほしい、俺達はもうジオンを捨ててる」

「は？そりやどういうことだ？」

いきなりの爆弾発言に、ネクストの顔相は三度ひきつる

ひきつりすぎて翌日筋肉痛にならないか心配になってきた

「それは今はどうだっていい、つまり他の連中みたいにテロとかする気は更々無いってことだ……着いてこいよ」

頭をかきながら、ウォルターはただそう言った

先までの微笑みは無くなり、今やただ無表情だった

「カストレル」

「あつ、はい」

「そろそろベン達も腹が減ってる頃だろう、飯を作ってきてやってほしい」

ウォルターはリーアに仕事を頼んだ

「わかった！」

若干笑むと、リーアは二人とは別の方向へ走っていった

どうやら、二人がジオンがどうか言い出した時から話に付いてこれなくなったらし

い

その空気から解放されたのだから、さぞかし嬉しいのだろうか

だが、振り向き様にネクストを見た彼女の目は、悲しそうだった

「さて、行こう」

「どこへ？」

「飯だ」

リーアを見送り、二人は軽い問答をした

強引すぎる食事の誘いだっただけ

腹は減っていたので誘いは受けるが

## 事情

千切ったパンを口に放り込み、ネクストは聞いた

「つまり、アンタ等は地球に住んでいたいって

ことなんだよな」

「その通りだ」

「胡散くつせえなあ」

言いながらネクストはカップに入ったスープを一気に飲み干す

若干細めた目には、厳つい雰囲気ウォルターがいた

レストランらしき店内のカウンター席に隣同士で座っている二人

出されたサラダにフォークを突き立て、ネクストはウォルターに再び絡んだ

「ジオンなら『おのれ連邦！我が身朽ちるまで叩き潰してくれるわア！』なんて息巻くもんだと思ってたんだが」

「そういう連中はな、連邦に叩かれまくって虫の息だ」

「宇宙には？」

「うじゃうじゃ」

他人事のように眩かれたその言葉に、思わずネクストの頬が緩む

地球圏を揺るがしかねない連中をそんな風に笑い話の一欠片にしてしまうウォルターに、ネクストは若干の好感を抱いた

「ここはな、自然環境が厳しいんだ・・・野菜は実らない、家畜はすぐ病気になる、井戸もない」

「キツいな」

「だから連邦もここに不法滞在者が沢山いてもほぼ無視している」

ウォルターも、湯気の消えたスープを啜る

「人なんか住めつこないと、そう考えてたんだ」

「あんたらは、金かなんかでそれを覆したのか」

レストランの窓の外を眺めながら、ネクストは呟いた

無数のビニールハウスや屋根付きの大きな家畜小屋、貯水タンクも大きなアンテナもある

並大抵の金では用意できない代物ばかりだ

「・・・そんなところさ」

ウォルターは苦笑しながら続けた

「0079末期、無様に逃げてる時にとりあえず沢山ちよろまかした・・・当時はかなり

混乱してたからな、苦勞はしたが莫大な額を用意できた」

「ジオンの仲間の金なんだろう？」

「この人達を蔑ろにしていた連邦から強奪したものが殆どだ」

スープを飲み干し、カップをテーブルに置き、ウォルターは目を閉じながら話す

眉間には皺があつた

心地よくない話なのは、明白だった

「殆ど・・・か」

「俺らは用心棒兼男手として住まわせてもらう、彼らは人手と大量の金を手に入れる：それが、俺達燃え尽きジオン残党がこのアイアンフィストで交わした盟約だ」

「そこまでして地球にいたかつたのか」

「ザビ家やらジオニズムやらアナハイムやらニュータイプやら、とにかく宇宙は・・・とりわけ地球圏は色んなものを抱えすぎてる」

遠くを見るような目でグラスの水を眺め、それからウォルターはフォークを置いた

声のトーンも、下がってきている

「ジオンが連邦にケンカ吹っ掛けて、残党がそれを引き継ぎ、連邦はとにかくそれらを叩き、様々な奴が美味い汁を吸い続け、スペースノイドやアースノイドの一般人は不安に押し潰され、兵隊達は戦い続ける・・・疲れちまつたんだよ俺達は、クタクタに・・・」

彼の目が見ているものはグラスの水か、それともそこに映る情けない台詞を吐く己自身か

ネクストには判別できなかった

だが、そんなウォルターを見てみると、ネクストの口も、滑り始める

「俺も……」

「ん……?」

「俺も、ジオンと連邦の戦闘で……両親と記憶とその他諸々を失った、らしい……破片が脳味噌に突き刺さって……」

驚いたウォルターは、沈痛な面持ちでネクストを見つめる

「……気の毒にな」

「らしい、なんだ」

「無くしたんだな」

「ああ、破片を取り出したときにな……ここにいるアンタ達を恨むつもりはないさ、その時以前の俺はその時死んだんだよ」

目を細めて、一呼吸置き、自らに言い聞かせるように言う

弱った

これでは自己紹介だ

「今の俺は、ネクスト・ブレイクなんだ・・・」

折角の食事の席が、空気が完全に凍りついてしまった

「さて、根無し草の君にここの連中を何人か紹介しておこう」

「根無し草とか言うな」

ウォルターの軽口にネクストが口をとんがらせて抗議した

凶星なので強くは言えないのだが

「で、アイアンフィストの愉快な仲間達はどこだ？」

レストランから出て、ウォルターとネクストはブラブラとアイアンフィストの通りを歩いていた

ウォルターがアイアンフィストを案内したいと言い出したからだ

ネクストにはありがたい話だった

追い剥ぎもどきに襲撃されて一文無しになったネクストは、ここを拠点にしておく必要があった

金も荷物もない彼には、この荒野をさ迷うことも自殺行為だ

よって、ある程度ここで旅の支度やら何やらをしなければならぬ

「ああ、電話で呼び出したからもうすぐ来る頃・・・あれだ」

ウォルターが駆け寄ってくる人影に指を指した

「どうやら、男が二人に女が一人いるようだった

「悪いな、急に呼び出して」

「大尉のお呼びなら、すぐにでも」

「後でなんか奢れよ!」

「・・・新顔の顔を見たかっただけ」

ウォルターの謝罪に三者三様の返事をして、その三人はネクストに向き直った

「俺はグレッタクリー・ベンって言うんだ、いつもは物運びとかやってる」

「いつもは?」

「いつもじゃないときは、グフに乗ってるぞ!」

ひっくり返りそうになった

ネクストの顔が驚愕に染まる

「あ、ああ、よろしく・・・。そ、そちらの二人は？どなただ？」

まさか後の二人もと考え、自己紹介を促す

「レイゼン・ハウゼンだ、パソコン関係の仕事をしてる」

レイゼンは一拍置いてから続けた

「ドムによる火力支援が戦闘による役割だ」

「マジかよ・・・」

困ったような目で、最後の一人を見た

見た目はネクストよりも若いように見える少女だが、そんなものに騙されはしなかつた

「・・・アウラ・ドレインバーグス」

「名前だけじゃダメだぞ」

「わかったよ、うっさい」

アウラと名乗った少女に、ウォルターは一言注意した

渋々ながらもアウラはそれに従う

「農場で野菜とか鶏とかを世話してるわ・・・乗ってるのは、ザクよ」

ネクストは口を開けて呆然とした

まさかとは思ったが、これ程とは考えてなかった

「オイオイオイモビルスーツ多すぎだろ！連邦の基地でも襲うつもりか!？」

「言っただろう、俺達は用心棒も兼ねてるって・・・」

「にしてもモビルスーツ三機は多くないか!？」

ネクストの抗議の声

しかし、それをレイゼンがとんでもない一言で否定する

「いや、五機だ」

「え?」

「ザクI、ザクIIJ、グフカスタム、ドムトローパーン、陸戦型ゲルググ：アイアンフィストの保有するモビルスーツは以上の五機だ」

「えええええーツ!？」

なんとということだろう

こんなのがそこらのジオン残党と同じ行為をすれば、とてつもないことになる

「安心しろ、自衛目的にしか使わないから!」

「じゃないと、ホント、困るぜ・・・」

グレッタリーのフォローも、ネクストには虚しくとしか響かない

ホントは己は騙されていて、今まさにジオン残党に勧誘されているのではないかと不

安になつてきた

とんだ厄介なここに厄介者として居着くことになつたもんだと、ネクストは頭を抱えた

「・・・んんん？」

しかしあることを思い出した

「あの隕石はどうなつてる？」

「それなら、これから行く」

ニヤつきながらウォルターは、足早にその場を離れようとした

「あ、待てよ！」

ネクストは、それをとりあえず追い掛けていった

「お前らも来い！」

ウォルターの一言に、三人も着いてきた

そんなジオン連中をチラリと見て、ネクストはため息を吐いた

「俺、大丈夫かな」

## 奇々怪々機々械々

「うーむ・・・モビルスーツ？だよなあ？」

グレッタクリーはポツリと呟いた

荒野にポツンとある大きめな集落、アイアンフィスト

ここはその最南端

そこに一つの隕石が落ちた

割ったら中から巨大な人型の何かが現れた

宇宙世紀に生きる人間なら、それはモビルスーツだと考える

だが実際にモビルスーツを駆る人間からすれば、それはモビルスーツとは程遠い代物のように見える

「・・・アレがモビルスーツに見える？目玉機能してないんじゃないの？」

グレッタクリーの独り言に、アウラが容赦ない一言で返した

そう、アウラの言う通り、隕石から現れたその巨大な人型物体はモビルスーツと呼ぶ

には余りにも形が歪だった

関節は輪状で、中身はスカスカ

片手の指は六本、人間より一本余分に多い

頭部の形相も禍々しい

全体的に生物的で、機械の塊であるモビルスーツとはデザインからして根本的に違う  
ネクストがウォルターに質問を投げ掛ける

「これ、隕石から出てきたんだよな？」

「ああ、そうだ、間違いなくコイツは隕石の中に埋まっていたんだ」

「そんなことする意味は？」

「普通ないな」

出自も、かなり異常だ

何故か宇宙から隕石の中で降ってきた

最早この不思議な物はモビルスーツである方がおかしいように思える

「ところで、腕が若干削れてないか？」

「ああ、修理の連中が材質を調べるためにサンプルを取っていったんだ」

見れば、右手の上腕に引っ掻いたかのような傷痕があった

多分割った後機械にかけて分析しているのだろう

「五分前に作業を終わらせたそうだが．．．来たか」

ウォルターが振り向くと、数人の作業服姿の男が歩いてきた

彼らも、アイアンフィストの住人だろう

恐らく彼らこそ、この人型の何かの材質を調べている者達だ

「ウォルター大尉、分析結果が．．．」

「おう、ご苦労だったな」

ウォルターが作業服の一人に話を聞こうと向きを変えた、その瞬間だった

「お、おとおおおお?!」

ネクストの驚愕の叫びがその場の全員の鼓膜を叩いた

「ど、どうした!」

グレックリーがそちらへ走って行った

「何が．．．」

「コバック大尉!こちらへ．．．!」

怪訝な顔をしたウォルターを、レイゼンが呼ぶ

やがて、作業服の団体を全員連れたウォルターがその場に到着した

そこは、謎の人型の右側

ちょうど、削れた上腕が見える位置である

「バカな・・・トリックか・・・？」

ウォルターがポツリと呟く

その声音には驚きが含まれていた

「そんな、あんなに削ったのに・・・」

作業服の男の一人も呟く

その声音には恐怖が込められていた

ネクストが、その状況を一言で表す

「・・・腕が、綺麗に直ってやがる！」

ついさつきまで引つ掻き傷が痛々しく付いていたモビルスーツモドキの右手は、もはや傷の面影もなかった

元からそうだったとばかりに、光沢のある文字通り無傷の表面を晒している

「再生してるのか・・・？」

「わからんが多分そうだ、それもさっきの数分間でだ」

「不気味だ・・・」

グレックリーとレイゼンが憶測を語り始める

モビルスーツのパイロットである彼等が恐れる程、状況は異常だった

「コイツ、生きてるのか?」

恐る恐る声を絞り出したネクスト

その質問に答えられる者は、いない

真つ暗い空間

その入り口が、モビルスーツモドキの首もとにあつた

ちようど胸部の中身にあたるその空間は、モビルスーツ的に言うならばコクピットだ  
ろう

座席が無いように見えれば操縦のためのレバーも無いように見えるが

「誰が入る?」

ウォルターが聞いた

首周りに、複数人の人間が、落ちないような体勢でその入り口を眺めていた

ウォルターはその複数人に聞いたのだ

誰もが、先程の光景と騒動ですつかり怖じ気づいていた

目を離したら傷が完全回復するような代物のコクピットなの  
いやコクピットではなく内部と言った方が正しいのだろうか  
とにかくその空間に入るのに積極的な人間は一人もいなかった  
かなり得体の知れない、とんでもなく不気味な物体の中に突入せねばならないのだ  
彼等の反応も無理ない

「・・・私が」

それを見かねて、一人の少女が片手を挙げた

アウラ・ドレインバーグスだった

「私が行く」

「いや、俺に行かせてくれ」

静かな決意と覚悟を宿したその目を見て、つい数秒前までへっぴり腰だったネクスト  
が声をあげた

「何で」

「俺は・・・」

「アンタ、モビルスーツに乗ったこと無いじゃん」

「だからだよ、わかんないのか」

睨み付けるアウラと、それに答えるネクスト

見かねたウォルターがネクストに質問をする

「アウラの言う通りブレイクにはモビルスーツの操縦経験はない、お前がコイツに乗る理由はあるのか？」

凍てついた視線で見てるアウラから目を逸らし、ネクストはそれに答えた

「コイツのコクピットに入ったら何が起こるかわからない、アンタ等モビルスーツパイロットに万が一が起きたらアイアンフィストは困るんだろ」

「そうだ」

「なら根無し草で何もできない俺が一番適任だ」

視線を暗闇に移す

正直、この中身に恐れはある

しかしネクストは、自分の恐怖よりアイアンフィストの不利益を重く見た

「お前男気あるじゃん！すげえぜ！」

「大丈夫か？気を付けろよ」

「・・・すまないな」

グレックリーが褒め、レイゼンが心配する

そしてウォルターが謝罪する

時刻は既に夕方、陽は西にゆつくりと沈む

夕焼けに照らされて、ネクストの爽やかな笑顔が光った

「もしもの時は助けてくれよ！」

そう言うが早いか、ネクストは首もとに大口を開いて待つ暗闇に飛び込んだ

「あ、待て！」

アウラが止めようとする

しかし、ネクストの姿はすでに無かった

暗闇へ落ちたはいいが、足が地面に付かない

落ち続けているとしたら、自分は飛び降り自殺したのと同じだ

「(ハ、ハ)は……」

しかし、現実はそのままで非情ではなかった

手首足首、そして首に圧迫感を覚える

その瞬間に周りが一気に明るくなった

「なんだ．．．これ．．．」

ネクストは足下を見た

正確には、足の下を

「浮いてる！」

足が地面に付かなかつた理由が判明した

コクピットの中らしき球体の中心で、ネクストが浮いていたからだ

周りを見渡すと、それはアイアンファーストの景色だった

「ぜ、全天周囲モニターか？」

聞いたことがある

第二世代のモビルスーツから導入された、コクピットに機体の外部の景色を360度  
写し出す全天周囲モニターというものがあると

「どーやって動かすんだ．．．？」

動作できるかを確認しようと、ネクストは周りを見回した

「わわっ！」

「うおっ!？」

「ひゃあっ！」

「ぐッ!？」

恐らくまだモビルスーツモドキの首周りにいたのだろう、仲間達の悲鳴が聞こえた  
「や、やべっ!?!」

慌てて動きを止める

動きを止めた瞬間、ネクストは体に違和感を覚えた

どうやら首の圧迫感の正体は、首に付けられた首輪のようだ

ネクストが首を動かすとこの人型の何かの頭部が連動して動くようになってい  
らしい

これ以上首の近くにいる皆に迷惑がかからないよう視線だけを動かして自分自身の  
体を見ると、両手両足にリングが嵌められているのがわかった

「これも、連動するの?」

ネクストがそう言いながら指を軽く動かす

すると、人型の何かの片手がゆっくり持ち上がったではないか

首とは違い、腕は指で動かせるようだ

だんだんと楽しくなってきた

ゲーム感覚だ

「さーで、次はどこを・・・」

「ブレイク!」

ウォルターの声が、コクピットに雪崩れ込んだ

ネクストは上に視線を向けた

外に繋がる穴から顔を覗かせたウォルターが、真っ直ぐネクストを見ていた

「よく動かせたな！」

「お、おう」

突然の称賛の言葉に、ネクストも言葉が詰まってしまふ

正直、子供が遊ぶバーチャルゲームのような感じだったのに、褒められてしまった

「すっげえなネクスト！隕石から出てきたゲテモノを自由自在に動かすなんてよお！」

「モビルスーツパイロットの才能があるな」

グレックリーとレイゼンも、穴の縁に手を引つ搔けてネクストに顔を見せる

「どいて」

「おっと、すまん」

「あ、ごめんなアウラ！」

「落ちるなよ」

そして全員が穴から離れると、今度はアウラの顔が現れる

やはり凍てつく視線でネクストをじっと見てきた

「よ、よお・・・」

「・・・立派よ」

「えっ？」

「それじゃ」

それだけ言うと、アウラも去ってしまった

「あー・・・」

ネクストは、一瞬だけ褒めてくれた彼女の表情を思い出した

「・・・可愛かったなア・・・」

「よし、ロープ垂らすぞ」

「あー頼むー！」

身体各部のリングを外し、ネクストは穴から降ろされた綱を掴んだ

それに掴まって持ち上げられる最中、ネクストはコクピットの方を、つまり下を見た

「なんなんだろうな、コイツは・・・」

その一言に答えられる者は、いなかった

## 輝く夜に

先ほどまで暮れかかっていた陽は最早完全に沈みきり、辺りには夜闇が広がっていた。ネクストは、隕石の破片に寄り掛かっていた。

モビルスーツモドキが中から現れた巨大な隕石だ、アイアンフィストに直接的な被害が出なかったのが不思議なくらいだった。

隕石を割ったザクはもうそこから動かさされていて、この隕石の近くにはネクストとモビルスーツモドキしかいなかった。

夜は静かなものだった。

昼間はなかなか騒がしかったアイアンフィストも、夜になれば眠るように静かになつてしまった。

ネクストは持つてきたカンテラを、逆の手に持った紙が照らされる位置に近付ける。あのモビルスーツモドキの材質の分析結果だ。

あれの腕をゴリゴリ削った後に機械にかけて出てきたデータを書き連ねたものだったが、結果は芳しくない。

「ガンダリウムでも、スチール合金でも、チタン合金でもない……」  
ボソボソと紙の内容を朗読する

声に出しても出さなくても信じられない

モビルスーツが採用している装甲材はこの三つだ

特殊な例もあるにはあるが、あの妙な物体の材質がその三つではないということは、  
ますますモビルスーツから離れている証だ

極めつけは、

「……既存の物質データに、該当するものはなし」

あのモビルスーツモドキが全く未知の素材にて構成されているという事を示したその文章だ

つまり、地球どころかその周りを回る小惑星から採れるものでもないわけだ

「不気味だなあ……」

率直に呟く

正直、今までの常識を覆された気分だ

いや、自分は別にモビルスーツの専門家でもなんでもないのだが、それでもこのモビルスーツの意味不明さは異常だ

非現実の代物ならまだ笑い話にできる

なまじ現実存在するから、拭いきれない何かを感じてしまう

「・・・何してんの?」

「おわっ」

突然背中から声をかけられ、思わず驚くネクスト

呆けた顔で振り向くと、女が一人、手を振りながら歩いて来る

リーア・カストレルだ

「部屋に入らないと風邪引くよ?」

隕石に寄り掛かるネクストを見て、リーアは心配そうに呟いた

「ああ、いや、気になることがあってな」

「あのガンダムみたいなののこと?」

「そう、それ」

ネクストが右手の人差し指でトリコロールの巨人を差す

自分がやった起動実験以外ではピクリとも動かないので、とりあえず生き物の類では

ないのは確かだ

指と腕を降ろして、ネクスト・ブレイクは不思議そうな表情をした

「このモビルスーツモドキは・・・」

「モビルスーツモドキ? 呼びにくくない?」

話の腰を凄まじい勢いでへし折られ、ネクストは閉口する

リーアはそれに構わず続けた

「ナガレボシ・・・なんてどうかな？」

「ナガレボシ？」

「そう、流星に乗ってやってきたから、ナガレボシ！」

瞬きを二回して、ポカーンと口を開けて、それからネクストはようやく反応を返した

「・・・いいじゃん」

「でしょ？」

「うん、悪くないセンスだ」

「でしょでしょ!？」

跳び跳ねるように嬉しがるリーアを尻目に、ネクストは再び正体不明のソレを見上げた

「なあ」

そして今度はリーアを見る

「何？」

「俺とコイツ、どっちのが先にここに来た？」

「ネクストの方だよ」

そっか、と呟いて、ネクストは微笑んだ

彼にとつてこのアイアンフィストの後輩は、この不思議な物体だけというわけだ

もしかしたら自分の方が後輩になった可能性もあつたのかと考えると、可笑しくなつてくる

ふとリーアを見ると、キョトンとした表情をこていた

それもそうだ、変な質問をしてきた奴がいきなりニヤニヤし始めたのだから

「リーアは、どういう経緯でここへ？」

話題を変える

「君と同じ！」

「俺と？」

チンピラに追つ掛けられた挙げ句荷物落として行き倒れかけたネクストと同じような経緯なのなら、少し間抜けな気がしてくる

「バックパッカーしてたら水が全部無くなっちゃって死にかけた」

「で、拾われた？」

「うん、町長さんに」

町長

アイアンフィストの頭役だろう、そういえば顔を合わせてもいない

妙なのに構いつ切りで全く気付かなかつたが、アイアンフィストの住人とまともに会話をしていない気がする

そのリーアを助けた町長をはじめとしたアイアンフィストの皆さんに、正式な引つ越しの挨拶回りをしておく必要がある

それもなるべく早く

「この住み心地はどうだ？」

「いいよ、結構ね」

迷い無く言つてのけたリーア

その自信満々の一言に、ネクストは挨拶回りを決意した

「ジオン残党は、どうだ？」

「私より先輩だけど、皆信頼しきつてる……もう、この家族だよ」

分かりやすく言つてくれるリーア

その堂々とした言葉に、ネクストはウォルターを信頼することにした

「じゃあ、俺も、そんな風に……」

「うん、受け入れてもらえるよ、きつと」

「……ありがとう」

はつきりと言つた、リーア

ネクストは、迷いを捨てることにした

住んでみよう、ここに

「俺・・・」

「うん？」

「ここに住むことにしたよ」

「そう?!じゃあ、よろしくね!」

荒野にポツンと生きることの厳しさはあるかもしれないが、それでもネクストはリーアを信じてみることにした

思えば、ここではまだまだ、やることがありそうだ

「こっちこそ、よろしく」

お互いに握手をしようとした時、ネクストは目線をリーアの顔から上へ逸らした  
「えっ・・・あつ」

何事かと自分も空を見上げて、リーアは声をあげた

「流星群だー!」

「ああ」

「ネクスト、すごいよ!綺麗だよ!」

満点の星空に、流れる水のように同じ方向へ移動する無数の天体達

いくつもの流れ星が飛んでいくその姿を、どんな絵画にも勝る素晴らしき景色を、その目に焼き付けるネクスト

だが、またもナガレボシの方へ目を向けてしまう

苦笑して、彼は呟いた

「よろしくな」

ナガレボシはなにも答えず、ただそこに佇むだけだった

## 唐突な硝煙の香り

「ここだ」

ウオルターが訪れたのは、周りと比べて一際も二際も大きい煉瓦の建物だ  
ネクストの目的地でもある

「はあく、でっけーな」

「町長の家だ、他とは違うさ」

口角をゆるく上げて、ウオルターは応えた

そして口角を上げたまま、ウオルターは聞いた

「それにしても、殊勝だな．．．ここに住む決心はついたんだっただか」

「ああ」

「町長と挨拶するために俺の手を煩わせるとはな」

「迷惑だったか？」

ネクストは一言そう聞いた

「いや大歓迎だ、二重の意味でな」

「・・・そうか、ありがとう」

心の底から、ネクストは安堵した

元からその気は無いとはいえ、血の気の多いはずのジオン残党をここまで眩しい人間にできるこの町に住めることに、感謝した

旅の準備が済むまでなんてケチ臭いことは言わず、永住してしまうのも良いかもしれない

「いい町だな」

ネクストがそう呟いた

何かが風を切るような音がした

気がした

「伏せろ！」

ウォルターがネクストを突き飛ばしながら地面に飛び込む

ネクストは転倒しながら顔を腕で覆った

直後二人のすぐそばにあった家屋が弾けた

窓枠や粉砕された家具が、破片の雨となり通りに降り注ぐ

それはあまりにも唐突だった

「ぐあああッ!？」

破片と衝撃波に、ネクストが情けない声をあげる

ウォルターは後頭部を頭を手で覆って黙って耐えた

幸い、大きな物体は二人には降ってこなかった

約二秒のジェノサイドの後に、まずウォルターが素早く立ち上がった

ネクストには惨劇が何分にも感じた

「おいブレイク、起きろ」

「クソ、なんなんだ・・・!」

ウォルターの手を借りて、ネクストが立ち上がる

突然の出来事に、ネクストの頭は混乱している

二人とも怪我はないが、この状況ではさらに怪我をしかねない

「町長の家が!？」

「ブレイク、落ち着け」

「これが落ち着いてられるかつ!」

そして、町長の家は粉々だった

先程に見せたあの立派な建物は、今は残骸と呼ぶのもおこがましい

「早く、早く中の人を助けないと・・・」

ネクストが手近な瓦礫に手を伸ばした

その肩を掴んでから、もう片方の手で、ウォルターはある一点を指差した

「ブレイク、あそこを見るんだ」

「・・・ッ?!」

瓦礫の隙間に見えたのは、この家のある一室の光景

それは白い絨毯にぶちまけられた、粘性のある液体だった

磨り潰されて、ぐしやぐしやになった、真っ赤なジェルだ

「・・・そんな」

膝から崩れ落ちるネクスト

それを見下ろして、ウォルターは告げた

「( )から辺にジオン残党はいない」

「じゃあ・・・なんだってんだよ・・・?」

凍りついた表情で、ネクストは聞いた

ウォルターは答えた

「連邦による、面白半分の残党狩りだ」

「・・・よりによって・・・」

地球連邦軍がかなり腐敗していたことは、記憶を失って日が浅いネクストでも知っていた

そして激化するジオン残党の活動を抑止するため、連邦が積極的にジオン残党を攻撃し続けていることも、ネクストは知っていた

今回、その二つが上手いこと組み合わせつつ

「なんでこんな平和な町にモビルスーツの武器を撃ち込んだよっ!」

苛立ち混じりに吐き出したネクストの台詞に、ウォルターはこう答えた

「言っただろう、面白半分だと」

「・・・遊びつてことか」

「連邦高官の息子によくそう言うのがある、ましてやここは記録に残りづらい地域だ・・・後はわかるな?」

ウォルターは小さな箱を一つ、ネクストに放り投げた

受け取り、眺めると、ボタンや穴がいくつもあ

無線機だ

「チャンネルは俺のヤツに合わせてある、そこの赤いボタンを押し続ければ繋がる」

「どこへいくんだよ・・・?」

「迎撃するに決まってる、そのために俺達はここに居座ってたんだ」

ウォルターは駆け出した

「流れ弾に気を付けろ!」

最後にそう言い残して、ジオン残党のリーダーは走り去った

記憶喪失のバックパッカーは、その場に取り残された

ネクストは、自分が情けなくなつた

無線機を握り締め、何もできない自らの無力さを噛み締めた

何も、できないじゃないか

世話になるからと挨拶に行った相手は呆気なく死に、最初から最後まで気を使つてく

れた男はまさに今死地へ向かおうとしている

それなのに、自分はここで座り込んだまま

助けを求めるための連絡手段まで渡されてしまう始末

「ちつくしょう・・・」

わかっている

自分が余計な行動をして彼等の足を引っ張る可能性があることは重々承知だ

だがしかし

だが、しかし

何かしたかった

何かを、したかった

それはアイアンフィストへの最初の恩返しをしたいという健気な気持ちだったのか  
もしれない

それは自らの無力さから逃げ出すための後ろ向きな気持ちだったのかもしれない

それはリーア達に良いところを見せたいという下心だらけの気持ちだったのかもしれない

だがしかし

「ふざっけんなよッ！」

怒りがないことは、なかったのだ

「ウォルター！」

「ブレイクか、今どこに？」

「ナガレボシの中！」

## ネクスト・ブレイクの記憶

気が付いたら、そこは名前も知らない病院の病室だった

というか、覚えている限り一番古い記憶がその場所だった

地球に降下したエウーゴあるいは現地のジオン残党とティターンズの戦闘に巻き込まれてしまったらしい

そして俺の身元は不明

俺の家族もいなくなってた、多分巻き込まれて死んだ

そして俺は、記憶を失っていた

スプーンの使い方や宇宙世紀の歴史とか、知識は残っている

だが、子供の頃の夢や学生時代の思い出などのエピソード記憶は、すっかり無くなっていた

そして怪我が治った頃、息子が俺と同じ事案に巻き込まれて行方不明になったという老夫婦に引き取られた

俺はその時、もう一人立ちして問題ない年齢だったが、息子の面影を俺に重ねる夫婦

の姿が不憫になり、お言葉に甘えた

俺はその時から、『名無し』から老夫婦の息子と同じ名前の『エドワード・ブレイク』を名乗るようになった

老夫婦はかなりの資産家で、私用コロニーすら持っていた

なので生活には困らず、少々好き勝手ができた

なので旅をしようとしてみた

地球の全てを見て、病室以前の『俺』を……いや、『俺になる前の誰か』を殺した遠因のことを少しでも知ってみたいと思った

老夫婦は俺のワガママも二つ返事で許可してくれた

諸々の支度やプランを整えていた間にグリプス戦役が終わって、ティターンズは潰れた

俺の知りうる限りじゃ、ティターンズは民間人の命も省みない連中とのことだ

多分ティターンズのせいで『俺の前』は死んだんだろう

そう思うと、ジャミトフ・ハイマンやバスク・オムやパパテマス・シロツコにざまみろと言ってみたくなる

民草蔑ろにして軍が立ち行けるわけねーだろ

自己中心的過ぎる

そして、そんな連中を産み出した連邦軍を、俺は嫌いになった

そんなわけで、俺が最初に選んだ観光場所はオーストラリアのシドニーだ  
一年戦争の前は、経済や文化が素晴らしいとても豊かな都市だったそう  
そう、だったそう

俺は湖と化したシドニーの写真をカメラに収めた

シドニーは、ジオン公国のコロニー落としの標的にされた

大都市一個を丸ごと宇宙構造物にしたようなスペースコロニーを、ジオンは地球に落  
としやがったのだ

穴ぼこシドニーは、ジオンの悪意の象徴だ

そしてジオン残党は、スペースノイドの独立のためにはそれが正しかったと胸を張つ  
て言い張っている

こいつらも、自己中心的だ

俺はジオンも嫌いになった

次に選んだのは、地球連邦の本丸とも言うべき場所ダブリンだった

ハマーン・カーン率いるネオジオンが連邦軍と激しい戦いを繰り広げていた頃だつた  
すわ二度目の戦闘巻き込まれがないかビクビクしながら、俺はダブリンに向かった  
そしたらコロニーの実物を地球で眺める羽目になった

ネオジオンは、ダブリンにコロニー落としを敢行したのだ

オーストラリアでコロニー落としの傷跡を見てきた後にこれだ、嫌すぎるタイムリーだった

流石の老夫婦も、義理の息子が危険な目に遭わぬよう、俺を呼び戻した

結局あんなアホすぎる真似をしておいて目的を達せぬままネオジオンは崩壊し、連邦はさらにスペーススノイドへの監視の目を強めていった

ジオンも連邦、双方共に巻き込まれる連中のことが頭から離れているらしかった

老夫婦はぼっくりと亡くなった

最期まで彼らは、本物の息子に会えぬままだった

残された遺産のうち、コロニーをスペーススノイドに無償で譲り渡して、一部の金を手元に残して、俺は全てを捨てた

旅をしたかった

まだ見えないモノが沢山あった

思い出を作りたかった

『記憶を失う前の誰か』でもなく

『老夫婦の息子の代わり』でもない

『俺自身』を得たかった

だから俺は『次』を求めた

『記憶を失う前の誰か』の次へ、『老夫婦の息子の代わり』の次へ

だから『ネクスト』だ

だから『ネクスト・ブレイク』と名を変えた

自分でも安直だと思えたが、分かりやすい方がいいのだ

次はどこへ向かおう

どんな思い出を作っていこう

連邦やジオンなんかと関わらない、そんな場所だとい

## 地を駆けるスピードスター

「聞こえるかブレイク、連邦のモビルスーツはジム改が1、ジムⅡが3だ」  
「なんで新しい方が多いんだよ」

ウォルターが早口で伝えた情報に対して、ネクストは毒づいた

その間に、腕やら足やらに輪っかを付けていく

この輪っかこそが、今乗っている未知なる物体を動かす鍵なのだ

「連邦なりの事情があるんだろう」

ウォルターは淡々と答えた

無線機の向こうは何やら騒がしく、ウォルター以外の声も聞こえてきた

「・・・すまんが、頼む」

「ああ、的代わりにはなる」

「そうだな・・・すぐに向かう、持ちこたえてくれ」

「わかった」

ネクストが全ての機器を装着する

すると、暗いコクピットには360度周りの景色が写った

球体状のコクピットの中心へ、パイロットがゆっくりと浮かび上がった

種も仕掛けもない、この機体の機能の一つだ

「さて・・・」

ウォルターから聞いた情報では、ナガレボシが向いている方向の向こう側から連邦のモビルスーツが接近してきているらしい

ネクストの仕事は、ソイツらの足止めである

自分から言い出したこととはいえ、生半可に挑むことは許されない

死地に飛び込む、危険な行為なのだ

だが、ネクストはそれでもやりたいと思った

そして、そのための力もあった

「ナガレボシ、出る！」

ネクストが吠え、ナガレボシが大きく一步を踏み出した

ケイロン中尉の額から、冷や汗が一筋垂れた

頬を通り、顎から落ちたその汗は、彼の座るコクピットシートに染み込む

「何、何やってくれてんだッ！」

前方のジムⅡ三機に対し、絞り込むように唸る

恐怖と怒りが交ぜになった感情が、脳味噌のなかでスパークしていた

そして、その感情が生まれた原因である目の前のジムⅡのパイロットが、ケイロンの神経を逆撫でする声で通信してきた

「やだなあ先輩、ジオン残党に発砲しただけですよ」

「先手必勝って言うじゃないですか」

彼らはボンボンという人種だ

政府高官やらなんやらの、ドラ息子共だ

ケイロンの所属する基地には、そのドラ息子共が親のコネと七光りと財力でもって彼らが居座っている

隠す気のない厄介払いである

しかも正規の連邦軍の試験訓練をかなり優しくしたような感じで修了しているため、れつきとした軍人として扱われる

つまり兵器を暇潰しの遊び道具として使えるわけだ

「この野郎共が……!」

ケイロンは小さく呟いた

大声で怒鳴ろうものなら、彼らは親にケイロンのことをチクリ、ケイロンに何かしら不利益なことをしてくるだろう

はた迷惑な事この上ない

連邦の腐敗ここに極まりだ

彼らボンボンの集まりは、一部隊として名前を与えられている

クラウン隊だったか、王冠などという名前を付けられて、彼らはもつと調子に乗った親の権力を自分のもののように振り回し、階級以上の態度をとっている

敵より嫌な味方だ

ケイロンはクラウン隊がととても嫌いだった

こんな奴原が連邦に溢れているから少し前にエウーゴなんていうものが誕生してしまつたのだ

ジオン残党掃討のために出撃するクラウン隊の奴等のお目付け役なんか受けなきやよかつた

こんなことになるなら、他の適当なパイロットにパスしておけばよかつた

「相手に降伏勧告を出し、あっちが無抵抗のまま大人しくしてくれれば弾の一発も無駄にせず終わるんだ！撃つのは向こうが撃つた後、まだ確信に至っていない段階でぶつ放したらテロリストと変わらない！作戦の前に言ったはずだろ!？」

「ウダウダうつせえなあ」

「確かにそうっすけどお、それがどうしたんですかー？」

クラウン隊のパイロットが、上官に使ってはいけないような言葉でケイロンに反論した

いや、最早反論とすらいえないようなものだった

「俺達は天下の地球連邦軍ですよ？一回や二回なら問題ないじゃないですか！」

「そうそう、誰も文句言えやしないって」

「俺達に逆らえる連中なんていやしいからなあ」

おちやらかしたように話す連中に対し、ケイロンの怒りがさらに積もる

「ダメエら・・・!!」

果たしてコイツらを、生かしておいて良いのだろうか？

「いい加減に・・・」

「うお、なんだ？」

「どうした？」

「なんか・・・来るぞ！」

クラウン隊の三人が、口々に驚きの声を上げた

ケイロンはその声を聞き、レーダーを見た

その出自から、クラウン隊の方がケイロン達正規軍のものより良いモビルスーツに乗れる

だから、レーダーもクラウン隊のジムⅡの方が性能がいいはずだ

だから、ジム改のレーダーにソレが映るのには少々時間がかかった

「速い・・・ッ！」

それは、高速で移動していた

「スラスターでも使っているのか！」

ケイロンは歯噛みし、ジム改のシールドをソレの方向に向けた

「へ・・・へへ・・・来やがったな」

「基地に缶詰めで鬱憤が溜まってたんだ、相手してくれよな・・・！」

クラウン隊の連中も、各々の装備した武器をその方向へ向けた

そして、ケイロンは見る

「・・・なんだあれは・・・？」

もうもうと昇る巻き上げられた土煙

そして、

「なんなんだ・・・あれは!？」

とんでもなく高速で走ってくる、異形のモビルスーツに似た何かを

「うぐおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ  
!?!?!?!?!」

ネクストの望み通り走り出したナガレボシ

しかしその速さは尋常ではなかった

堅い地面に杭のように突き刺さる足

巻き上げられた土砂の量は、想像を絶するだろう

足音は最早、騒音などという生易しいものではない

ナガレボシの脚力は、ネクストの想像を遥かに越えていた

音速に匹敵する速さだった

目の前に見えてくるジムの部隊

「うわわわ止まれ止まれ止まれーッ!?!」

だが不幸にも、ネクストは止め方を知らなかった

ジムⅡがマシンガンをばら撒いてくる

ジム改がバズーカを撃ってくる

バズーカを避け、マシンガンを多少食らっても、ナガレボシはまだ進む

「衝突は・・・避けられないか!」

どうやら、ナガレボシは連邦の90ミリマシンガンでは損傷を受けないらしい

「どうせぶつかるなら・・・」

ネクストは拳を思いきり握った

フィンガーレスグロブが擦れ合い、ギチギチと音をたてる

連動して、ナガレボシも拳骨を作り上げた

六本の指から構成される握り拳は歪だったが、ネクストは多少の頼もしさを感じた

そして、肘を引き、シールドで防御を取ろうとする哀れなジムⅡにそのままの速さで

突撃していった

「食らい、やがれ!!!」

ナガレボシの規格外のスピード、ナガレボシの規格外のパワー、ナガレボシの規格外

のタフネス

それらが全て合わさった拳が、一撃が、角張った盾のど真ん中に突き込まれる

凄まじく乱暴な威力のパンチは、ジムⅡ一機を蹴られたボールのように弾き飛ばした宙で一回転し、肩から地面に落ちて、地表を削りながら滑って減速する連邦のモビルスーツ

仲間と思わしき残り三機が、シールドごとぶん殴られたその味方の方を凝視していた「はあ……はあ……なるほどな」

片手を振り抜いた姿勢のまま、ナガレボシが顔を上げる

顔にある眼のような二つの発光体を爛々と光らせて、もう一度拳を握った

「イよっしゃあッ！俺が、相手だ！」

ネクストの声に呼応するかのようになり、ナガレボシの両目が強く光った

# 血戦は大地にて

マシンガンの弾がモビルスーツに良く似たモノに襲い掛かる  
だが、ナガレボシは地を蹴って跳躍した

さつきまでナガレボシがいた地点に、マシンガンが着弾する  
飛び上がった白い異形は、左足を曲げた

落下地点は、ジムⅡの真上

「でえりやあッ！」

ネクストの掛け声と共に、ナガレボシの足裏が連邦のモビルスーツに向かって降つて  
きた

「わわ、うわあッ!?!」

パイロットが慌ててシールドをマウントした左腕を掲げた

飛び蹴りはジムⅡの頑丈なシールドを揺らがし、蹴りの勢いでジムは真後ろに倒れた  
砂埃が舞う

そのままナガレボシはジムの上に馬乗りになる

「あああああああー！」

クラウン隊のパイロットが半狂乱になりながらトリガーを引く

頭部バルカンが火を吹くが、ロクに狙いも定められていない射撃が当たるはずもない

明後日の方向へ飛ぶ弾を無視し、ナガレボシは拳を降り下ろした

辺りをつんざく音が鳴り、モビルスーツの胸部が歪む

殴られてバウンドするジムⅡ

ナガレボシは、今度は思い切り拳を叩き込んだ

ジムⅡの頭は特徴的なゴーグルカメラと共に、グシャグシャに砕ける

「二つー！」

ナガレボシは六本の指で歪んだ握り拳を作り、残りの敵に見せ付けるように突き出した

「まだまだあー！」

何てことだ

ジオン残党はあんな化物を持っていたのか

ケイロンの表情が恐怖に歪んだ

「クソ、なんだコイツ」

いくら戦闘経験の皆無なボンボンの駆る雑魚機体と言えど、モビルスーツを素手で殴り壊したりブツ飛ばしたりできるなんて、最早怪物以外に言いようがない

アナハイムのゲテモノ機体でも、もう少し自重した性能のハズだ

「マジでなんなんだよー」

ケイロンは心からの叫びと同時にバズーカを向けた

恐るべきことにあの化物、モビルスーツの持つ90mmマシンガンでは目立った傷を付けられない

なので頼みの綱はケイロンの機体の持つバズーカだ

ビームサーベルで近付けば殴り殺されるのは目に見えているので、遠くからバズーカで倒すしかないのだ

バズーカのロックオンを終えたときには、連れてきた最後のクラウン隊機が乱暴な片足蹴りでしばかれていた

「ぎゃああああつー」

とても政府高官やらの御息とは思えない声を挙げながら、ジムⅡとそのパイロットは蹴っ飛ばされた

だがヤツが尊い犠牲となったことで、ケイロンがロックオンする時間は充分稼げた  
そしてケイロンは、ジム改のトリガーを、押した

高速で移動する巨大弾頭

噴煙を引きながら飛んでいくそれは、あっさりと避けられた

「ふざけやがって・・・」

「うおおおおおー」

ナガレボシの左ストレートが敵モビルスーツに叩き込まれる

だが、ジム改のパイロットはシールドでそのパンチを防いだ

強烈な衝撃を受け止め、ジムはビームサーベルを振りかぶる

ピンクの光の剣は、その目映い切っ先でナガレボシの表面を深々と抉った

「ぬわあッ!?!」

斬られた脇腹を抑え、ナガレボシが後ろへ跳んだ

だが着地の瞬間、バズーカの弾が迫る

「お、おおおおおあッ  
!!!!!!」

上体を大きく逸らしてバズーカを避ける

更に撃たれたバズーカも、同じ要領で避けた

すると、背中にマシンガンが何発も当たる

振り向くと、大きくへこんだシールドを持ったジムⅡがいた

最初に吹っ飛ばした敵だ、機体もパイロットもまだ動けるらしい

「このままじゃあ・・・」

見れば、敵モビルスーツは一機も沈黙していない

全て生きている

敵はシールドでこちらの攻撃を防げるが、こちらにはそんなものはない

マシンガンやバルカンは怖くないが、バズーカとビームサーベルはダメージを受けて

しまう

しかし、徒手空拳ではシールドを抜くことはできない

そして、徒手空拳では与えられるダメージに限りがある

「なにか、なにか武器はねえのか!？」

全天周囲モニターでナガレボシの全身をくまなく見回すが、それらしきものはない

だが、視線を巡らす中、ネクストは自分の腕輪にボタンのような突起があることに気が

が付いた

「クツソ、頼むぞー！」

左手を伸ばし、右手の輪っかの突起を強く押す

これで何も無いなら、一巻の終わりだ

「何か出ろツ！」

ネクストの声に應えるように、ナガレボシが腿の裏から一本の短い棒を引き抜いた

ナガレボシが棒を一振りすると、棒の先端から白い光が伸びた

それは、真っ白いビームサーベルだった

「そんなこけおどしでえー！」

ジムⅡがシールドを前に突き出して突撃してくる

スラスターを使って高速で突貫してくるつもりだ

「お、りゃあああああああ!!!」

だがナガレボシは、真上に上げた腕を全力で降り下ろした

ジムⅡのシールドは、一瞬にして引き裂かれる

そう、シールドを持っていた腕ごと

シールドを失ったモビルスーツに、ナガレボシがもう一度サーベルを振るう  
ジムⅡはサーベルを持った右腕も切り落とされた

「な、にいいいい!?!」

「りやああああああ!!」

「ごあつ!」

両手を失ったジムⅡの胸部に、ナガレボシの蹴りが炸裂する

ジムは真後ろに飛び、背中から着地した

頭部を砕かれたジムⅡがマシンガンを撃つが、避けられた揚げ匂に両手と頭を切り落とされる

「貴様ああああ!!」

最後のクラウン隊機がビームサーベルを持って接近する

横風ぎに迫るビームの刃を垂直跳びで回避し、そのまま空中から剣を振る

モビルスーツの首がすつ飛ぶ

「大人しく、してろ!」

ジムⅡの背後に着地したナガレボシは、あつという間に敵の両手を落とす

だめ押しに背中を蹴られたジムⅡは、あつさりと倒れた

その背後に、ジム改がビームサーベルを振り下ろす

「うわあ！」

振り向いたネクストは、横っ飛びに回避する

だが、ジム改はスラスターでナガレボシに肉薄してきた

「墜ちろー！」

連続で装甲を浅く斬ってくるビームサーベル

ネクストは戦闘のアマチュアだ

こんなに近付かれては、何度も避けられない

いずれはスタミナ切れで止まった所に、致命的な切り傷を付けられてしまうだろう

「チクシヨウ・・・やられてたまるか」

ネクストは拳を握った

負けたくなかった

死にたくなかった

戦闘になる以上、戦死する可能性などごまんとある

覚悟しなかった訳ではない

だがそれでも、ネクストは死にたくなかった

「終わりだ！」

## 大振りの一撃

だが、ナガレボシはビームサーベルでそれを受け止めた  
二つのサーベルの接点から、火花と膨大な光が溢れる

「何っ」

ケイロンの顔が、またもや青ざめた

「まだ、死にたく、ね、は、ん、だ、よおおおおおおおおおおオオオオオオオ  
オオオオオオオツツツツツ」

白い閃光の剣が、ピリッの閃光の剣ごと、敵を引き裂いた

ジム改のゴーグルアイが横一文字に真つ二つとなる

ナガレボシは左手にもサーベルを持った

二本の剣が、最後の敵の両手を溶断した

「撤退だ、撤退だあ!!」

ナガレボシに背を向け、無様な姿のジム部隊がスラスターを吹かして逃げていく

その後ろ姿と巻き上げられた砂と土を見送りながら、ネクストは息を吐いた  
ポケットに突っ込んでおいた通信機を引っ張りだし、耳にあてる

「あー、こちらネクスト・ブレイク」

「何も言うな、全部見てたぞ」

「そうか」

それだけのやり取りをした後、ウォルターは一言言った

「よくやった、ヒーロー」

「へっ……へへへ……」

通信が切られた後、ネクストはコクピットでにやけた

胸の中は、誇らしいものでいっぱいだった

「……筋肉痛になりそう……」

## 覚悟を決めた者

アイアンフィストの住人達が慌ただしく動いている

彼らは現在、連邦のモビルスーツによる攻撃を受けた自分達の住み処の修復しようとしていた

もつとも、攻撃から時間が経っていないため、瓦礫をどかすくらいしかできていない  
そろそろ陽が沈みきってしまう頃、街の中心に置かれた大鍋から香ばしい匂いが漂ってきた

作業に従事していた人達のための炊き出しだ

何人かの男女が、それぞれ別々の大鍋をお玉でかき回していた

中身は野菜や肉を使ったミルクシチューだった

乳白色に浮かぶ野菜が色鮮やかだ

肩を落としたアイアンフィストの住人達が、鍋の隣に置かれたテーブルから食器を取っていく

「はいはい、ちゃんと並んでね！向こうのテーブルでパンも配られてるよ！慌てず

しつかり食べなきやダメだよ！」

リーアが腕になみなみとシチューを注ぎながら行列に声をかけた

明るい語調の台詞、恐らく他の住人達を励ましているのだろう

しかし本人にも憔悴の色が少なからず見えた

見回すと、住人達は瓦礫に腰かけスプーンでシチューを啜っている

しかし、さも旨そうな笑顔を浮かべながら食う者は一人もいなかった

先程まで活気があつたアイアンフィストの建物は、いくつかが砕けていた

あの暖かい街の光景は、一瞬にして豹変してしまったのだ

「あ、ごめんなさい！今入れるから！」

いつの間にかシチューを注ぐ手が止まっていたことに気づき、リーアは申し訳なさそうにお腕を手を取った

その表情にも、他の住人と同じように、疲れが滲み出ている

一人の男が、とても巨大な建物の前で煙草を燻らせていた

その目は建物の方を見ておらず、むしろ建物から逸らしているように思えた

短くなった煙草を足下に放り、踏み潰す

呼吸を吐いたのは、煙草の煙を出すためか、それともため息か

「……ビーン、もう一本吸うか？」

神妙な面持ちで、別の男が近付いてくる

この街の用心棒の元締め、ウォルターだ

ウォルターは湯気のたつた腕を片手に、ビーンに声をかけた

「いや……いらない」

「そうか……」

煙草を拒否したビーンにウォルターが相づちを打ち、二人の間に長い沈黙が起きる

ウォルターはビーンから視線を外し、大きな建物に目を向けた

アイアンフィストが大規模な敵に襲われたときの切り札、元ジオン残党のモビルスー

ツ数機

それらが納められている格納庫は、奇跡的にも無事だった

アイアンフィストの建物の中でもかなり頑丈なモビルスーツドックだが、流石に連邦

のモビルスーツの攻撃に遭えばひとたまりもない

だが、こうしてモビルスーツドックは無事だった

守られるはずの街は大きな傷を負い、守る側のモビルスーツにはかすり傷一つなかつ

た

ウォルターの顔が険しくなる

「自分を責めるな、ウォルター」

「・・・ああ」

「こればかりは、運としか言えない」

ビーンは顔を動かした

動いた視線の先には、崩れた建物があつた

その建物は彼の家だった

アイアンフィストの、町長の家だった

あそこには誰もいない

生きている者は誰も

「運としか・・・な」

ビーンはポケットを漁った

しかしポケットの中に煙草が無いことを思い出すと、ポケットから手を出した

ウォルターは彼に葉巻を突き出した

それを受け取り、ビーンは火を付け、くわえる

「なあウォルター」

「なんだ」

「俺は、町長代理が務まるか？」

「できるヤ」

「ありがとう」

短い会話の応酬を区切り、ビーンは煙草を一度口から離した

その顔は先程の疲れきった表情から一変した

視線が鋭くなり、口も引き結べられる

「……町長代理として、改めて君達に頼む」

吸いきっていない葉巻を投げ捨て、ビーンはウォルターの顔を見た

彼もまた、覚悟の決まった表情をしていた

「アイアンフィストを、守ってくれ」

「わかった」

ウォルターは強く頷いた

「必ずやり遂げよう」

「オーライツオーライツオーライツ．．．はいOK!」

作業服の男たちのジェスチャーに従いながら、ネクストはナガレボシを移動させた  
ナガレボシが膝を折り、しゃがんだ

モビルスーツモドキが動きを止めたかと思うと、その首元からネクストが這い出てきた

「よくやったな、ブレイク!まさか勝ってしまうとは」

「ウォルター?」

いつの間にかナガレボシの足下に立っていたウォルターが、ネクストに声をかけた  
「凄まじい腕だったぞ」

ネクストはナガレボシから地面にゆっくり降りた

幸いにも突起や出っ張りの多い形状をしていたので、梯子のようにすると降りられた

「．．．連邦って、あんなことするんだな」

地面に立って早々に、ネクストは呟いた

独り言かウォルターに喋りかけたのか判別できなかったが、ウォルターは後者と判断して言う

「お世辞にも、俺達は彼らに都合のいい存在とは言えないが．．．」

「……ジオン残党を匿い、モビルスーツを多数保有している、大規模な地球への不法住居者か……」

「世間的には、俺達はそういうことになっている……だが、」

一泊置いて、ウォルターは言った

「いきなりこうまでされるのは、初めてだな」

その顔は、疲れきっていた

ネクストは歯を食い縛り、目を吊り上げ、拳を強く握った

「ふざけやがって……」

ウォルターは、その眩きは無視することにした

突っついてはいけない気がした

「ふざけやがって!!!」

怒りに燃えたネクストが、どこへともつかぬ暴言を口から吐き出す

空気を察したか、ナガレボシの周りで彷徨っていたアイアンフィストの作業員は彼から離れた場所に動いた

「一番偉けりや、誰にでもなんでもしていいってのかよ……力と多数の支持さえあれば、少数を潰していいってのかよ……」

拳を一層強く握り、空を見上げ、腹から叫ぶ

「ふざけんなよこの野郎!!あの人は静かに大人しくしてたんだぞ!それを!それを!それを!」

「・・・ブレイク・・・」

「ウォルター・・・俺は、戦う」

ネクストの目から、涙が一筋に流れた

怒りの形相を携えながら、ネクストはアイアンフィストのために悲しんでいた

そして、傲慢な者達に怒っていた

「アイアンフィストの明日のために、戦う!」

決意の瞳が、ウォルターを射抜く

「ネクスト・ブレイク」

ウォルターは彼の名を言った

しっかり、はつきり言った

「俺達に力を貸してくれ」

ウォルターは頭を下げた

ネクストの力を、彼は望んだ

「アイアンフィストを、共に守ってくれ」

答えは決まっていた

「ああ」

答えを求める必要はなかった

連邦もジオンもくだらない

彼らはここにいて、ここに生きている

奴等はそのを自分勝手に潰してこようとした

「ぜってーアイツら、ぶっ倒してやる」

ネクストはナガレボシを見上げた

星空に照らされて、その機体は輝いて見えた

## 獅子身中の虫

地球連邦軍基地

機体整備用の大型格納庫

無数のモビルスーツがところ狭しと並べられ、厳かに装甲に照明を反射させるその様は、地球圏を統べる絶対統治組織の力を誇示していた

その規模はとも恐ろしいものがあつたが、この基地は辺境のモノだ

これ以上の代物も、うじゃうじゃ存在するのだ

テイターンズやエウーゴによる内乱や、度重なるジオンの成れの果てからの攻撃を、連邦が退けることができたのも、納得である

かの一年戦争を除いて、この巨大すぎた化け物軍隊が大怪我を負った事例はない  
そう、彼らは敗北することはない

敗北しないので、余裕が出てくる

余裕が出てくると、組織の腐敗が始まってくる

この基地は、地球連邦の腐敗の象徴だ

政府や軍の高官たちが、手に負えなくなったり隠し立てしたい自らの実子を預けるための基地

出来の悪い保育園と化してしまっている

別にそのためになられたわけではない

だが、現状ほとんどそのような状況になっている

送り付けられたボンボン連中『クラウン隊』

もともといいた叩き上げのノンキヤリ集団『基地所属戦隊』

この二つが一つに纏まっていることで、ギスギスした雰囲気は基地全体に蔓延っていた

だがそんな最悪な状況の基地でも、ジオン残党など赤子の手を捻るように対処できる

それはなぜか

彼らが地球連邦軍だからである

基地の防衛設備は非常に堅牢

新旧入り交じったモビルスーツ部隊数十機

極めつけに、用済みになった強力な兵器を横流しされてある

こうなってくると、もうこの基地だけで戦争を起こせそうだ

だが彼らはそれができない

テロリストではなく正規軍だからだ

基地所属戦隊はともかく、クラウン隊の士気は落ちていく一方だった

だがこの度、見事ジオン残党が現れてくれた

臭いものに蓋をされた形のクラウン隊にとって、極上の退屈しのぎが見付かった瞬間である

ボロボロになった数機のジムを見上げ、地球連邦大尉ブルース・ウェインは眉をひそめた

彼の部下、レクス・ケイロンはその隣で冷や汗をかきながら唾を飲む

「ケイロン少尉」

「はッ、ハイッ！」

ブルースの視線を食らったケイロンは、即座に敬礼した

その顔を睨むように眺めながら、ブルースは続けた

「敵は本当に単機なんだな？」

「その通りであります！」

「……ふむ」

溶けた切断面に視線を移し、ブルース大尉の顔に皺ができる

ありえない、と感じた

いくら最新型に劣ると言えど、ケイロンは自分を含め四機のモビルスーツで戦った

それが、こてんぱんに負けてしまった

「申し訳ありません大尉、ジムをこんなにやられてしまつて……」

「いや、撤退できただけでも良かった……あのまま無駄死した方が損失が大きかった」

「お氣遣いありがとうございます……」

「モビルスーツなら直せばいい、パイロットまではそうはいかん、この失敗は次に活か

せ」

地上でモビルスーツ四機にたった一機で立ち向かい、勝つ

そんなことが本当に可能なのか？

できないわけではない、が、とても難しい

機体性能か、パイロットの腕のどちらかが怪物的だった場合、できなくもない

「敵は、どんなヤツだった？」

「ハイ！白くて、関節が輪になつてて、音速に匹敵するスピードで地上を走り、白色の

ビームサーベルを使用していました！」

「なるほど」

そんなモビルスーツ聞いたことがない

出鱈目すぎる

と、いうわけで、正解はモビルスーツにあるようだ

強力な敵機

恐らく一筋縄でいかない相手だろう

ブルース・ウエインは考えた

どうやったらそんな奴を倒せるのか

相手が兵器を持っているのなら、相応の対応を取らねばならない

例えこちらの開いた戦端であっても、巨大兵器を所持する以上、排除の必要がある

つまり、叩くのだ

「ふむ・・・さて、そろそろと言ったところか」

「どうしました、大尉？」

「呼びつけた相手が来るのだ」

腕時計を見て、それからブルースは格納庫のゲートを睨んだ

ぱつくりと口を開くゲートの向こうに、複数の人間が見えた

クラウン隊だ

過度な装飾や色染めの髪を揺らしながら、どうしようもないパイロット達がゾロゾロと入ってくる

先頭の一人がブルースの目の前に立った

「やあブルース大尉、何か用かな？この僕を呼びつけるなんてさ……」

「ご機嫌はいかがですか？ケイド・ヴィラン 『特務』 大尉」

皮肉混じりの一言に、ヴィランの取り巻きが激しく反応した

「お前え！ヴィランさんに舐めた態度を……！」

拳を握る取り巻きを見て、ヴィランは手を横に広げた

「うっ……」

ヴィランに制せられた取り巻きは、そそくさと後ろに回った

それを見ることもなく、ヴィランがブルースに聞く

「潰しに行くんだらう、敵を」

「ええまあ、そんなところですよ」

「そうか、まあパパが『例の』をくれるまで実践はしたくなかったけど……」

勿体ぶった調子で呟きながら、ヴィランは上を向く

そこにはやはり、中破したジムがあった

「リフレッシュ、しようか」

クラウン隊がのたのと引き上げた後、ケイロンはゲートに向かって唾を吐いた  
「あのボンクラ共……」

それを見ないようにして、ブルースは電子端末を弄り始めた  
端末に表示されていたのは、この基地の保有するモビルスーツだ

0079から0084のものしかない基地所属戦隊のものと、ジムⅡやらネモやらの  
いるクラウン隊

その両方を見て、よく吟味する

連邦にいる以上は、どんな連中でも味方なら背中を預けるし、どんな連中でも敵なら  
撃つ

それがブルースの矜持だった

「妙な気分だ……」

ブルースは思わず口走った

あの正体不明機に対して、大きな恐怖を感じた

一年戦争からモビルスーツパイロットをしていたブルースにさえ、あの正体不明機は恐ろしいものに写った

いや、それは長年研ぎ澄まされたカンかもしれない

どちらにせよ、自分の中の何かが警告している

「フツ、正体不明機か．．．」

## 二回目の攻撃

とてつもなく甲高い音が、間延びしながら町に響いた

それがサイレンだと気付く前に、男は立ち上がった

駆け寄った緑色のテントから、厳つい顔の別の男が厳つい表情をしながら這い出てくる

「ウォルター！」

「ブレイク！」

テントの奥から手のひらに収まるサイズの機械を引つ張り出すウォルター

それを奪うように引つ掴み、ネクストは耳に当てる

機械からは、重いものが地面を叩く音が幾度も聞こえた

「モビルスーツか……ッ！」

アイアンフィストの周りに置いたマイクの音を聞くイヤホンをウォルターに投げ返すと、ネクストは回れ右をして走り出した

「俺はベンとハウゼンと一緒にモビルスーツで出る！」

振り返ると、軍服を着ながらネクストに向かつて叫んでいるウォルターがいた  
「数が多い、合流してから叩くぞ！」

「・・・わかった！」

ネクストはそれだけ聞くと、また走り出した

上着のポケットからインカムを取りだし、コードをズボンの中の通信機に接続した

走り回るうち、視界の端に様々なものが見えてきた

たくさんの瓦礫、家を壊されてテントで寝る人々、血が滲んで赤黒く変色した死体袋、  
親がいなくなつて一人人形を抱く子供、疲労に満ち満ちた顔で復興作業を続けようとする  
る大人、棺桶の隣で泣き叫ぶ女性

それら全てが、たった一瞬に起こつたものだ

地球連邦軍の、やったことである

「いの・・・野郎」

そしてまた彼らは今、この惨状を繰り返そうとしている

なんの声掛けもなしに、なんの勧告もなしに

ネクスト・ブレイクの頭は沸騰寸前だった

沸騰憤然かもしれない

連邦が話し合いではなく殺意でアイアンフィストと向き合うのなら、あちらと同じよ

うに対応してやる

対等なコミュニケーションだ

「よっ……いいしょ……つとー！」

白く不気味な異形の巨人の首裏に回り込んで、その内部に体を滑らせる

あちこちから伸びる輪状の物体を身体中に嵌めて、準備は終わる

三度目ともなれば慣れたものだ

ナガレボシの目と思わしき部位が点灯する

それと同時に、その体がゆっくりと動き始めた

「ナガレボシ、ネクスト・ブレイク……出撃するッ!!」

先程のネクストのように、ナガレボシは走り出した

視線の向こうに人影のようなものを見付け、ネクストはナガレボシを停止させた

勢いよく走っていたため、辺りは土煙で覆われている

ナガレボシが立ち止まると、後ろから三機のモビルスーツが近付いてきた

「敵じゃないぞ」

ウォルターの声をインカム越しに聞き、ネクストは三機のモビルスーツを眺めた。橙色のザクI、ジャイアントバズを持ったグフカスタム、色々な射撃武器を持ったドムトローペン。

どれもジオン公国の旧式モビルスーツだ

「アウラはどうしたんだ？」

記憶の中のアイアンフィスト全戦力と比較して、足りない一人のことを指摘する

「そのナガレボシ？だっけ？を隕石から出すときにザクIIが片腕を損傷してな、乗れる機体がないんだ」

「なるほど・・・なら、今ここにいるのが全部か」

暑苦しい声のパイロット、確かグレックリー・ベン、の解答に納得する

あの隕石解体作業は雑だった

「ジオンの旧式と得体の知れないゲテモノのたった四機か」

「その通りだな・・・敵は少なく見積もってこちらの三倍の物量、勝機は薄い」

爽やかな男の声、レイゼン・ハウゼンだ、の批評を聞き、ネクストの額に嫌な感じの汗がにじむ

今考えると、とても無謀だった

「俺たちなら負けん、それに・・・とんでもない助っ人がいるしな」

ウォルターの一言に合わせるようザクーがナガレボシを見つめてきた

その落ちていた声音に、ネクストの闘争心が燦った

ニヤリと笑い、振り向く

「おお、来やがった来やがった……いるわいるわ、よりどりみどりのジムどもが」  
ナガレボシは仁王立ちになると、六本の指を握り締めて歪んだ握り拳を作った  
視線の向こう、連邦のモビルスーツ部隊がはつきりと見えてきた

ざつと見、十機以上

だが負けるわけにはいかない

この背には、罪無き人達の命があるのだから

あのゴーグル頭の横隊は、例えるなら冤罪人の処刑者だ  
そんなものをアイアンフイストに通すわけにはいかない

「さあ……来いッ！」

ネクストは敵を睨み付けた

一機残らず打ち倒すために

エウーゴが主力としていたモビルスーツ、ネモのコクピットで、ヴィランはパイロットスーツ姿で座っていた

今から始まる狩りに、少なからず心が踊る

退屈凌ぎはすぐそこまできになった

「クラウン隊各機、着いてきてるな？」

自分の部下達に通信を送る

「隊長と私含めネモ三機、ジムⅡ六機、全て確認しました」

「OKだカーネイジ中尉、全機いるな」

「ヴィラン隊長」

「なんだ、マグニート中尉」

「基地所属戦隊は確認しなくてよろしいので？」

クラウン隊の部下の中で最も大切な二人のうち一人に、ヴィランは気だるそうに答えた

「あんな下つ端たちのことなぞどーでもいい、真面目にやられて獲物が減りすぎるのもつまらん」

「了解しました」

それだけ聞くと、マグニートは黙った

「さあ来い俺の獲物、フラストレーシオンを晴らさせてもらうぜ……」  
操縦桿を弄ぶように握り、クラウン隊隊長はネモのスラスタを起動した

旧型モビルスーツジムスナイパーIIを操縦しながら、ケイロンはジムのゴッグル越しにクラウン隊のモビルスーツを見ていた

「あーあーあー、素人丸出し」

おぼつかない足取りは見ていて不安を煽る

シールドは構えていない、ビームライフルは下に向けたまま、あれではせっかく親の七光りで用意してもらったモビルスーツも形なしだ

しかもクラウン隊は、ジオン残党を倒すのではなく暇潰しの遊びと見て戦闘に参加している

油断と慢心を同時に行っている

おまけに陣形はろくにとれていない

連携ができていないのだ

「ちつくしよー俺らが頑張るしかねえのか、どうすんだよ……」

こんなのが自分より上のランクの扱いを受けていることに、ケイロンは嘆息したが、  
だが嘆いていても仕方ない、あのモビルスーツモドキを倒せばどうにかなるだろう  
クラウン隊は曲がりなりに、腐りきつても、半人前以下だろうが、モビルスーツ部  
隊だ

ケイロンが遭遇したあの怪物さえ抑えれば、なんとか他のジオンモビルスーツがいて  
も相手になるはずだ

コクピットにケイロンの汗が垂れる

「来いよモビルスーツモドキ……俺が吹っ飛ばしてやる」

前方にいる前衛の同僚達の背中を視界に捉えながら、ケイロンはペダルを踏んだ

ザクIがマシンガンを向け、

グフカスタムがジャイアントバズを向け、

ドムトローペンがシュツルムファウストを向け、

ナガレボシが拳を向けていた

「来たぞ」

ウォルターの声を聞き、ネクストは吠えた

「うおおおおおッ!!」

瞬間、ナガレボシが駆け抜けた

## ウォルター・コバツクの記憶

俺の名前はウォルター・コバツク

サイド3の9バンチコロニーで生まれた

生年月日はUC0059九月九日

一年戦争の年に二十歳を迎えた

母親が熱烈なザビ信奉者で、気の弱い父の反対を押し切り、俺の進路をジオン兵にしようとした

当時青臭いガキだった俺は、何も考えず、何も知らず、連邦に憎悪を向けていた  
なのでオフクロの目論見は成功し、俺は暗れてジオン軍の所属となったのだ

数々のテストを努力してパスした俺は、ジオン公国の戦闘役職で最も誉れあると言われるモビルスーツパイロットとなった

今思い出すと、どうしてあの程度の操縦試験に手こずったのかわからない

俺の初実戦は、コロニー落としで有名なルウム戦役だ

パイロットの中でもビリッケツだった俺は、ザクⅡではなくザクⅠを押し付けられてしまった

だがやはり死に物狂いで立ち向かったが、弾が当たらず撃墜数はナシ

何もできなかった

そして気が付けば、コロニーが地球に落下していたのが見えた

作戦内容をロクに聞かなかったから、その作戦がコロニーを地球に叩き込むためのオペレーションとはその時初めて知った

正直ゾツとしたよ

コロニーに住むスペースノイドのために戦っているはずの自分達が、そのコロニーを酷いことに使っていたのだから

俺の頭は一気に冷えた

あとはよく覚えていない

コロニーが落ちた前後で、俺がセイバーフィッシュを薙ぎ払いながらサラミスとコロンブスを真つ二つにしたなんて話を同僚のマーヴェルがしていたが、よく覚えていない。恐らく、ジオン熱にうかされていた頭が冷えて、うまく操縦できるようになったのかもしれない

だが、あのコロニー落としてのシヨックはデカかった  
あの瞬間から、俺の人生観は変わったように思う

乗つてた旧ザクを地上仕様にして、俺は地球へ降りた

俺の活躍を見ていたマーヴェルも一緒だ

地球ではさまざまな事を見て、学んだ

大自然や大山脈、一面に広がる海原、人間のことなど嘲笑うように不安定な天気、色んな動物

なるほど、連邦の高官どもが手放したがいらないわけだ

俺にとつて地球は、カルチャーシヨックの宝箱だった

マーヴェルはこの地球を独占する地球高官への憎悪を募らせていたが、俺は地球の素晴らしさを体感していた

だが連邦の反撃にあつたジオンは、地球からそそくさと逃げ出した

俺はザクを置いて宇宙に逃げ出し、マーヴェルは地上に残つて抵抗することを決めた  
だが頭でわかつていても、感情はそうでなかった

俺は宇宙へ撤退するのに消極的だった

もつと、もつと地球のことを知りたかったからだ  
あの青い水の星に、俺は牽かれてしまっていた

陥落したア・バオア・クーからゲルググで逃げ出した俺は、終戦に反対するタイプの部隊に合流した

その部隊は何を思ったのか地球に降下し、地上のジオン残党と合流するつもりであった

こんなテロリスト共と一緒にいられるか

俺は彼らから金品を根こそぎ盗み、アナハイムへ転がり込んだ

あの頃のアナハイムは、生粋のジオン派メカニックも多数いたので、楽に匿つてもらった

だが連邦によるジオン残党の撲滅運動が目立ってくると、アナハイムは俺を追い出さざるを得なくなった

だが俺は契約をした

彼らの顧客になる契約だ

これが後々生きてくる事になるが、それは置いておく

乗ってきたゲルググを売り払い、俺は本当に地球に降りた

降りた先のジオン残党からも金を巻き上げて、俺は地球をブラブラしていた

何回かジオン残党や連邦基地を空き巣したり強盗したりしていると、気が付けば一人旅ではなくなっていた

グフカスタムのパイロットとドムトローペンのパイロット、彼らが機体と共にジオン残党の人間が俺に着いてきていた

彼らもまた、ジオンの思想に懐疑的になっていた者達だった

俺らは旅を続けた

歩き続け、歩き続け、気付けば小さな集落に辿り着いていた

そこには俺のザクイーがいた

その集落はモビルスーツの残骸から電気を賄って生活していた

見るも無惨な俺の愛機と、見るも無惨な集落の人間

人々は飢え、痩せ細り、その集落が消えるのは時間の問題だった

俺はまたも契約をした

この集落を助ける代わりに、この集落の住民として心から受け入れること

それが俺の新たな契約だ

アナハイムから様々な物を買って、集落は生まれ変わった

その功績を認められ、俺は集落から妻をもらった

共に旅をしていたパイロット二人も、安定した生活を満喫していた

アナハイム経由でモビルスーツを修理して、もしものための防衛戦力にしたりもした

だがUC0084に変化が起きた

デラーズフリートが暴れまわりやがったので、テイターズなんてモンが生まれ、い

よいよ地球は混沌とし始めた

地上では絶えず小規模な残党狩りが行われた

そして、一人の少女が俺の集落に流れ着く

ザクⅡに乗ってやって来た彼女は、ひどく錯乱していた

どこかの残党組織の奴の娘か誰かだろう、どうやってここまで来たのか知らなかった

だが、その動かし方は素人のもものではなかった

だが先に述べた通り、彼女は混乱していた

裏切りにあったか、仲間売られたか、よほど凄まじい連邦の攻撃にあったのだろうか

足が壊れたザクを降りた彼女は、心配して近寄っていった俺の妻をピストルで撃つた

人を信頼できなくなっていたのだろう

だが心身含めた疲労のせいで、弾丸は急所を外れた

いや、疲労のお陰か

身重になった俺の妻には、身体中急所みたいなもんだったが

俺の妻の出産が始まった

だが人出が足りない

強引な男手では、胎児を傷付ける

だから女手が必要だった

俺はあの少女を頼ってみることにした

自分のやらかしたことを理解して正気に戻った彼女は、ザクに寄りかかって泣いていた

それに、俺は一言だけ言った

「アンタの力が必要だ」

産屋に走っていった彼女は、それはそれは活躍したそうだ

なにせ急激に弱った俺の妻の最期の言葉を、柔らかに抱いた俺の息子と共に一字一句聞いてくれたのだから

息子ができた

娘代わりができた

仲間ができた

家ができた

住み処ができた

この地球で、俺は色んなものを手に入れた

だから俺はこの地を、アイアンフィストを、守っていいこうと思う

そうだ、新しい仲間もできた

どうやら、もつと色んなものを手に入れることができそうだ

# 激突

「構えろー!」

モビルスーツ擬き、その後ろにいるジオン残党部隊を睨み付け、ケイロンは仲間には指しを出した

いくつかの機体が遠距離武器を向ける

ジムスナイパーIIは、旧式ながらも凄まじい強さを持つモビルスーツである

あまりに機体性能を底上げしたので、かの名機ファースト・ガンダムを上回るスペックを持つ

そしてこの機体最大の特徴が、専用装備のビームスナイパーライフルだ

「ターゲット、ロックー!」

味方のジムスナイパーがビームライフルを構える

近代のモビルスーツ戦において一般的な装備となったビームライフルであるが、その威力のために普及したのだ

ザクだろうがグフだろうが、当たれば一撃

一たまりもない

ここで確実に勝負を決めるため、基地所属戦隊は虎の子を投入したのだ  
「撃てーッ！」

ジムが一齐にビームを放つ

延びていくピンク色は、一つ一つがあらゆるものを焼く高熱の光線だ

ビームは一ヶ所に集中した

集中砲火だ

どんな機体であろうと、撃破は確實だ

誰もが光線に貫かれる白いモビルスーツ擬きを想像した

ただ、一人を除いて

「来たー！」

ナガレボシの両肩、リング状になったその部分に白い光が現れる

その光は、リング上を回り始めた

ナガレボシの両肩が光輝いた瞬間、その体にビームが伸びる

その先端が機体を焼く寸前、消えた

コンクリートの壁に水をぶち撒けた時のように、不可視の壁にビームが無力化されたのだ

「Iフィールドか、それは？」

「よくわかんねえけど、これでビームは怖くなくなったぞー！」

ウォルターの疑問に、ネクストは笑顔で返した

「そうか・・・なら、思い切り暴れられるな」

ナガレボシの後ろに立ち、ザクIは迫り来るジムIIとネモの混成部隊を見る

ジムIIが何機か突出していた

「援護しろ」

腰からヒートホークを抜き出すと、ウォルターは突撃していった

「了解イッ！」

「了、解！」

グレックリーがバズーカを、レイゼンがシュツルムファウストを撃つ

火力の高い武器に、ジムIIが足を止める

構えたシールドの上で榴弾が弾け、足下に爆風が爆ぜる

数機のジムが攻撃を無事耐え抜いた直後のことだった

「足を止めるのは素人のやることだ」

マシンガンを乱射しながら、一つ眼の戦鬼が駆け抜ける

ウォルター機がジムⅡを横側から蜂の巣にする

正面にシールドを向けていたので、ザクマシンガンを防ぐことはできなかつた

そしてそれは、他の機体も同様であつた

「敵に背中では絶対に見せるな」

背中から大型のヒートホークが叩き込まれる

高熱を放つ巨大な刃は、ジムⅡの装甲を溶かし、楽々とコクピットを砕いた

「そして」

そのまま脚部のロケットポッドを空にする

近くにいたジムⅡが、またも背中側から直撃を受けた

次々と突き刺さるロケットが、ジムⅡのランドセルで無慈悲に爆発する

近場のジムⅡ最後の一機がマシンガンを向けてきたが、ウォルターは追撃せずにスラ

スターで後退した

綺麗な弧を描いて飛んでいく旧ザク

ジムⅡの撃つマシンガンは一発も当たらない

「足下には気を付けるんだな」

突如、マシンガンを乱射していたジムⅡの足下から、閃光が迸つた

パイロットはそれが、ザクIが手持ちのクラッカーを全て己の足下に放ったからというのを気付けなかった

一機目が風穴から火花を飛ばし、二機目が切断面から溶けた内部機器を晒し、三機目がロケットの衝撃に倒れ、四機目が下半身を失った直後

グリプス戦役において活躍したジムII四機は、一年戦争開始時点からロートル扱いされていたザクIに、全滅させられた

モビルスーツ四機分の爆発を横目に、ウォルターはナガレボシが後ろへ降り立った「わかったな、ブレイク?」

「お、おう・・・」

あまりの早業に、ネクストは呆気にと取られていた

確かに凄腕だろうとは思っていたが、ここまでとは考えなかった

「今のは、モビルスーツの火力を最大限使用し敵を素早く撃破する戦法だ・・・俺達はアサルトコンボと呼んでいる」

マシンガンのリロードしつつ、ウォルターは説明を続ける

その間にも、ナガレボシのバリアがビームを防ぎ、グフのバズーカが敵を足止めし、ドムのマシンガンがシールドを削いでいる

それら全てを尻目に、ザクIがマシンガンを撃つ

「使えば見ての通りスツカラカンだが、成功させれば敵が一気に減る、見ろ」  
「ん？おっ!？」

ウォルターがマシンガンを一旦降ろし、ザクの人指し指で敵部隊を示した  
その方向には、比較的新しい機体の部隊があつた

だが、彼らは来たときには九機いたはずだ

「旧ザクでジムⅡをあんなに!？」

「それだけこの戦法が有効だというわけさ」

「そうか……」

確かに一気に火力やら何やらを集中するというのはわかりやすく強力だろう

だがそれで性能差のある敵を次々倒せるものだろうか

「お前、強いんだな」

「お喋りは終わりだ、来るぞー!」

「へっ?」

ネクストが呆けた声を出しながら向き直る

ビームライフルを無効化していたナガレボシに、バズーカが向けられていた

いくつもの光の矢がモビルスーツ擬きへ向かっていく

だがそれらは、命中することなく敵の目の前で消滅してしまった

何回か当てるものの、ビームスナイパーライフルはダメージを与えない

「クソ、無茶苦茶だぞアイツ！」

ケイロンの仲間が思わず叫んだ

全くもって同感だった

「クラウン隊機、四機がやられた！」

「いつの間に!?!あの白いのは動いてないんだぞ！」

「違う、ザクだ！」

耳を疑ったケイロンは、機体の頭部を横に振った

視界に、ジムⅡから離れるザクーが写る

今度は目を疑った

「クラウン隊は案山子にもなれねえのか・・・いや、まさか？」

まさか、あのモビルスーツ擬き以外にも化け物だとううのではなからうか

たつた四機で出てきたのは、自信の現れではなからうか

そんな連中を、いま全力で叩かねばどうなるか、ケイロンはわかっているつもりだつ

た

「ジム改前に出ろ！バズーカを垂れ流せ！」

「了解！」

「了解！」

太筒を背負ったジム改が二機、シールドを前に向けつつジムスナイパーIIの前方へ躍り出る

その二機は指示通り、バズーカを敵に向けて乱射した

噴煙を引いて飛んでいく榴弾は、モビルスーツ擬きに直撃した

面白いようにかつ飛んでいく白い敵を見て、ケイロンは確信と恐怖を覚えた

「強力な実弾武器なら通る……！」

だが、その強力な実弾武器であるバズーカでも、粉々に粉砕することはできなかつた無様に転がっているのは、つまり原型を留めているということ

一撃では倒せないのだ

骨が折れる

「遮蔽物はいなくなつた、スナイパーは攻撃を再開だ！」

クラウン隊に夢中になっているドムトローペンにビームライフルを向け、引き金を引

く

だが直前にそれを感付いたか、アイススケートのような動きで避けられた  
ホバー移動だ

ビームは空を切る

「チイツー！」

他の機体もビームスナイパーライフルを撃つが、当たってはいないようだ

「どいつもこいつもエースか！」

「クラウン隊は何やってんだ、足止めもできねえのか!？」

「落ち着け、もう一度撃つんだ！」

パニックになりかける仲間を叱咤しながら、ケイロンはトリガーを引いた

だがビームは狙いを定めたはずのザクを貫かない

上手いことスラスターで避けられている

「ぐわあっ！」

悲鳴に振り向くと、ジム改の片割れがマシンガンを食らっていた

120ミリのザクマシンガンが装甲を食い破る

シールドに守られていない片腕をやられたようだ、被弾したジムはバズーカを取り落  
とした

「ホントにエースだぜ・・・」

見れば、先ほどまで寝ていたモバイルスーツ擬きが起き上がろうとしている。困んで追い詰めていると思ったら、まるで追い詰められているのはこちらのようになっっている。

ケイロンは歯軋りをした

「散々だぜ……」

味方が愚痴と一緒に武器を撃った

無論、避けられてしまった

## 荒野に立ち上がる

いくつものロケット弾がネクストの視界を埋め尽くした

ジム改から撃たれたバズーカの狙いは、ナガレボシだったのだ

「おぶぐぶウツ!?!」

生きていて始めて経験する、とてつもない衝撃

妙などころにバズーカが直撃したに違いない

視点は反転し、上の方に地面が見えた

自分、というよりナガレボシが、被弾によって転がっていると考え付いたとき、グレッツクリーの声が聞こえた

「うわあ！おい、ネクスト！」

それが心配してくれている声音だと気付けることもなく

「なっさけねえなあ俺・・・」

衝撃に目を回しながら、ネクストは意識を手放してしまった

「うわあ！おい、ネクスト！」

「余所見するなベン！」

ウォルターの顔に緊張が生まれる

部下を叱責した後、旧ザクを走らせて叫ぶ

「散れッ！」

その瞬間、一本の光の束が機体の左側を通過した

直撃したわけでもないのに、片手の表面が熱を帯びる

ネモのビームライフルが、僅かに掠ってしまったようだ

「クッ!？」

ドムトローペンがホバー移動を駆使して射撃をかわす

「うおお！のわあ！」

グフカスタムはスラストターで機体を飛ばし、なんとか避けているようだ

「まずいな」

一見すればアイアンフィスト側が有利に見えるかもしれない

事実直撃はしていない

だが実際はアイアンフィスト側に向かい風が吹いている

向こうは攻撃が当たらないのだが、こちらはそもそも攻撃ができないのだ

攻撃する隙を見せた瞬間、一撃必殺のビームライフルが己を焼くだろう

それをバリアで防いでくれるナガレボシに乗るネクストも、バズーカにてグロッキー状態だ

機体は大したダメージを受けている様子がないが、すぐに起き上がることはないだろう

「ジリ貧になるな・・・」

マシンガンを狙いも定めず撃つ

牽制にもならない苦し紛れの三点バーストだったが、見事にジム一機の片腕に当たっ

てくれたようだ

だが、まぐれはもう起こらないだろう

「隊長！アサルトコンボを・・・」

「よせ、蜂の巣にされるだけだ」

「しかし・・・」

はやる部下の気持ちもウォルターには痛いほどわかっていた

いずれこのままではなぶり殺しである

だがこちらから仕掛けて返り討ちに合うのも目に見えている

こちらは数も、性能も、軍と民間集落という関係上機体コンディションも負けている  
ナガレボシというイレギュラーがいてなんとかやれていたのだ

ネクストが遮蔽物として防御に徹していたから互角以上に張り合えた

「ええい、どうやら調子に乗りすぎたらしいな・・・」

「もともと最初から負け戦のようなものだったからな・・・それよりも無駄話はそろそろ  
切り上げた方がいい、メガ粒子に焼かれたくないならなッ・・・!」

レイゼンの一人言に苦笑いで返しつつ、ウォルターはビームを避ける

スラストの推進材が目に見えて減ってきた

コクピットの中で舌打ちをする

「やはりジリ貧じゃないか!」

デッドウェイトのヒートホークを捨てる

落下して地面に突き刺さるモビルスーツサイズの手斧には目もくれず、ウォルターは  
ただ回避に集中した

が、決定的な反撃はできずにいた

情けない

力を手に入れ、仲間を手に入れ、自信と答えを手に入れて、油断してこの様だ  
ビームを防いで慢心していると、バズーカでノックアウト  
目も当てられないほど情けない

この前ジムを四機捌いて、余裕を感じたのか

己はまだ戦場というものを、戦争というものを理解していなかったのだ

ああ、なんて情けない

「ふざけんな．．．けるな．．．」

しかし

しかし、諦めるものか

「ふざけんな．．．」

自分はぬくぬくと肥え惰眠を貪り、他者が幸せになろうとするのを許さず

それが地球連邦だ

彼らは縛りつけることで地球圏を支配した

そんなの、自分勝手だ

「ふざけんじゃねえ．．．！」

自分のためだと言い切り、周りの全てを燃やしても理想のために暴れ狂う

それがジオンだ

彼らは目的のためになんでもする

そんなの、迷惑千万だ

「ぎっけんじゃねえぞおおおッ!!!」

答えはとうに見付けた

見付けていた

はじめから答えは見付けていた

記憶を失った直後から

あのとき、見知らぬ病院のベッドで目を覚ましてから

答えは見付けていたのだ

「負けて、たまるかよ……!」

連邦も

ジオンも

両方クソツタレだ

だから

「俺はまだ……」

両方ともぶっ潰してやる

沢山の人達に迷惑をかけるのなら

そんなの

絶対

許すわけねえ

「負けてられねえんだよオツ!!」

地面に寝転がっていたトリコロールの怪物は、上半身を乱暴に起こした

それはおもむろに片手を伸ばした

手のひらには、光

瞬間、ビームがジムに飛んだ

「何だ!?!」

クラウン隊のジムⅡパイロットの一人が、その台詞と共に消し飛んだ

ジムⅡの胸部には、円形の穴が開いた

主を失ったモビルスーツが、胸から火を吹き膝から崩れ落ちる

それを見てから、ナガレボシはゆらりと立ち上がった

長き戦乱により荒れ果てた、地球の大地を踏み締めて  
眼を爛々と輝かせ

敵を見据え

そして

立ち上がる

「おっしや、第二ラウンドだあーっ！」

ネクストが手のひらを別のジムに向ける

そこに白い光が発生し、瞬時にまっすぐ飛んでいった

腕からビームガンが出るのだ

命中したビームは、ジムIIのシールドを溶断した

あまりの威力にジムIIのパイロットが固まっていると、そこへもう一発が飛んでいく  
ビームサーベルのようにシールドごとモビルスーツを倒せるくらいの威力はないも  
の、ジムならコクピット狙いでワンショットキルを狙える

二機目のジムIIが首から下を抉られた

そのジムにマシンガンで止めを刺しつつ、ウォルターのザクIが近寄ってきた

「ズゴックみたいだな？」

「うるせえ！強いなら良いだろ！」

「違うない」

冗談と正論を言い合うと、ウォルターはナガレボシの後方に滑り込んだ。ナガレボシの肩の輪が光り始める。

肩全体が輝くと、その周りにはビームを無効化するバリアが展開された。ザクIを狙ったビームライフルが、ことごとく無力化される。放たれた桃色の閃光が、ひとつ残らず弾けて消えた。

「わああーモビルスーツ擬きが復活しやがったー！」

基地所属戦隊のパイロットが怯えるように叫ぶ。

ケイロンは顔を青くした。

もう少してジオン残党の旧式達を削り殺せたのだ。

それを覆された形になる。

「も一回バズーカだあ！」

片腕が無事なジム改がバズーカをナガレボシへと向けた。

それを見付け、アイアンフィストの用心棒代表は静かに告げた。

「待たせたなベン、アサルトコンボだ！」

グレックリーは即答した。

「待ってましたー！」

基地所属戦隊に、グフカスタムがジャイアントバズを連射する

白煙を牽いて飛んでいく弾

連邦の部隊はそれをシールドで防いだ

盾の表面で爆発と火花が華開く

徹底的に焦がされた盾から顔を出すと、ジム改の目の前にグフが迫ってきていた

ヒートロッドがうねり、伸びた

グレックリーのモビルスーツから現れた電磁鞭は、ジムのシールドで防ぎきれていな

い場所へ潜り込み、腹部を叩いた

当たった直後ジムが動きを止める

ヒートロッドが送り込んだ電圧はジム改の内部機器をショートさせ、その機関を一部

停止させたのだ

「そおおおおおりゃあああああ!!!」

縦に振るわれたヒートソードが、ジムを頭から裂いた

真つ二つだ

撃破されたジムには目もくれず、グレックリーはスラスターを全開にして飛んだ

「あつぷねー！」

幾度もビームが機体に掠めるが、ナガレボシの背後に逃げ込む

これでビームは怖くない

「次はハウゼン！」

「わかりました」

「援護する！」

ウォルターの指示に、了解の意思を示すレイゼン

それを聞き取り、ネクストは両手を敵に向けた

ネモ三機がおろおろするだけのクラウン隊は無視し、再び基地所属戦隊へ攻撃するの

だ

「逃げろ逃げろッ！」

ナガレボシの両手から交互にビームが連射される

こればかりはシールドで防ぐのは危険だ、ジムは散開した

ブースターで思い思いの方向へ離れるジムの部隊

そのうちの一機、いや偶然にも一緒の方向に逃げた二機を、ドムトローパーが狙う

レイゼンが狙いをつけた敵を援護しようと、他のジムが攻撃してくる

だがウォルターがマシンガンを乱射した

それに当たらないよう、ジムスナイパーIIが僅かに動きを変える

その瞬間、ドムが動いた

猛烈に砂埃を巻き上げつつ、ホバーとブースターを併用して地上を高速で移動する  
右手にラケーテンバズを構え、左手にはマシンガンを持ち、足にマウントしたシュツ  
ルムファウストの弾頭を前方の目標へ向ける

「食らえ！」

ドムトローペンの方を向いたジムがその意図に気付いたように身じろぎをした

もう遅い

三種類の武器が、一斉に炎を吹いた

マシンガンが無茶苦茶に飛び回り、バズーカが突撃し、シュツルムファウストが踊つ  
た

そのいずれかが、敵機に命中した

片方のジムのシールドは粉々に碎け散った

片方のジムの頭部は粉々に碎け散った

二機とも仕留められなかった

だが、いいところまで弱らせることはできた

「美味しいところはやる．．．行け」

「任せろ！」

あつさりと敵から離れるレイゼンに、ネクストは力強く応えた  
横へ移動するドムトローペン

そして、先ほどまでそのドムがいた地点を、ネクストがナガレボシで駆け抜ける  
踏み砕かれた地面を振り切って、走る、走る

ジムが一機、サーベルを抜きつつバルカンを乱射した

もう一機の方はビームライフルを放った

バルカンは弾き、ビームライフルはバリアで無効化する

ブースターで接近しながら、一気に斬りかかってきたジムに、ナガレボシもビーム  
サーベルを取り出した

「お、」

二機のサーベルがぶつかり合う

「おお、」

だが、ジムの方のサーベルに、ナガレボシの白いサーベルが食い込んだ  
「おおおおおおおーッ!!!」

そのままネクストは、ビームサーベル諸共敵機を切断した

一瞬で装甲を通り抜ける白い光

胸から入ったそれは、瞬きより早く背中から出てきた

空中で、ジムが大爆発を起こした

ヴィランは逃げ出した

ネモの機動力を全開まで利用した、全力の逃げ足であった

「あああ畜生！ガンダムさえ、ガンダムさえあればあー！」

屈辱と行き場のない怒りに顔を歪ませて、連邦のボンボンは叫んだ  
顔には青筋が浮き立っている

「カーネイジ、マグニート、いるな?！」

「はい、隊長ー！」

「ここにいます、生きていますー！」

腰巾着二人の存在を確認すると同時に、その二人以外の部下が死んだことに気を失い  
そうになる

また父に怒られる理由が増えたのだ

「ヴィラン大尉、今は一刻も早く逃げましょうー！」

「今死ぬべきではありませんー！」

「そんなことはわかってる！おのれ、おのれえ、ジオン残党どもめええええッ!!」  
怨嗟の雄叫びをコクピットで喚きながら、ネモ三機は逃げていった

ケイロンは残りの味方を確認した

五機いた仲間は、残り三機

クラウン隊含めると、十五機の中で生き残ったのは六機

「なんてこった・・・」

そして敵の損耗はゼロ

ケイロンの背筋が凍り付いた

リーダーで味方が後退するのを確認しつつ、ブースターで後退移動をする

追撃されると考えたのだが、相手は追いかける様子はない

「いったい何なんだ、奴ら・・・?」

味方の死に歯噛みしながら、ケイロンはジムスナイパーIIを飛ばして撤退した

ジムが尻尾を巻いて逃げていく

勝った

勝ったのだ

完全大勝利だ

「やっ……たぞおおおおっ!!」

ネクストが両手を上へ振り抜いた

あまりの喜びに、つい大きなアクションを起こした

ナガレボシも同じ動作をしてしまう

だが、勝利に酔っていたのはネクストだけではない

四倍以上の戦力差を、覆したのだから

「やったやったやったイエー!!フォーツ!!」

グレックリーはやたらなハイテンションで騒ぐ

「任務完了か、フツ……」

レイゼンはニヒルに笑う

「諸君、よくやってくれた」

ウォルターが全員に声をかけた

グフとドムとナガレボシの視線が、ザクーに集まった

ウォルター自身も、コクピットの中で微笑んでいた

そして今日の戦いを、こう締め括った

「さあ……帰ろう!」



た

ザクⅡのすぐ近くで、ネクストはやはり機体を眺めていた

ジオンの名機ザクⅡは、後に連邦の機体の設計思想にも影響を与えているという話を聞いた

そんな優れた機体が、今日の前にいるのだ

「これが・・・MS—06・・・」

生身でザクを目の前にして、ネクストは現在の自分の置かれている状況を鑑みた

連邦の部隊とチャンバラをナガレボシでやっていたので、あまり実感がなかったのだ

「やっぱ俺、戦争やってんだよなあ・・・」

肩を落としてため息をつき、ネクストは持っていた部品を掲げた

「アウラーっ！持ってきたぞーっ！」

腹から出た声は、格納庫の冷たい壁に反響して消えた

聞こえてくる言葉の残り香は、ネクストの耳を浅く叩く

室内のやまびこが無くなったとき、凜とした声がザクから聞こえた

「そこで待つてて！」

「お、おう」

言われた通りに棒立ちしながら待つてっていると、コクピットからのそのそとアウラが降りてきた

薄手のTシャツと作業服のズボンというだらしない格好だった

整備をしていたせいだろう、身体中に付いた黒いススやらオイルやらが女の子らしさを消し去っていた

「ありがとう」

「ああ、これでいいよな？」

「ん」

無造作に突き出された手に小型の電子機器らしきものを手渡す

軽く手のひらに置くと、アウラはそれを奪うような乱暴さで受け取った

またザクに向かっていく背中、ネクストは声をかけた

「あともうすぐで晩飯だつて、リーアが言つてたぞー！」

休憩してから続きをやれ

ネクストはそう言外に伝えた

直接的には言わないが、アウラがザクを直しているときに倒れては問題だからだ

仕事に全力投球なのはいいが、鋭気を養うのは大切だ

だがアウラの背はずんずん遠ざかっていった

食い物作戦では引っ掛からないようだ

「だあめだ、こりゃあ」

ネクストは肩をすくめた

クタクタになるくらい手伝いをしてから、ネクストはモバイルスーツ格納庫から離れた荒野の土を小砂利と一緒に踏みながら歩く

ネクストに手伝える段階の整備は終わったので、暇になってしまった

やることもないので辺りを見回すと、炊き出しの煙が瓦礫の向こう側に見えた

「おっ、やってるやってる」

「ああ、楽しみだな」

予想外の相槌に、ネクストはのけぞりつつ隣を見た

見知らぬ男が立っていた

煙草を吸っているその男は、その場に屈んだ

「悪い、驚かせたかな」

「ああ、いや・・・始めて見る顔なもんだから、ついな」

ネクストが頬をかきながら男に苦笑いを向ける

実際にネクストが見たアイアンフィストの人間は、全体から見て少ない顔を合わせた数ともなると、それこそ一握りになつてくる

「そうか・・・俺はビーン・ゴーンバッドだ」

ビーンは煙草を口から離してネクストの方を向いた

しゃがんでいるので見上げる形になつている

「ネクスト・ブレイク、最近越してきたばかりなんだ！よろしくな」

「ああ、ウォルターから聞いてるよ」

ネクストの自己紹介に、ビーンは軽く返した

その何気ない一言に、ネクストは驚く

「あいつ、顔広いんだな」

「ここじゃ彼を知らない人はいないくらいだ」

「へえ・・・あつ」

樽をすればなんとやら

話題に出てきたウォルターが、立ち上る湯気の方へゆつくり歩いてるのが見えた  
ポットや皿を始め、食器を山のように抱えている

「ウォルターだ」

「手伝いに行くか」

「そうだな」

新しく会った男の提案に答え、ネクストはウォルターの方へ走っていった

カゴ一杯の食器を持ち上げ、ウォルター・コバックはリーア・ケストレルのいる炊き出し場に向かっている

全住人の分の食器が足りないとの連絡を受けたためだ

共用の倉庫は無事だったので、そこから皿やスプーンをいくつか引っ張り出した

「・・・遅かったか？」

遠くへ視線を投げながら、ウォルターは呟いた

食器が埃まみれだったから一度水洗いしたとはいえ、食器を倉庫から出すのに以外と手間取った

もう既に炊き出しは始まっていた

「おーい、ウォルターー！」

声をかけられ振り向くと、見知った顔が二つ、こちらに走り寄ってきていた  
ネクスト・ブレイクとビーン・ゴーンバッドである

二人ともウォルターの親友とも言うべき男だ

「重そうだな、その鍋貸してみろ」

ビーンがウォルターの荷物に手を出した

大量の食器を運ぶウォルターを見かねたのだろう

「町長代理にそんな仕事は・・・」

「えっ、町長代理？」

ウォルターは困惑した

戦闘関連はウォルターが請け負っているが、アイアンフィストのその他の事柄はビーンが管轄している

むしろウォルターがビーンを手伝うべきなのだ

「良いから貸させて、疲れてんだろ？」

呆けた声を出したネクストを無視し、町長代理が鍋をいくつか持った

「・・・すまん」

「気にするな、ほらネクストも持ってきてくれ」

「あ、ああ」

ネクストがまた呆けた声を出すと、ウォルターが頬を緩めた  
「ありがとう」

アイアンフイストにまたも連邦のモビルスーツが襲来したのは、その五時間後だった

## パルバライゼーション

「あああああッ！」

クラウン隊隊長、ヴィランが奇声を上げた

その胸には黒い憤怒と真っ赤な憎悪が渦巻いている

髪を掻きむしり、虚空を睨み付けると、ヴィランは少し落ち着きを取り戻した

カーネイジとマグニートの二人組がおろおろしながらそれを見ていた

「ヴィラン特務大尉」

鼻息荒く、ジロリと振り返る

いかにも不機嫌なヴィランに声をかけたのは、ブルースだ

「ああ、貴様か……」

舌打ちしつつ、ヴィランは答えた

「何の用だ」

「出撃前の約束、お忘れでないですね？」

ヴィランが不愉快そうに顔を歪めた

そうだ、自分はコイツとある約束を結んでいたのだった

己の無力さを、この何処の馬の骨とも知らぬ男にさらけ出すような約束を

「・・・好きにしろ！」

歯が欠けるのではないかというほど歯軋りをすると、ヴィランは身を翻して歩きだした

腰巾着二人も慌てて着いてゆく

「ガンダムが今届いていけば・・・！」

クラウン隊の三人は、ズタボロになった味方のためにかなりの大騒ぎになっていたモビルスーツ整備ドックを出ていった

「なかなか荒れているな」

誰に言うでもなくそう呟いたブルース

その顔は笑ってもいなかった

ヴィランに嫌な感情を抱いているから無表情になっているのではない

無駄なことを一切削ぎ落とした、兵士の顔だ

ブルース・ウェイン連邦軍大尉は、先の第一次アイアンフィスト攻略戦に参加できなかった

別にどうしようもない理由があったわけではない

予備のモビルスーツはあるし、彼にパイロット適正がないというわけでもない  
むしろその逆だ

ブルースは『強すぎる』のだ

基地所属戦隊とクラウン隊、この連邦軍基地の中で最も腕のいいパイロットは彼だ  
ヴィランは、彼により狩りの獲物が全滅するのを怖れた

そこで、ブルースに基地での待機を命じたのだ

あの高慢さと自己陶醉と妬み深さの塊であるあのヴィランが、である

それだけでこの男の腕のほどがわかる

だがブルースはこの件に、個人的に悲しんでいた

「……まさか、必死になって磨いてきた腕が仇になって、部下を失うとはない」

彼は自分の腕を過大評価していない

だが、それでも、今回の作戦に自分がいなかったために、基地所属戦隊の部下に  
不用な犠牲を出してしまった

あのときあの場にいれば、最悪代わりに死ねただろう

それもできなかったのだ

「・・・負けられんな・・・」

だが同時に、ヴィランの出撃前にブルースは約束を取り付けた

ヴィランが負けた際、独自に攻撃をしていいという約束を

まさか自分が負けるとはその時思っていなかったヴィランは、それを呑んだ

その結果、今回は出れるようになった

もう部下の死に悲しむことはない

残念ながら、その心の隙一つが、戦場では死に繋がるのだ

彼は、己が連邦軍という大きな組織のちっぽけな部品に過ぎないことを知っていた

自覚していた

無駄なことは一切捨てて、連邦の言うことを聞くことに全力を尽くしてきた

良くも悪くも、職業軍人なのだ

「ジムクウエルは上がっているか？」

「へい、バツチシですぞ大尉！頑張ってきてくださいえ」

「ああわかった、お前らも準備しろ」

整備長と短いやりとりをし、ブルースは一列に並んだ部下に声をかける

「了解！」

「了解！」

「了解！」

「了解！」

「了解！」

五人のパイロットがそれに敬礼をする

彼らは駆け足でそれぞれのジムに走っていく

それらを尻目に、ブルースもジムクウエルに歩み寄る

迷いはない

自分はただ一本の矢、一発の弾丸なのだ

撃つ人間の目的を、愚直に、確実に遂行するのが役目だ

迷いなどはこれっぽっちもない

ただ一つ不安を挙げるとすれば、実戦はネオジオンの地球降下以来ということだが  
「そればかりはどうにもならんか」

コクピットシートに座り、OSとメインシステムを立ち上げる

ジェネレータ出力、駆動系の稼働率、スラスタのチューン

推進材と各種武器弾数の残量

その他諸々

コクピットにいる時自分で確認できることは全て確認する

機械が出したオールグリーンを鵜呑みにして、戦場でアクシデントが発覚してからでは遅い

死の目は自分で消せるだけ消す

メインカメラの写りもよく見て、機体状況わでできるだけ把握した

問題はない

全くもって良好だ

「システムチェック完了」

操縦桿とフットペダルにそれぞれ手足を置き、ブルースは深呼吸をした

新鮮な酸素を吸い、古い二酸化炭素を排出する

そして、部下を見て、号令をかけた

「全機発進準備」

「了解！」

五人分の返事を耳に入れ、ブルースはフットペダルを踏み込んだ

「ブルース・ウェイ、出撃する」

ジムクウエルが一步を踏み出した

その後ろを、基地所属戦隊のモビルスーツが着いていった

やや歩いただろうか、振り向いても基地が見えなくなってしまった  
荒野の向こうに見えたのは、三機のモビルスーツ

そのどれもが、武器を持っていた

「ザクI、グフカスタム、ドムトローペン・・・そして」

その情報がある機体の後方に、トリコロールの異形の機体

「あれが・・・」

モビルスーツであるかどうかも疑わしい、奇つ怪なフォルム

ブルースはなんのリアクションもしない

通信機越しに部下のざわめきが聞こえたが、それだけだ

戦うことに、変わりはない

ブルースはペダルを踏みつけた

その視線は、ただ冷たかった

## ブルース・ウエインの記憶

俺はブルース・ウエイン連邦軍大尉

生まれは地球のワシントン

UC0057生まれ

軍に入って十年近くになる

入隊当初はそこまで大きな戦闘はなかったが、ルウム戦役にてついに初実戦を行うことになった

新型兵器モビルスーツを投入したジオンに、連邦は敗走

なんとかザクを一機落としたが、俺以外の部隊の仲間は皆死んだ

再編された宇宙軍から外されてジャブローに送られた俺は、訳もわからずモビルスーツに押し込まれた

初陣、それもモビルスーツ相手に旧式の空間戦闘機セイバーフィッシュで勝ったのがお偉方の目に留まったのだろう

俺は連邦の最新兵器、ジムのパイロットに選ばれたのだ

なし崩しでジムのテストパイロットになり、そのまま地球でジオンとの戦闘に派遣される日々が続いた

粗方地球のジオン勢力が弱まると、俺は宇宙へ送り返された

そこで、またモビルスーツで戦うことになった

いつの間にかエース扱いされていた

ソロモンで戦い、ア・バオア・クーで戦い、グラナダに立ち寄って、俺の一年戦争は終わった

ジオンの司令官ドズル・ザビの戦死や、ソーラレイによる連邦の將軍ヨハン・エイブラハム・レビルの消滅や、グラナダで行われた停戦協定の調印などには、モビルスーツ越しで立ち会った

特に思うことはなかった

それどころではないからだ

目の前に死が迫っているのに、どうして歴史のターニングポイントやらに構っていられるだろうか

俺は、生き残ることだけ考えた

ジオンのモビルスーツを倒して、生き残ることだけを

そのまま宇宙に残った俺に待っていたのは、デラーズフリートだった

時代が変わっても、組織の人間が代わっても、機体を変えても、俺は戦うことしかして  
いなかった

デラーズフリートによるコロニー落とし

そんなもの興味ない

そのときの俺はドムに囲まれていたのだから

デラーズフリートを倒した後は、テイターンズへ入隊した

移籍と言ってもいい

なされるがままで、何もかもどうでもよくなった

上司がエウーゴに降るといっているので、俺もそうした

テイターンズ敗北の目が濃くなったからだ

生き残るためだ

エウーゴ経由で連邦に戻ってきた俺は、地球へ下りてハマーンのネオジオン迎撃にあ  
たった

上の指示だ、嫌がるわけにもいかないし、裏切り者扱いされるテイターンズにいたと  
いう事実もある

俺はまた、死地へ向かった

なんとか生き延びたが、負傷したので宇宙にまた上がるのは止めた

そういえばハマーンはコロニーを地球へ落としたらしい  
どうでもよかったが、またかとは思った

一年戦争、デラーズ蜂起、グリプス戦役、ネオジオン抗争

宇宙世紀の大概の戦争を経験した俺が辿り着いた先は、地球の辺境の基地だった

そこには妙な連中もいたが、味方であるし上司やらの子息なので、それなりの付き合い合  
いはした

ようやく得られた、戦争から遠い時間だ

無駄にせず、ゆったりと味わってもいいだろう

俺はそう考え、糞餓鬼のお守りもこなした

だが、それが唐突に打ち砕かれたのは突然だった

その糞餓鬼とある集落に発砲したのが全ての始まりだ

そこにはジオン残党のモビルスーツがいて、俺のいる基地はそいつらを倒すことに決  
めた

だが、派遣されたモビルスーツは次々とやられ、死人すら出た

俺にお呼びがかかるのも、時間の問題だった

アイアンフィスト

そこにいる人々と、俺は殺し合いをする

なんてことはない

あの日、一年戦争からずっとやってきたことだ  
慣れたものだ

俺が今まで生き延びて来れたのは、勝者側にいたからだ  
連邦にいれば、ジオン残党のように死ぬことはない  
生きていられる

だから俺は連邦にいる

更に言えば連邦は政府だ

様々な人を覆い、守る政府なのだ

叩き潰されては、数え切れない人間が不幸になる

だから俺は連邦に従う

そして俺は戦士だ

ずっと前線で硝煙の臭いを吸ってきた

今更他のことなどできはしない

操縦桿を握り、敵を狙い、弾丸を撃つだけ

だから俺は連邦のために戦う

地球連邦にいる理由が、俺にはある

それだけだ

ジオン・ズム・ダイクンが提唱したジオニズムなんて理想を気にする余裕も、必要も、意味も、意義もない

俺は引き金を引くだけだ

一発の弾丸に、

一本の矢に、

一振りの刃になるだけだ

他の何でもない

## 砂塵巻き上がる合戦場

「私は地球連邦軍大尉、ブルース・ウェイン．．．繰り返す、こちらは地球連邦の軍人ブルース・ウェイン．．．貴君らは旧ジオン公国の戦力を違法に持ち、それを許可なく行使している．．．我々は貴君らの制圧に來た、投降の意思を示さない限り攻撃を行う．．．オーブンチャンネルだ、聞こえているだろう．．．私は地球連邦軍大尉、ブルース・ウェインだ．．．戦力を放棄し投降せよ．．．繰り返す、武器とモビルスーツを捨てて今すぐ投降せよ．．．了解した、この瞬間から我々は貴君らを攻撃、殲滅、制圧する．．．全機攻撃、目標はジオン残党．．．作戦開始」

床に潜ろうとした矢先、連邦のモビルスーツ部隊がやってきた

大部隊相手に勝利を収め、喜びに胸踊らせていた時のことだ

「敵機、急速接近！」

「見りゃーわかんたろおおお!!!」

緊張したレイゼンの報告に、ネクストが思わず弱音を吐く

地平線の先からは、鮮やかな炎がちらちらと見えた

それがジムのスラストターの炎だと、その場の誰もが知っていた

「チツ、投降しろだあ？先に仕掛けてきたのはそっちの方だろうが……！」

こちらは、前回の戦闘での同じ部隊と機体とパイロットだ

相手の質が前と同等なら、負ける道理はない

「敵機の識別は？」

「ジムスナイパーⅡが三、ジム改が二、ジムクウエルが一です！」

「比較的古い……手強い方の部隊か」

ウォルターがスティックレバーを強く握る

地平線のスラストターの火は、どんどん近付いてきていた

突然、端の方の噴射炎が一際輝いた気がした

「クツ、散れ！」

ウォルターの号令と共に、ドムとグフが左右へ飛んだ

地面をメガ粒子が焼く

敵部隊から一直線に伸びてきたのは、ビームライフルの弾丸だった

断続的に飛んでくる光の矢

ナガレボシが肩を強張らせる

「後ろに來い、ウォルター！」

両肩のリングが白色に染まり、ナガレボシの前面にバリアが展開される

ナガレボシに飛んできたビームは、不可視の壁に阻まれて消える

ビームから逃れるために、ナガレボシの後方へザクIが走り寄る

その時ウォルターは、正面から来る何かをナガレボシ越しに見た

「ブレイク、伏せろ！」

「え!？」

「ミサイルだー！」

「ハア!?!ヤベエ!!」

屈み込んだナガレボシの上から、ウォルターはザクマシンガンを撃った

連射された弾丸

マシンガンはミサイルに直撃、粉碎する

残弾が僅かになったマガジンを外し、ザクマシンガンの弾倉を取り替えた

「なんかねえのか、なんか・・・」

排莖を浴びながら、白い異形は背中をまさぐった

そこにある巨大な三角形の物体に指が触れる

「チツクシヨウ、なんなんだコレ！ただの飾りじゃねえだろうな！」

すると突然、背中の物体が動いた

スライドした後に下部が水平に上がり、長い方が前方を向く

右脇で三角形を挟み込む姿勢になる

「やっぱり飾りじゃねえんだな・・・！」

唐突なことに慌てながら、ネクストはそれを抱えた

こうなったら藁でもする

コクピットの中で、指でピストルを作った

先端の穴から粒子が沸き、光が溢れる

「いっけえ!!」

人差し指を折り、トリガーを引く真似をする

瞬間、白色のビームがまっすぐに飛んでいった

地面の上を水平に飛び、白い線が伸びていく

だが、地平線にいる敵には当たらなかったようだ

スラスターの炎の数は依然変わらない

「まだだ！」

再びトリガーを引く、真似をした

白く輝くビームが、三角形の先っぽから放たれる

焰の横隊の端へ伸びた光線

噴射炎が一つ、かき消える

「当たったのかアレ!?!」

「爆発だ、一機やってみたんだ」

誰にともなく聞いたネクスト

グフカスタムのカメラから狙撃を見ていたグレックリーが、直撃したと判断する

「も一発だ!」

「おっしや!」

ビームキャノンがまた火を吹いた

空気を焼いて、光線は直線に飛んでいく

だが命中するかは別問題だ、今度の一射は外れた

「くそ、もう一度・・・なに?」

ビームキャノンからは、ビームが出なくなつた

発射のための動作をしても、光線は出ない

「エネルギー切れってことか!」

もう一度トリガーを引く。ジェスチャーをしてみたが、ビームキャノンはウンともスンとも言わない。

何の反応も示さない

「どうしたブレイク、弾切れか」

「その通りだ、参ったぜ！」

ビームキャノンを手放す

先程とは逆のプロセスで、ビームキャノンが背中へ戻っていった

「気を付けろ、近付いている」

レイゼンが注意を促したのもつかの間、バズーカの弾が噴煙を吹いて飛び込んできた

レイゼンの機体が一瞬間にいた地点に、爆風が華開く

お返しとばかりにグフカスタムがジャイアントバズを向けた

引き金が引かれ、銃の後部から灰色の煙が吐き出される

「だーっ、シールドが邪魔だ！」

グレックフリーが狙ったジム改が、盾でバズーカを受け止める

表面が粉々になったシールドを投げ捨て、ジムはマシンガン撃った

ここに至り、敵部隊のシルエットがはつきりと見えてきた

ジムスナイパーIIが二、ジム改が二、ジムクウエルが一だ

う ジムスナイパーの数がレイゼンの報告と合わないのは、ネクストが落としたからだろう

「この前より数が少ないぞー！」

「手を抜いていい訳は、ないだろう！」

ウォルターのマシガン斉射に合わせて、ネクストがビームガン撃った

ジムの部隊のごとくが、ビームをスラスタでひらひらと避けていく

ザクマシガンは当たっても大したダメージにならないからか、ほとんど無視していた

ビームとは違って何回かかする

「チツ、これも弾切れー！」

両手で合わせて十発程度放つと、手から光弾が出なくなつた

腰から細長い棒を引き抜く

ビームサーベルから、光の刃が飛び出した

「ブレイク、正面から突撃してくる！」

ネクストが視線を振ると、凄まじい勢いで突進してくるモビルスーツがあつた

ジムクウエルだ

他のジムと違う先鋭的な頭部フォルムが目を引く

青と白に塗り分けられた装甲が、立ち上る砂塵を弾く

「俺がやるッ！」

ネクストは通信機に吠えた

二つの目を前方のジムクウエルを睨むのに集中させる

敵が右手の銃を構えた

突進のまま接近してくる青い影に、ナガレボシが剣を向けた

ジムクウエルの武器から銃弾が連射される

「マシンガン程度・・・」

「ダメだネクスト！かわせ！」

「なっ・・・？」

回避せずに棒立ちになろうとしたネクストは、レイゼンの叫びで我に返る

ジャンプして避けると、飛び込んできた銃弾によって地面が深々と抉られた

「敵の武器はジムライフルだ、ドムやゲルググでもまるで紙切れのようにズタズタにする代物だぞ！」

「受けなきや良いんだろ！空にいれば・・・」

自由落下の途中で、ネクストは体に力を込めた

「空にいれば当たらねえ、飛べッ!!」

叫ぶと同時に、ナガレボシの落下が止まる

姿勢はそのままに、ふわりと浮き上がるモビルスーツモドキ

推進材を使わずに、空を飛んでいる

「流石ナガレボシ、気合い入れりやどうにかなるもんだ！」

空中へ向けられたジムライフルが弾を次々と吐き出す

ネクストはそれを右へ左へ揺れるようにかわした

青空へ弾が吸い込まれていく

だが直撃はしない

「当たるかよー！」

走るときより速度は落ちるが、空中にいるというのはかなり大きい

ジムスナイパーⅡのうち一機が、空中にいるナガレボシに気をとられた

「余所見！」

そのコクピットへ、爆薬の塊が突貫した

シュツルムファウストだ

表面を破り潜り込んだシュツルムファウストが、ジムの腹の中で起爆

胴体が粉々になる

「行くぞー！」

白いビームサーベルを頭の上に掲げ、ナガレボシが落ちる

その下には、ジムクウエル

鋭角的なゴーグルアイが、ナガレボシを見つめていた

「うおりやあああああああッ!!」

高速の落下と共に、ビームサーベルの切っ先が振り下ろされた

白い光の束が、ジムの装甲に迫る

だが、ブルースはジムクウエルの姿勢を低くさせた

しゃがむような姿勢になったジムは、背中のブースターを噴射

切っ先をすり抜けるようにして移動した

「なにいつ!?!」

勢いよく振り下ろされたビームサーベルは、ジムではなく虚空を切り裂いた

ブースターの噴射の向きを変え、ジムクウエルが素早く振り返った

ナガレボシの斜め後ろのポジション

ジムはビームサーベルを抜刀する

「ハのやろー!」

袈裟斬りにスイングされたサーベルを、ネクストはサーベルで受けた

ナガレボシのサーベルが、ジムクウエルのサーベルを切断する

ビームサーベルがビームサーベルに切られるという意味不明な現象にも、ブルースは落ち着いていた

どういう原理かは知らないが、実体剣のようにビームサーベルの先端がかき消されて  
いる

通常時より短くなったままだ

が、刃は残っていた

切っ先は短くなっても切っ先である

使えなくはない

さらに、正体不明機はサーベルによるガードの姿勢のまま固まっていた

要素はそれだけで充分だった

叩き切られ、刃が短くなったビームサーベルを、ジムクウエルはそのまま振った

ガードの姿勢のままだったナガレボシは、腕より内側に潜り込まれたその凶刃に対応  
できない

「ぐッ・・・!?!」

ビームサーベルを握っていた右手に、敵のサーベルが食い込んだ

ナガレボシの片腕を、光の刃が食い破っていく

ジムが腕を振り上げた

何かが空中へ舞った

それは何かの片腕だった

光のなくなつたビームサーベルを握る、  
ナガレボシの手首だった

## 強敵、そして増援

振り抜かれるビームサーベル

地面に落ちる右腕

ナガレボシの片腕を、敵のモビルスーツは切断してのけた

「あ」

ナガレボシでは、勝てない

敵のジムクウエルは、それを確信させた

圧倒的な強さを持つナガレボシよりも、強い

ナガレボシのビームサーベルは、敵のビームサーベルを切断する

それは普通、デメリットにはならない

敵はビームサーベルを防御に使えなくなるし、どんなビームサーベルをも防ぐことができるだろう

だが、目の前のパイロットはそのメリットをデメリットに変えた

例え切断されても刃は刃

刃を折られたビームサーベルは、振り抜いたまま刃を折られたまま、ナガレボシの懐に入り込むのだ

ガードの姿勢のままビームサーベルを構えてはすぐに攻撃には移れない  
なまじ受け止めるのではなく必ず切断するからこうなってしまう

だが普通、そのままサーベルを振り回してナガレボシにダメージを負わせることはでき  
きるだろうか

果たしてそこまでナガレボシは隙だらけだろうか

答えは否だ

普通なら斬りかかった後、刃を切られたサーベルを見て一旦離れるだろう  
が、このジムクウエルのパイロットは違った

判断力、胆力、経験、思考速度、そして実行するための技術

全てが怪物的なまでに高い

そんな相手に、勝てるのだろうか

「あああ！うわあああッ!?!」

無理だ、と思った

勝てる訳がない

負ける

死ぬ

「ああ……！」

目今のジムクウエルが、ビームサーベルを腰だめに構えた  
とどめを刺すつもりだ

歯がかちかちと鳴る

体がぶるぶる震える

恐怖が脳を支配する

閃光の刃が煌めいた

ああ、これで終わりか

「ボサツとすんなーっ!!」

ネクストの目がいつばいに見開かれた

ハッと我に返り、体に力を込める

ナガレボシが足下を思い切り蹴った

勢い付いたハイジャンプに、ジムのサーベルが空を切る

「今の声は……まさか！」

地面にヒビを入れながら着地する

ネクストは今の声の主を知っていた

可憐な少女の声だ

「アウラー！」

ジムクウエルの横から、不意打ちのように高速の砲弾が飛んでくる

それに気付き、ジムは盾で受け止めた

ジムクウエルは一瞬爆風に飲まれた

砲弾が飛んできた方向を向けば、一機のザクⅡがブースターを全開に吹かしながら戦場へ突き進んでくるのが見えた

その手にはマゼラトツプ砲が持たされていた

「ウォルター、指示」

「ああ、わかった！」

アウラ・ドレインバークスがマゼラトツプ砲を乱れ撃ちながら、ウォルターを急かした

この場の味方で指揮能力があるのが彼だからだ

アウラ機の撃った砲弾が、グフカスタムにマシンガンを撃っていたジムの頭部を吹き

飛ばす

その隙に、ウォルターは指示を飛ばした

「私とベンとハウゼンで、あのジムクウエルを抑える……アウラは残りの雑魚三機を片

「付けろ！」

腹からの重い声を聞き、三人がそれぞれ飛んでいく

ウォルターがブースターを起動したとき、ネクストが慌てて聞いた

「俺はどうすりゃいい？」

「遊撃だ」

「好きにしろつてことか」

ナガレボシが背中に左手を回す

ビームキャノンに触れると、それはナガレボシの左脇に抱えられた

コクピットで、ネクストの目が細まる

「了解、アウラを援護する！」

空中へと浮かび上がり、ナガレボシはビームキャノンをジム改へ向けた

不味いな

まずそう感じた

ザク一機の増援に、引つ掻き回されている

いや、引つ掻き回されているのは戦闘開始からずっとだ

旧式相手にこちらは二機落とされ、数的優位は最早無い

未確認機を倒して戦意を削ごうとするも、増援に阻まれてしまった

完全に流れは向こうにある

そして、アイアンフィストは数的優位にモノを言わせ、ブルースを止めに来ていた

一対三

ザクIとグフカスタムとドムトローペンの三機種だ

単機ずつなら腕も性能もブルースのジムクウエルが上回る

だが、三機だ

正直単機でもなかなか手こずりそうなのに、三機

攻撃をかわし続けるので精一杯だ

左から来るマシンガンで盾で防御して右からのシュツルムファウストを避けつつ正

面からのヒートロッドを切り払う

バルカンでグフの足を止めつつ、ドムヘジムライフルを向けた

引き金を引く前に横へ滑られ、直撃コースは逃した

精々肩部装甲を削ったくらいか

背後からの接近

旧ザクだ

リーダーを確認していなかったら危なかった

シールドでやけに大きいヒートホークを受け止める

「いい腕だ、敵にするには惜しいほどだな」

突然、通信機から聞き慣れぬ声が聞こえた

男の声だ

状況的に考えて、目の前のザクとの接触回線だろう

ブルースは無視してシールドを押し込んだ

だがザクは離れず、逆にジムクウエルのシールドを空いている手で抑えにかかってきた

「貴官が、ブルース・ウエイン大尉か」

「だからどうした」

接触回線をしつこく続けるザクのパイロットに、ブルースが返答をした

殺し合っている敵と話す趣味はないが、言葉に言葉を返すのは最低限の礼節だ

話をすぐ切り上げるつもりで、二人は会話する

「いや、俺達は単に平和に暮らしたくてね、もう手を出すのはやめてくれないか」

「何故攻撃するかは言ったハズだぞ」

「そうか・・・ならッ！」

ザクがシールドから離れた

旧ザクのどこからそんな速さが出てくるかわからないが、あのザクIはジムクウエルとの距離を素早く離れた

気が付けば、その両脇にはドムとグフ

二機ともが、バズーカをこちらへ向けていた

迷いなくブースターで空へ上がる

一瞬前にいた地点を、いくつもの榴弾が通り過ぎていく  
数が多い

旧ザクも、脚部のロケットポッドをバラ撒いているのだ

先程まで話していた相手のこの態度、あのパイロットは相当の曲者に違いあるまい  
ジムライフルを三機の頭上に撃ち込む

敵は散開してしまった

やはり当たらない

「面倒だな」

そう呟くと、ブルースはペダルを踏み込んだ

一進一退の攻防が続いた

ジム改のシールドが粉々になら

あまりの披ダメージは、防具を粉碎して余りあるものだった

「チツ・・・残弾ゼロ」

アウラのザクがマゼラトップ砲を放り捨てる

地面をごろごろ転がっていく長距離キャノンを捨て置いて、腰から二丁のマシンガンを引き抜く

「お次はこれよ」

両方両手に握り締め、銃口を敵へ向けた

ジムスナイパーIIが、武器交換の一瞬を狙った

ビームスナイパーライフルを向ける

「させつかよ!!」

その胸部を、白色の光線が貫く

狙撃しようとして逆に逆に狙撃を受けてしまったジムは、仰向けに倒れて爆散した

「ファイアー!」

続いてザクIIがマシンガンを撃ちまくる

頭部とシールドを失った機体では防ぎようも避けようもなく、ジム改が一機あつきりと碎け散った

「足手まといにはなつてないわね」

「こんなの屁でもねえや！」

「調子に乗らないで」

「へいへい・・・つと！」

ナガレボシが空中へ飛んできたミサイルを避ける

残ったジム改が装備しているのは、携行型のミサイルランチャーだった空をくるくると回りながら、飛んでくる弾頭をいなす

「・・・アサルトコンボ、スタート」

アウラがレバーとペダルに力を込めた

「一気に決める・・・！」

瞬間、ザクが弾かれたように突撃を開始する

両手のマシンガンを乱射するアウラ

それに対応するように、ジム改はシールドをそちらへ向けた二丁分のザクマシンガンの弾丸が、真つ赤な盾に弾かれる

だが抜けない

弾はシールドを削りこそすれ、壊せてはいない

いずれ突撃するザクとジムのシールドがぶつかり、止められてしまうだろう  
それは非常に良くない

「りゃッ！」

だからネクストは、左手で作ったピストルの人指し指を、勢いよく折り曲げた  
ジム改のシールドへ、ビームキャノンが撃ち込まれる

盾は高熱により溶断され、真つ二つとなり使い物にならなくなった

よろけるジム

それを見逃すバカはいない

アウラは二丁のマシンガンを躊躇なく投げ捨て、腰にマウントしたヒートホークを取  
り出した

その数二本

両手に一本ずつ持ち、大きく振りかぶる

超高熱に熱せられた斧の刃は、なんの防御も持たない哀れなジムの装甲へ食い込んだ  
左手の斧が敵モビルスーツの右肩から左脇腹に切れ跡を残した

そして、そのまま右手も振る

ジム改の上下半身は、荒々しい切断面を晒しながら別れた

モビルスーツの爆発からブースト移動で逃れて、アウラが言う

「撃破完了」

「へっ、楽勝だぜ」

「落ち着いてて」

「へーいへい！」

## 嵐は過ぎ去る物

「全滅……か」

グフカスタムの片腕を放り投げた後、ブルースは眩いた  
辺りには、出撃時に五機いた部下の機体の、その残骸

四つある

敵部隊との接触前にやられたのを合わせれば、ちょうど五つ

ブルース機以外は、全て撃墜されたということになる

ジムクウエルを反転させて、ブルースはもう一度眩いた

「……私では勝てない……」

そのままスラスターを噴射しながら、ブルースは撤退した

頭部を失ったドムトローペンが、首下に付いていたサブカメラで、  
ジムクウエルの撤退を見守った

遠くなっていく青と白のツートンを確認し、レイゼンがため息をつく

「近辺に残存敵勢力なし」

「了解」

汗まみれになったウォルターが、気だるげに返答する

性能差やパイロットの腕の差があるとはいえ、三対一で押しってくる化け物との戦いから解放されたのだ

「待たせた、今・・・ジムクウエルは？」

隻腕の不思議兵器がこちらへ走ってくる

猛烈な土埃が足下から出ているが、加勢しに来たなら全速で来るのは当然なので、何も言わない

「帰ってつたよ、尻尾巻いてな」

「そ、そうか・・・良かった」

ネクストの心底安堵したような声を聞き、ウォルターは苦笑した

未知の力であるナガレボシを手に入れても、増長することもなく、恐怖を感じているそこに人間らしさが溢れているのを感じた

口にする余裕はないが

「作戦終了！全機、帰投せよ」

ナガレボシの後からアウラのザクIIが向かってくるのを確認し、ウォルターは戦いの終わりを告げた

ウォルターの指示に、誰もがなんの反応もせずに従った

今回の戦闘が、なかなか凄まじかったのが原因だ

増援として後から出てきたアウラを除いて、戦闘に参加したパイロット達は一様に疲れきっていた

グレッツクリーのグフカスタムは片腕を持っていかれた

レイゼンのドムトローペンは頭部を破壊された

ウォルターのザクIはそんな二人をフォローするので精一杯だった

そしてネクストのナガレボシは、右手を切断され、トドメを刺されるところだった

それもこれも、一気のジムが、いや一人のパイロットがいたからだ

ブルース・ウエイン

恐ろしいパイロット

ウォルター、グレッツクリー、レイゼンの三人がかりでようやく足を止めたパイロットそして、今まで連邦のモビルスーツ相手に大暴れし続けていたナガレボシを、一方的に叩きのめしたパイロット

もしあれが、またアイアンフィストに襲いかかってきたら

もしあれが、ガンダムのような高性能機に乗ってきたら  
無数の可能性に、ネクストの背筋が凍る

「強かったの？ ジムクウエル」

「・・・ああ」

「そう」

アウラの問いに、ネクストは曖昧な答えしか返せなかった  
完全にトラウマとなっていた

存在が脳裏をかすめるだけで身震いしそうになる

明確に死にそうになったのは、ナガレボシに乗ってから何回かある

だが、圧倒的な力を叩き込まれたのは、これが初めてだ

性質による弱点を突かれたのでも、数に押されてしまったのでもなく、技量を使った

一対一での敗北

すなわちタイマンでの力負けだ

それも、こちらは化物機体ナガレボシで、相手はロートルな旧式だ

その上で、殺されかけた

これが恐怖以外の何者か

だが主な原因はわかっていた

単純なことだ

まったく簡単なことだ

「腕が足りなかつたんだよなあ．．．!」

パイロットの腕、これがあれば、あそこまで追い詰められることもなかつた  
もしかしたら倒せていた可能性だつてあつた

だが、ネクストには絶望的に実力がない

それらはナガレボシの性能で補つていたからだ

三回の戦闘で腕を上げた可能性はあるが、それだけだろう

ほとんどにわか仕込みだ

ブルース・ウエインには通用しない

なら、通用するにはどうすればいいのか

ネクストは、真つ先に目の前の旧ザクの乗り手に求めることにした

「なあウオルター」

「なんだ」

「強くなりたい」

「物理的にか」

「いや、コイツを乗りこなしたい」

即答するネクスト

それに対し、ウォルターはクスリと笑った

笑われたことに気付いたネクストが、口を尖らせて抗議する

「な、なんだよ、おかしいかよ」

「フフン、いや、これは頼もしいなと思ったんだ！別にお前を馬鹿にした訳じゃあない」

「そうかよ・・・」

自分の右手を見た

ナガレボシが切り落とされた右手

初めての敗北の証

またブルース・ウエインと戦えば、これ以上のダメージを食らい、今度こそトドメを刺されるだろう

ネクストは何となくわかっていた

「付き合おう、全力でな」

「・・・ああ、頼む」

強くならなければならぬ

連邦やらジオンに踏み潰されていく人達を、少しでも救いたい

それには、ナガレボシの力が必要で、そのナガレボシの力を引き出すには、自分の技

術やらなんやらを磨かなくてはならない

ネクストは拳を握った

ナガレボシも拳を握るモーションをとるが、手首が無いのであの歪んだグーは作れなかった

「俺は・・・」

深呼吸をする

たった一言、独り言を言うための準備だ

独り言とはいえ、口に出すのは恥ずかしい類いの台詞だ

そして、口に出すのは勇気のいる台詞でもある

握り拳を胸に当て、ネクストは呟いた

「・・・俺は、強くなりたい」

目線を落とす

遠くまで続く荒野の上には、燦々と太陽が輝いていた

ネクストの胸に、決意が、覚悟が、勇気が、確かにあつた

本人は、そう確信していた

## 帰還三度目

荒野を歩く巨人の列

アイアンフィストのとある建物に、モビルスーツ部隊が近付く

先頭から順に、ドムトローペン、グフカスタム、ザクⅡJ型、ザクⅠ

アイアンフィスト最大の建築物であるモビルスーツハンガーに、のしのしと入っ  
てい

く  
そしてそれより少し離れたところに、そのモビルスーツ達とは似ても似つかぬ異形の  
機体が一つ

ナガレボシだ

「いつも思うんだけどさ」

「なんだ？」

「どうしてナガレボシだけ野晒しなんだよ」

トリコロールの機体の中で、パイロットのネクストがぼやく

その愚痴半分の疑問に、レイゼンが肩をすくめた

「一つ、ハンガーに余裕がない」

「むむむ？」

「二つ、ナガレボシに対応できるモバイルスーツハンガーではない」

「う．．．」

「三つ、野晒しでも問題ない」

「ぐぐ．．．！」

「以上だ、わかったな？」

レイゼンは淡々と説明した

通信しながら器用に自機をハンガーに納める

一方のネクストは、納得したようなしていかないような微妙な心境でうめいていた

一応、理屈はわかってはいるが、なんだか気に食わない

「確かに変なシロモノだけどもさあ．．．」

渋い顔をして呻きながら、所在なさげに立ち呆け

端から見れば、今のナガレボシとネクストは、相当情けなく見えただろう

「まあ、しゃーねーよなあ．．．いつもの場所に置いてこよう．．．」

モバイルスーツハンガーを羨ましげに見つめながら、ナガレボシはとぼとぼと去っていった

「下らないわねえ」

コクピット内部から非常食を引つ張り出しながら、アウラは呟いた  
必要ないものを欲しがっているネクストに対する辛辣な評価である  
本人が聞いたら更に落ち込むレベルの

「まあ、仕方ない仕方ない」

「何がよ」

やや苦笑いがこもった声でウォルターが言った

理解できないアウラに、ウォルターは話を続ける

「雨晒し野晒しな機体で戦うのは、誰だって不安になる、それに……」

「それに？」

「結構な愛着、あるんじゃないか？」

そう言われ、アウラはザクのカメラを巡らせた

写るのは、遠くなっていくナガレボシの背中だ

「ふうん……」

ネクスト・ブレイクは、アイアンフィストのすぐ近くで倒れていた

ネクストを保護したその日の夜、ナガレボシが流星に包まれながらやってきた

彼にとっては、この地における唯一の後輩とも言える相手だろう

「ネクストにとつてのアイアンフィストでの記憶は、ナガレボシとの記憶でもある」  
「だから、それを大事にしたいっていうの？」

「本人はどう思ってるかわからんき……だが、命を預け続けているんだ、なかなか愛情を持つてやってるのはわかる」

ナガレボシの背中を見続ける

やがて、アウラのザクがハンガーに入る番が来た

ちゃんとした手順にのつとり、ゆつくりと指定の場所に移動する

「……変なやつ」

ネクストのあの間抜け面を思い出しながら、コクピットハッチを開ける

外部から新鮮な空気が入り込み、汗ばんだ体を冷ましてくれた

さて下に降りようかと思つた時、アウラはグレックリーを見付けた

「今日も頑張つたな相棒！片腕ちゃんと直してこいよー！」

独り言をしながら、グフに向かって笑いかけていた

いや、グフカスタムに語りかけていたのだろう

「そんなもんなのかな」

特にこのザクに思い入れはない

だが、自分はこの前、ザクの整備に鬼気迫る表情で臨んでいた

それが愛着なのだろうか

考えていたらもうザクの足下だ

小走りでモバイルスーツハンガーを出ると、まだナガレボシの背中が見える

「ちよつと、鈍亀じゃないの？」

通信機にアウラが呼び掛ける

相手の返答も通信機から帰ってきた

「その、コイツ走るのには速いんだが、歩くのは遅いみたいでさあ！」

「走ればいいじゃない！」

ネクストは困ったように答えた

「いや、走ったら色々壊すし、それにすぐに止められないし……」

アウラの眉間に皺が寄った

「使えないわね……ホントにつ！」

## 午前九時にはミルクコーヒー

朝起きて最初にやることは歯磨きだ

その次に朝飯

朝食の次に後片付け、そして掃除

それがネクスト・ブレイクの朝だ

ここは空き家だ

ネクストがアイアンフィストで目覚めたときにいた家だ

そのままここで住まわせてもらっている

食料も水も電気も不自由していないが、こういうのは何かムズムズする

だから家事をやるのだが、これがなかなか身に付かない

「おーっすー」

唐突に玄関が開け放たれた

一人の女性がゆっくりと家に入ってくる

リーア・カストレルだ

「ネクスト君、おはようっ！」

「リーアか、おはよう」

手提げ袋を持ち上げながらはつらつに挨拶するリーア

ニコニコした笑顔が朝日を跳ね返している

「ほいこれ」

リーアの持つている袋を受け取る

口を開ければ、中には黒い粉が入っている大瓶が顔を覗かせる

「良いのか？こんなに沢山」

「一人だと飲みきれないから、おすそわけ」

「まあコーヒーだからなあ」

苦笑いをしながら袋を台所に持っていく

「ああ、上がっていいよ」

「はい、お邪魔します」

やかんに水を入れて、コンロに火をつけて、乗せる

「ミルクは？」

「あついいの？じゃあ砂糖とミルク多めで」

コップを二つ出して、コーヒーパウダーを一匙ずつ入れる

ネクストの方は外に何も入れない

リーアの分には、角砂糖を二個と牛乳を大匙二入れた

コーヒーパウダーがスプーンから少々こぼれたが、後で拭けばいいと無視した

「おまたせ」

「おお、頂きますー！」

リーアは少しかき混ぜてから口を付けた

ネクストは一分ほど吹いて冷ました

熱いままガブガブ飲むリーアを見て、ネクストはやや情けなくなつた

「ところでさ」

「どうした？」

「連邦とジオンってさ、どういう考え方してんの？」

ああ、とネクストは思った

知らない人もいるよな、と

テレビとか、ラジオとかの向こうの存在だと無意識に思っている人間だつていないわけではないのだ

なにか、戦争やつてる陣営同士なのだから

ネクストはちびちびコーヒーを飲んでから答えた

「地球連邦つてのは、自分の領地を守る習性があるんだよ」

「なにそれ、自分勝手」

「いや、領地が凄く広いから色んな人が連邦に守られてるんだ」

「ふーん」

「だが、色んな物を手にする性質だから、人間達が私腹を肥やして腐りやすい」

「ジオンは？」

長々と話して、その質問に困った

まあ片方を話したらもう片方を話すのは当たり前だが

コーヒーをまたちびちび飲んで答えた

「ジオンつてのは、今に限定して言えば、連邦の傲慢を嫌がってる、スペースノイドにも幸せを求める人達だな」

「なんでそれがいけないの？」

「まあやってることテロだからなあ、話し合いでは連邦は耳を傾けないし」

「手段が問題なんだ」

「そう」

二人は同時にコーヒーを啜った

小気味いい音が響く

「じゃあつまり」

リーアがスプーンを回しながら聞く

「傲慢で所々ダメダメだけど沢山の人のために働いてる連邦に、言い分は正しいけど手段を選ばないジオンが喧嘩を売ってるわけ？」

「そういうこと」

「ふうん、でもさ」

「ん？」

「それでいっぱい人が死ぬんでしょ？」

ネクストはカップを見た

黒い波紋の中に、自分が見えた

そうだ、そんな奴等がぶつかり合って出た被害が許せなくて、自分はナガレボシと共に戦うことを誓ったのだ

大きな力二つに挟まれた、小さな命達を、助けたいために

玄関でドアノブを捻りながら、リーアが振り向いた

笑顔が眩しい

「ごちそうさま！また来るね！」

「ああ、またな」

軽く別れの挨拶をして、リーアは行つた

「それで人が死ぬ、か・・・」

リーアの一言を反芻した

考えただけでも嫌だ

どんな理由があるにせよ、多くの一般人を巻き込み続けるのは、ましてや死なせるのは、決していけないことだ

「そんなの、許せないんだ」

ネクストの決意は、少しでも余分に固まった

いい、コーヒータイムだった

## 鍛練

コーヒーを飲んですぐ、ネクストとはある場所に向かった

ナガレボシの置いてある場所だ

ウォルターと約束があった

「すまない、遅れた」

全力疾走しながら来たので、息があがり、体に汗が浮いていた

体に籠った熱を逃がすため、毛穴が開く

「ああ、問題ない・・・が」

「が？」

少し走っただけでヘトヘトのネクストに、ウォルターは冷ややかな視線を向けた

じつとネクストの醜態を見る

「さて、強くなりたいんだっただな？理由は聞かないが・・・その台詞に嘘はないようだ」

「勿論だ」

「では、まずは授業から始めようか」

「ぎ、座学・・・？」

いきなり座学をやると言われ、ネクストは首をかしげた

理論から入るつもりだと思ったが、戦闘の強さにテクニク以外のことが必要なのだ  
ろうか

やや困惑しているネクストを放っておき、ウォルターは淡々と続けた

「お前の報告が正しいなら、ネクスト、ナガレボシの動作はお前の動作と連動しているということになる」

足下に寝かせていたパイプ椅子を起こし、組み立てていく

手際よく一席を用意したウォルターを見て、ネクストは所在無さげにそわそわし始めた

正直、突っ立ったままは辛い

座りたい

「普通のモビルスーツとは根本的に操縦システムが違う」

「それが、どうしたんだ？」

察するのが下手なネクストが、頬を掻きながら聞いた

椅子に座らせてもらえないイライラも少し含まれていたが、純粹に興味もあつた

「つまり、パイロットの身体能力が反映されやすいということだ」

「俺の運動神経が、ナガレボシに？」

「そうだ・・・そしてナガレボシの動きに、お前は着いてこれていない」

ネクストの息が一瞬止まった

心当たりなど腐るほどある

走らば止められない

拳の威力もモビルスーツを倒せるほどではない

飛行だつてぎこちない

それもこれも、ネクストがナガレボシを動かすのに慣れていないから起きていた

そして、ナガレボシの操縦方法はネクストが対応する四肢を動かして行われる

「俺が弱いから、ナガレボシも弱いのか？」

「まあそういうことになる」

思わず肩を落とした

「それでもジム相手に大暴れできるナガレボシが凄まじ過ぎるんだが、あのブルース・

ウェインには通用しない」

「性能だけでは、勝てない相手・・・」

歯噛みする

前回の屈辱は、ネクストの心裏に巣を張っていた

あれに勝てるか、どうやったら勝てるのか  
ネクストはそれを考えていた

強すぎる

連邦軍大尉ブルース・ウェインは強すぎる

今のネクストでは、手も足も出ないであろうことは明白だ

「というわけで、本日からネクスト・ブレイクの訓練学習を行う」

パイプ椅子から素早く立ち上がり、ウォルターが宣言した

呆けた顔でネクストが質問する

「訓練学習って・・・具体的に何を？」

「まずは基礎体力だ」

くたびれた軍服の襟を開きながら、ウォルターは冷たい視線でネクストを見据えた

そして視線以上に冷たい一言を浴びせてしまう

「まずはアイアンフィスト外周してこい」

「・・・嘘・・・だろ」

ウォルターやネクストが住むアイアンフィストは、大規模な集落だ

数百人の老若男女が、ここで生活している

連邦の攻撃で一部が破壊されたもの、元氣な住人はいた

ジムのマシンガンで全滅するちやちな場所ではなかったのだ

そんなアイアンフィストだが、だからこそ広い

なにせ何百人のための住居とそれを養う施設が存在するのだ

広いのは当たり前だった

「ぐっ、ぐええっ、辛い……」

すっかりへトへトになったネクストを見付け、ウォルターが半笑いで出迎える

「ゴールだ、よくやったな」

「キツかった……」

もはや汗は身体中から滝のように溢れ、水の中から飛び出してきた怪人のようだ

片膝立ちで息を切らせながら、ネクストはうつむいた

「さて、これを毎日やるとして……」

そう言うと、ウォルターは軍服の上着を脱いだ

Tシャツの上からでも、無駄のない筋肉が目立つ

ウォルターは静かに、しかし素早く、拳を前に向けた

ボクシングの構えだ

「腕つぶしも鍛えなければな」

「・・・マジかよ」

青ざめたネクストは、ナガレボシを見上げた

どうやらコイツを乗りこなすには、相当な努力がいるようだ

## アイアンフィストにて

視界一杯に広がっているのは、澄みきった空と雲の群れだった  
クラクラする頭でも、青と空のコントラストが美しいと思えた

大の字になって倒れながら、ネクスト・ブレイクは青空を眺めていた  
「まあこんなものか」

経験を感じさせるバリトンボイスが聞こえた

顔をそちらに向けると、無駄のない体つきをした男が仁王立ちしていた  
「ウォルター、もう少し容赦してくれ」

「本気は出していないが、お前の鍛え方がなっちゃいけないだけだろう」  
「マジかよ」

ネクストの顔はアザだらけになっていた

ウォルターに何度も顔面を殴られたためだ

別にウォルターの怒りを買ったわけではない

「いや、ホント、ここらまでボコボコにされるとは思ってたかった」

ネクストは強くなりたいと望んだ

ウォルターはそれを承諾した

ウォルターはネクストを手つ取り早く鍛えるために、生身の模擬格闘戦をすることを提案した

ネクストの駆るナガレボシが、ネクストの動きに合わせて動く特殊な機動兵器であるためだ

「俺も、ここらまでボコボコにできるとは思っていなかった」

ナガレボシの動きをマトモにするため、操縦しているネクストの動きをマトモにしようというねらいだった

「この様だぜ」

「何を誇らしげに」

だがなんといつてもネクスト・ブレイクはこの前まではただのバックパッカーなのでいきなり喧嘩まがいの模擬戦は無理があつた

ミシミシ痛む体を起こして、ネクストは苦笑いした

「もう一度だ」

友人の腫れた顔を見て、ウォルターは答えた

「やめた方がいいぞ」

のっそりと大地に立つ

ズボンの尻に付いた土を払い、ネクストはボクサーのものを真似した構えをとった  
ややフラついているが、その目は闘志に燃えていた

とんでもないガッツだ、とウォルターは思った

「良いだろう、とことん付き合ってやる」

「よっしゃあ！行くぜーッ！」

そしてネクストはウォルターに殴りかかっていた

それから数分後、アイアンフィストの診療所に伸びた新顔が放り込まれることになる

「と、いうわけなんだ」

「何が、というわけなんだ、だ・・・体張りすぎじゃねえか？それ」

「無茶は過ぎると大変なことになるぞ」

ウォルターに手も足も出ないことを話すと、グレックリーとレイゼンはそう相槌を  
打った

二人ともウイスキーのストレートをカパカパ空けていた

ここは酒の席だ

ネクストがウォルターと食事をしたことのある場所でもある

四個の椅子で囲むテーブルを三人で埋めながら、談笑していた

「それが、ウォルターはな、俺が弱いつて言うんだよ！おかしくねえか？元軍人とド素人だぜ？比べちゃダメでしょ！」

小さなコップに注がれたカクテルサワーを少しずつ喉に流しながら、ネクストは続けた

顔には無数の絆創膏やらテープ留めのガーゼやらが張り付いていて、なかなか滑稽だった

本人は至つて真面目にやっている分、なかなか笑える

「だけども」

ウイスキーを一気飲みしてグレックリーが言う

「強くならねえと、だろ？」

「そうそう」

「じゃあもつと頑張らねえと」

「そうそう、うっ・・・面目無い」

グラスを握つてネクストが固まる

凶星で、反論できない

と、ボトルを傾けていたレイゼンが、何かを思い付いたような顔をした  
「どうした？」

「いや、俺たちがお前にアドバイスをすれば多少はマシになるのではないかと思つてな」  
その提案に、ネクストが椅子を蹴つて立ち上がった

「ホントかつ!？」

「嬉しそうな表情だな」

「ま、大尉にポコポコにされる可能性が低くなるからな、仕方ねえさ」

ヘラヘラとしながら、元ジョン人二人がウイスキーを飲み干した

流石に顔が赤くなり始めているが、二人ともまだまだ正気だ

酔いもいい具合に回っているし、さぞいいアドバイスを貰えるだろう

「そうだな、イメージトレーニング実験とかどうだ？」

「イメージトレーニング実験？」

レイゼンの提示した言葉に、ネクストは首をかしげた

「いやいやレイゼン、ここは生活鍛練法をやらせてみるのはどうだ？」

「生活鍛練法？」

グレッツクリーの提示した言葉に、ネクストは首をかしげた

「よくわかんないが・・・まずはレイゼンの方から聞こうか」

ネクストは頬を掻きながら言った

レイゼンは頷いてから話し始めた

「イメージトレーニング実験とは・・・まあ名前の通りのものだ」

「勿体ぶるなよ」

「せっかちな、まあいい・・・まずイメージトレーニングをして、それからイメージした動きをやってみるんだ」

「イメトレだけじゃ駄目なのか？」

「いや、自分の想像と実際にできることは大分違う・・・それを理解するのは大事だ」

「ただ妄想するだけじゃいけないってことなのか」

「そういうことさ」

「ふうむ・・・？」

コツプを傾けて、今の話を反芻する

このトレーニングなら、鍛練の方向性や自分の能力を理解するのにうってつけだろう  
だが決定打に欠ける気がする

これだけでは、自分の頭の中だけで戦闘スタイルが完結してしまう

それでは、あのブルース・ウエインには勝てない

「グレッツクリーの方は？」

ネクストはもう一方の方に話を向けた

こちらは一体どんなトレーニングなのだろう

「簡単だ、日常生活をしてみればいい！」

「と、いうわけなんだ」

「なにが、というわけなんだ、よ……二日酔いのテンションでここに来るのはよして欲しいわね……」

相変わらずの毒舌で出迎えられた

ここはアウラ・ドレインバーグスの管理する家畜小屋である

アイアンフィストで食べられる肉等の生産の約四割がここで賄われる

残りは外部から買ってくるが、それでも住人の約半数のタンパク質を確保するここの役割は大きい

コロニーと違い環境の激変が多い地球では、肉は強力なエネルギーとして欠かせない

「生活鍛練法つてのは、まあ農作業とかの日常的な重労働で体を根本から鍛え、さらに他の利益を得るといふ突飛な思想で・・・」

「ウォルターもやつてる、つて所に食い付いたんでしょ」

「そう」

アウラの言う通りだ

グレッツクリーに言われるままに始めた生活鍛練法だが、普通にアイアンフィストの仕事をしているだけなのに強くなるはずはない

それなのにネクストが実施することを決心したのは、その生活鍛練法をウォルターが実施しているからだ

そしてネクストが最初に生活鍛練法の場合として選んだのが、この家畜小屋だ

「まあ手伝うなら構わないわ、足手まといにはならないで」

「おう、任せろ」

「あと酒臭い」

ネクストは軍手をはめて腕を回した

流石に一日二日でパワフルになることはないだろうが、ウォルターに近づく第一歩だ  
果たしてどんなハードな仕事待ち受けているのだろう

「じゃ、鶏の卵の回収をして頂戴」

「と、いうわけなんだ」

「いやいや、なにが、というわけなんだ、よ」

手伝いの礼に貰った新鮮な鶏卵を抱えて、ネクストはリーア・ケストレルと話していた

片手割りで卵をボウルに落としつつ、会話の中身を考える

「どういう訳なんだろうなあ」

「私にもわからないなあ」

「脱線してるよなあ」

「そうだねえ」

そんなこんなで、リーアはホットケーキを焼き上げた

ふつくらとしたケーキの山を一つずつ皿に移しながら、リーアはネクストに指示を出

す

「フオーク」

「はい」

「バター」

「はい」

「メープルシロップ」

「はい」

「ホイップクリーム」

「はい」

「泡できてないじゃん、かき混ぜて！」

「はい」

ミキサー片手にネクストが頑張っていると、キッチンの方こうから声が聞こえてきた  
明るく元気で、無邪気さに溢れたアルトボイスだ

「リーアねーちゃん！まだー？」

「僕もうお腹ペコペコ」

「僕もー」

「ごめん、もう少しだけ待っててね！」

何も言えなかった

彼らが明るく元気なのは、リーアの奮闘のおかげだ

連邦の攻撃で家族を失った子供たち

ネクストが彼らを守るなら、リーア・ケストレルは彼らを支える存在だ  
「俺・・・君達の家族を守れなかったけどさ」

ホイップクリームをシャカシャカかき混ぜながら、ネクストは呟いた

「リーアに負けないように、俺は君達を絶対に守るよ」

それは、罪滅ぼしかもしれない

本人たちの前で言わないのは卑怯だとわかっている

だからこれは、意思の再確認と、覚悟のし直しだ

自分で始めた戦いだ

その理由は、大きな力に挟み潰される人達を助けるためだ

それはとても難しい

世界を敵に回すのと同義だった

だが、ネクストはそれでも戦いたいと思った

ホットケーキを待っている子供たち

彼らに、親を失ったような不幸を、もう味あわせたくない

だから、強くなる

強くなりたいと、願った

「ねーちゃん、このホイップクリームしよっぱいよ」

「本当だしよっぱい！」

「涙の味がする〜」

「ねー、そうだよねー」

## 豚小屋と牛舎と鶏の巣箱

突然ふらりと現れた怪人アザ男を見て、アウラは顔をしかめた  
「キモツ」

怪人アザ男はすかさず答えた

「そうストレートに言うのはマジで傷つくからやめてくれ」

「その面構えで豚や鶏がパニックになったらどうするつもり？」

「お前なあ……」

「文句ある、ネクスト？」

二倍に膨れた顔を横に振り、ネクストは肩をすくめる

欠けた犬歯が痛々しい

「さ、今日は牛の世話よ」

「おう」

首にかけて濡れたタオルで顔を拭いながら、ネクストはずかずかと進んでいった

生活鍛練法だかなんだかで始めたが、日課になってしまった

ウォルターに張り倒される度にアウラの家畜小屋に立ち寄り、そこから貰った卵やら肉やらをリーアの所へ持ち帰り料理してもらう

そのリーアの料理は主に孤児達に振る舞われ、ネクストはすっかり彼らの人気者だかなり妙なサイクルだったが、子供たちの笑顔が嬉しくて、ネクストはアウラの手伝いを続けている

アウラは、子供たちのためにネクストに毎回土産を持たせるハメになったので、怒っているような困っているような態度をとっている

だがそれでも、ネクストはアイアンフィストに認められた気がして、嬉しかった

「おっ?」

牛舎に入って見えたのは、見知った顔だった

「よう」

「ウォルターじゃないか」

「ちようど一時間ぶりか」

牛の体をブラシで撫でている、ウォルター・コバツクがいた

首にかけたタオルと頭に巻いた手拭い、そして慣れた手つきが様になる

「怪我の具合はどうだ？」

牛のブラッシングはそのままに、ウォルターはネクストの身を心配した

自分が教え込んでいるとはいえ、ネクストはかなり徹底的に叩きのめされているのだ

無理をして文字通り体を壊してしまうのは、ウォルターとしても不本意だ

「おう、この通りへっっちゃら・・・イテテ」

無事なことを証明しようと自分の頬を叩くネクスト

だが、顔中にできたアザがヒリヒリと痛んだだけだ

「無理すんなよ」

「わーってるってー！」

別の牛に駆け寄り、ネクストもブラッシングを始めた

牛舎の牛を粗方綺麗にしてやると、今度は鶏の卵を回収した

産めなくなっていたのは、後でウォルターかアウラが締めしておくそうだ

ネクストにはまだ屠殺ができない

「連邦パイロットを吹っ飛ばしておいて？」

アウラにはそう言われてしまった

牛、鶏と来て次は豚だ

こちらは簡単だった

餌皿に野菜やら何やらのミンチを流し込む

それだけ

豚たちが餌に夢中になっている間、ネクストが汗水垂らして小屋掃除を手早く終わらせる

ウオルターがいたお陰か、手こずるハズの行程もすぐ終わった

アウラからのやり直し命令や、家畜の糞などに汚れた体を洗い流すうち、すっかり日が暮れていた

着替えに袖を通し、アウラと挨拶を交わしてから、ネクストは家路についた

暗闇にぼつりぼつりと家の明かりが見える

連邦の攻撃から結構経った

アイアンフィストはかつての活気を取り戻そうとしていた

以前はリーアを初めとする料理係が配給のように食事を住民に配っていたが、今や住民は直した自分の家で夕食を作っている

食欲をそそる香りがネクストの鼻孔をくすぐる

あその家はハンバーグか、あの家はカルボナーラだ、あつちのはカレー、向こうはグラタン

働きつばなしで家畜の臭いを嗅ぎ続けたネクストには、心地よい雰囲気だった

そう思う度に、この街を守ってよかったと思える

通る家々の夕食の香りを堪能しながら歩を進めた

自分の家が見えたが、無論明かりはない

家主がいないので当然だ

だが、玄関前に二人の人間がいた

一人はまたもウォルター

もう一人は、アイアンフィスト町長代理、ビーンだった

「ネクスト君、だね？少し面倒なことが起きた」

開口一番そう言ったビーンの隣で、ウォルターがいつになく真剣な表情をしていた

## 前兆

何がなんだかわからないままに、ネクストはテントに連れてこられた

このテントは、アイアンフィストの二回目の戦闘の前においてネクストが待機していた場所だ

今は解体せず、仮組の作戦室として置いている

そしてこの作戦室には、ネクストとビーン、そしてアイアンフィストのモビルスーツパイロット全員がいた

ただ事ではないことは、戦争素人のネクストにも察することができた

「さて単刀直入にいこう、あまり長つたらしいのは嫌いだ」

ウォルターが早速切り出した

「五分ほど前、大規模なジオン残党連中が俺に通信を送ってきた」

その場の全員の目付きが険しくなる

ジオン残党

一年戦争において地球連邦軍と争った当時のジオン公国軍の一部が、ジオンの敗北と

いう形で終わった戦争終結を認めず、当時からの戦力を以てテロ活動をしているものの総称である

無論、戦争終結後ジオン公国から姿を変えたジオン共和国の関連はなく、むしろ残党は共和国の存在を否定する始末だ

ジオンの創設者の故ジオン・ズム・ダイクンが掲げたジオニズムなどを理想として執念の限り聖戦という名のテロを続けている、危険な存在だ

地球連邦を眠り続ける人食い虎とするなら、ジオン残党はさしずめ永遠に暴れ続ける毒蛇だ

そんな奴等が、このアイアンフィストに接触してきたという

それも大規模な、という注釈がつくレベルの部隊が

「俺の同僚だ・・・ソイツがリーダーの、ツバイノワールという部隊だそうだ」

ウォルターは全員の反応を見て、言葉が続けた

「あいつらの要求は、アイアンフィストとの協力関係を結ぶことだが・・・」

「戦力に任せて服従させてくるつもりだろう」

腕組みをしながらレイゼンがウォルターの話の切った

現実的な意見だった

「だが従わなくては本格的に磨り潰される」

「そうだ」

「最初から逆らわない方が、待遇はいい」

レイゼンとウォルターが二人で話を進めていくと、グレックリーが大袈裟に手を上げて制止した

「で、最初から従ったときのメリットは？」

「そうだな、今この近くの連邦軍は力を溜め込んでいると思う・・・そいつらを確実に始末できるだろうな」

あ、とネクストは呻いた

来なくなつてから大分経つが、連邦軍部隊の攻撃が終わつたわけではない

今までは地方の部隊らしい貧弱な装備で攻撃してきたが、アイアンフィストに叩きのめされた後にぱたりと来なくなつたのは、確実にアイアンフィストを仕留める準備を進めているからだろう

それに気付かずにのほほんと暮らしていたネクストは、恥ずかしくなってきた

何故そのくらい思い付けなかったのだろう

「んで、従つたときのデメリット」

「このアイアンフィストはツバイノワールの奴隷になり、煮るも焼くも奴等に委ねられることになる」

グレックリーの二度目の質問に、ウォルターは肩をすくめて答えた

実際相手はそれしか望んでいないだろう

たまたま連邦と敵対した町があり、そこに大量の物資があり、さらにそこが自分達より小さな戦力しかなかったなら、利用するのが上策だ

ミリタリーパワーが拮抗しているならともかく、自分達より下なら取り込んでしまうのは当たり前だ

その場の全員の視線がビーンに集まる

この男の決定が、アイアンフィストの決定だ

服従か死か

ビーンは傍らのウォルターに視線を向けた

「おいウォルター」

「なんだ」

「ぶつとばしてくれ」

「了解した」

たった三秒に満たないやりとりで、それは決まった

徹底抗戦

アイアンフィストの自由を奪わせない

連邦ジオンまとめて相手取る

それがビーンの出した結論だ

ネクスト以外の全員が頷く

「やるだけやってみよう」

「妥当だな」

「俺もそう思ってたんだよ！」

「どうやって蹴散らそうかしら」

血気盛んなモビルスーツパイロット達の姿を、ネクストは眺めていた

だが同時に思い出した

ジオン残党というのは、いわば理想を掲げたテロリストなのだ

かつての栄光にすぎり、自分達の意見こそ正しいと思っている、エゴイスト

連邦とは真逆だ

連邦は間接的に殺し、ジオン残党は直接的に殺す

だから、許せないと誓った

奴等、ジオニズムの旗の下に人をいきなり殺すだけでは飽き足らず、この平穏な集落

を食い潰すつもりだ

ネクストの頭は怒りで染まった

「ああ、やるぞ」

ネクスト・ブレイクの一言に、その場の全員が首を縦に振った

「また戦闘だよ」

会議の後、ネクストはナガレボシの足に寄り掛かっていた

生憎の空模様で星は見えず、星明かりでナガレボシを見ることはできない

「ごめんな、何度も何度も殺し合いさせてさ」

水筒の中身を口に含みながら、ネクストはナガレボシに話しかける

その視線には、二つに割れた巨大な隕石があった

「宇宙からの長旅だったのにな、災難だったな」

一つ、大きなため息を吐く

これは一人言となんら変わりない

ナガレボシは話さないし、ネクストを含めた人間の言葉にリアクションすることもな

い

機械か生物かわからないこの存在だが、話を投げ掛けるのは無駄と言っている

だがネクストは話し続けた

「だけどき、もう少し力を貸して欲しいんだ」

水筒の中身はウイスキーだ

「俺、アイアンフィストを守りたいんだ」

仲間と飲んだ酒は、旨かった

「だから、力を貸してくれ、ナガレボシ」

最後の一滴を飲み干すと、ネクストはナガレボシから離れ、立ち去った

「俺も頑張るから」

ネクストがナガレボシから視線を外した時、ナガレボシの眼が一瞬光った  
それは星のように、夜の曇り空に輝いた

## 火蓋は落とされた

旧ザクの中で男が一人

パイロットシートに身を沈め、視線を巡らせている

ウォルターは通信機のスイッチを着けた

「どうだ？」

「こちらからは何も」

「俺の方も、何も見えない」

部下二人の返答を聞き、ウォルターはもう一度ザクのカメラをズームさせた

先程地上レーダーに反応があつた

旧ジオン公国の地上移動艦ギャロップ級とダビデ級の反応だ

こんなものをこの周辺で運用する者など、ウォルターには一つしか心当たりがない

ツバインワール

アイアンフィストを手中に収めんとする、巨大なジオン残党組織

ついに彼らがやって来たのだ

だがアイアンフィストの内部での決戦はまずい

少し離れた所で迎撃することにした

が、一向に敵モビルスーツは来ない

陸上艦も見当たらない

「あんなに近付いてきて、まさか何もせず引き返すわけもあるまいが……」

視界を移しても、荒野が広がるばかりで何もなし

レーダーは故障していない

ならばなぜ敵はこちらへ来ていないのだろうか

違和感だけが積もっていく

その時、オープンチャンネルで語りかけてくる者がいた

「ご機嫌はどうか？ ウォルター・コバック大尉」

「……マーヴェル！」

「頭上を失礼するよ」

その声と共に、ザクIの巨体を影が覆った

上からの何者かが、ザクへの太陽光を遮っているのだ

ウォルターは弾かれるように上を向いた

「……ッ!? バカな、ありえない！」

そこには、ジオンの飛行空母ガウがあった  
敵は来ていた

地上用レーダーに捉えきれないはるか上空から

ダビデにギャロップ、それにガウ

戦艦をこんなに使用できる

ツバイノワールはそのような巨大組織なのだ

「おかしいだろオイ、これえー」

グレックリーが思わず叫ぶ

燃料馬鹿食いの空中戦力を、残党が涼しげな顔で運用しているのだ

その異常性は、実際にそれを使っていた彼らにはよくわかる

ウォルターはガウを凝視した

その前方、発進口から、板のようなものが次々と出てくるのを見た

サブフライトシステム

モビルスーツを上に乗せて飛ぶ戦力だ

「いきなりの訪問で悪いが、君のお宅へお邪魔する」

マーヴェルがわざとらしく、ゆっくりとウォルターに言った

「その後で交渉しようか」

「引き返すぞ！」

ウォルターはザクイーのスラスターを全開にした

ランドセルから炎が放たれ、モビルスーツに推進力を与える

だが足りない

ガウには追い付けない

「大尉、アイアンフィストの外側に留まらなくては、向こう側にいるギャロップの接近に対応ができません！」

「だとしても今はアイアンフィストが先だ！」

レイゼンの申告に、ウォルターは吐き捨てるかのように言い放つ

「ガウからモビルスーツが出ている、奴ら空中から戦力を降ろしてアイアンフィストを直接叩くつもりだ！」

切羽詰まった表情でウォルターが捲し立てる

自分でも、こんな状況でよく舌が回るものだと思えた

まさか、ツバイノワールがガウを使ってくるなんて

「急げ！」

コクピットのペダルを精一杯踏み締める

今のアイアンフィストはがら空きだ、あつという間に制圧される

このままでは、帰る場所を人質にされてしまうのだ

ドダイから一機のモビルスーツが降りてきた

陸戦型ゲルググだ

他にも、アイアンフィストに次々とモビルスーツが降りてくる

そのどれもが、両肩を黒く塗り潰していた

それは彼らのパーソナルマークだろう

だが、同時に得体の知れない威圧感も伴っている

そのモビルスーツ達に囲まれながら、隙を見せないように立ち回る別の陣営のモビルスーツが一つ

アウラ・ドレインバークスのザクⅡである

マゼラトツプ砲を握り締め、振り回している

「この数……ウオルター達は何やってたの!？」

冷や汗が垂れる

敵の数が多い

どう見ても制圧するための戦力だ  
質はともかく数が多い

アウラ一人では対処できない  
勝つのは難しい

ペダルを踏み込んだウォルターの耳に、かつての戦友の女の音がする  
「ウォルター、取引をしよう」

「取引だと？」

思わず通信機を覗む

だが、なおも通信機はマーヴェルの声をウォルターに届けた

「私達と共に、地球連邦を打倒しジオン再興を果たそう」

「嫌だと言ったらどうなる」

「君の愛した場所はメガ粒子に消える」

ザクのコクピットではを食い縛る

視線が揺れ、心臓が早鐘を打つ

従わなくては、アイアンフィストは滅茶苦茶にされる

「君達の立場は保証しよう、連邦を打倒した暁にはこの星で好きなように生きるのだ」  
マーヴェルがここぞとばかりにウォルターへ話しかける

「この前まで連邦の攻撃に苦しめられただろう？それも無くなるのだ」

その言葉がウォルターの耳に入る度、ウォルターはアイアンフィストを想う

「一年戦争の頃はジオニズムに興味があつただろう？それをさらに探求するんだ」

マーヴェルの言葉を飲めば、アイアンフィストはまだ生き延びられる

「ここをさらに発展させるんだ、なあウォルター」

断れば、奴は迷いなくアイアンフィストを叩き潰すのだろう

「さあ、ウォルター」

女はゆつたりとした口調で迫る

ウォルターの心が揺れ始めた、その時

「・・・見付けた！」

ザクIのレーダーが、上空にいる大きな何かを写し出した

間違いない、ガウだ

再びペダルを踏み込む

ウォルターのザクは、スラスターで空中へ飛んだ

「これが答えだ、クソツタレ！」

脚部ミサイルランチャーが火を吹いた

リーダーが指し示した方の空へ、弾頭が向かっていく

しばらく飛んでいったミサイルは、どこからか飛んできた幾つかの閃光に貫かれ、爆散した

着地、リーダーを見る

グレッタクリーとレイゼンも着いてきているようだ

ウォルターはマシンガンを前へ向けた

そこにはドワツジがいた

敵のモビルスーツだ

そう、敵だ

かつて共に戦った元同志でも、取引によつてできた新しい仲間でもない  
「おおおおおあアツ！」

大型ヒートホークを振り抜き、突撃する

雄叫びをあげて、ウォルターはツバイノワールへ躍りかかった

## マーヴェル・クミクスの記憶

私はマーヴェル・クミクス

生まれはサイド3、UC0059生まれ

今は同志達と共に、連邦と戦いを続けている

18歳のとき、ジオン公国の士官として軍に入隊した

入隊の理由は簡単だ

地球連邦政府に怒りを覚えたからだ

地球から宇宙への大規模移民において、地球連邦は自らだけでもしくは自らに有益な一部特級階層の人間を地球に残し、残りの貧困・中流階層の人間を宇宙へ追い出した

これは棄民である

彼らは自分達だけぬくぬくと肥え、その利益を地球の外へと出さない

自分達だけが地球にしがみつき、その他を暗い宇宙に追い出したのだ

それだけならまだいい

だが連邦は、我らジオンが宇宙に生きる者達として纏まろうとしている時それを断固

として許そうとはしなかった

これを許せるはずがない

つまり奴等は、地球だけでなく宇宙からの利益も独占しようとしているのだ

国父ダイクンとギレン総帥の求めた宇宙国家ジオン

それを作り出し、全てのスペースノイドを救済するには、どうしても連邦を完全に滅せねばならないのだ

ルウム戦役にて初実戦を体験した

モビルスーツ操縦を一通り受けた私は憎き連邦の艦を一つ落とした

今でも、あの時のサラミスのブリッジにいた太った連邦軍人の、恐怖に歪んだ顔を思い出す

同僚が連邦の旧式戦闘機に追いかけて回されているのを尻目に、防衛目標のコロニーを見た

スペースコロニー、私達の済む大地

スペースノイドの居場所を地球を攻撃するための武器とする

胸が張り裂けそうだ、だがこうでもしなければ、巨大な連邦政府に傷を負わせることはかなわない

やがてコロニーが地球に落ちる

これで連邦がダメージを食らえばいいと思った

だがその時、動きの悪い同僚が急に鬼神のごとき腕前を見せた

確か、ウォルター・コバック

そうか、彼は、彼こそは連邦を打倒するに相応しい力を持っている

彼のような力を持った人間が、地球連邦を倒し、スペースノイドに真の平和と自由をもたらししてくれるのだ

私もそうでありたい

地球に降りた私とウォルターは力の限り戦った

敵の懐に潜り込んだのだ、あとは喉笛を刺し貫くのみ

だが連邦の抵抗は激しく、ウォルターは宇宙へと帰った

だが私はこのようなところで諦めきれない

各地の同志をかき集め、いつか必ず連邦を倒してみせる

公国は倒れ、ザビ家は滅んだ

連邦の傀儡である共和国がサイド3に生まれた

我々の状況は苦しくなっていく

だが、必ず、必ず連邦に勝利し、全てのスペースノイドを幸せにしてみせる

そのために私は、全力を尽くした

それから私は、同じような同志達を集め、力を蓄えることにした

水天の涙作戦に手を貸した同胞を回収し

星の屑作戦に参加した同胞を囲い

エウーゴに追い詰められたテイターンズを丸め込み

カラバの過激派も仲間にした

そして、ハマーン率いるネオジオンの残党も

連邦の基地から幾度も武器を奪い、顧客を選ばないアナハイムと契約し、我々は力を

蓄えた

ジオニズムに感化された資本家や融資家とも接触し、資金も蓄えた

そして私は、あの男を再び見付ける

ウォルター・コバック

彼の力があれば、連邦打倒も夢ではない

もうすぐだ

もうすぐ、連邦に虐げられているスペースノイドを、助けることができる

## 無数の一つ目

二機のデザート・ザクがマシンガンを前方に構えながらアイアンフィストを練り歩く倉庫や家屋より遥かに高い位置に、赤く光るモノアイがあつた

この二機はアイアンフィストの機体ではない

アイアンフィストと敵対しているツバイノワールのモビルスーツだ

全長十八メートルの鋼のサイクロプスに、住人達は半狂乱になって逃げ出す

その一団に、デザート・ザクはマシンガンに向けた

ザクのマシンガンの口径は百二十ミリ

人間など、かすっただけでも即死だ

モビルスーツのパイロットは躊躇いもなくそんなデカブツ銃を非戦闘員に向けた

彼らは正義の下で戦っている

立ちふさがるなら容赦などするつもりはないのだ

いつもの台詞を呟いて、引き金が引かれようとした

その時

倉庫の屋根を引き裂いて、何者かが突然出現した

トリコロールカラーに輪のような関節、細身の体に三角形の砲を背負った摩訶不思議な巨体

それはモビルスーツではなかった

だから、デザート・ザクのレーダーには写らなかった

だから、デザート・ザクのパイロットは対応が遅れた

六本の指が握り拳を作り上げ、腕が引かれて振り抜かれる

上手い具合に勢いと重量が乗ったパンチが、デザート・ザクの一体の頭部に打ち込まれた

殴り飛ばされて転倒する一機

それを見て、もう片方がヒートホークで斬りかかる

上から振り下ろされた高熱の刃

その柄を握る手を、ナガレボシは掴んだ

パワーで敵わないデザート・ザク

そのまま脚を払われて、放り投げられた

殴られた機体が立ち上がる

マシンガンの引き金が今度こそ引かれた

異形の機体はそれをジャンプして避ける

そして、ザクの上空に躍り出た

見上げるパイロットが最期に見たのは、ナガレボシの掌から迸る閃光であった

真後ろに倒れ込む同胞を見て、ツバインワールのモビルスーツが勢いよく跳ね起きた

二機目のデザート・ザクが何かを投げた

モビルスーツ用の手榴弾、クラツカード

放物線を描いて飛んでいく

地面に落ちれば大爆発

アイアンフィストもただでは済まない

ナガレボシはダツシユでクラツカードに飛び付いた

両手で捕まえた爆発物を、そのまま敵へ投げ返す

猛スピードで叩き付けられたザククラツカードは、元の持ち主の胸部装甲で起爆した

膝から崩れ落ちるツバインワールのモビルスーツ

その上半身から立ち上る煙に目もくれず、ナガレボシは辺りを見回した

「内部に潜り込んだのは、こいつらだけか……」

身体中に輪っかを取り付けた、ナガレボシのパイロット、ネクスト・ブレイクが安心したように呟く

「ん……あれは!？」

周囲の索敵を始めてから数秒、やや向こうに爆風が咲いた視線の先、いくつもの光と爆発が瞬いている

「あつちはアウラの担当だった……くそ、寄って集って!」

ネクストは身体中に力を込めた

歯を食い縛り、意識を集中する

ふわりと、ナガレボシが浮かび上がった

「行くぞ、相棒!」

青空を滑るように、ネクストを乗せたナガレボシが飛んでいった

ザクキャノンの頭が弾け飛んだ

キャノン装備した機体が、キャノンによる攻撃でダウンするという皮肉だ

頭だけでなく胸や腹も撃ち抜かれ、ザクキャノンは完全に沈黙した

「チイツ、次から次に!」

レバーとペダルを休みなく操り、アウラ・ドレインバークスは愛機を巧みに操って

た

巧みに操らなくては、今にでも撃墜されるのだ

「フッ！そこッ！」

横から伸びるヒートロッドを間一髪で避け、攻撃してきた緑のグフにマゼラトップ砲を撃つ

だがグフは、左手のシールドでその砲撃を防いだ

盾を投げ捨ててヒートソードを抜き、グフがスラストアーを噴射して突撃してくる

反対側からは、陸戦型ゲルググとドムキャノンがマシンガンを撃ちまくる

左肩のシールドでマシンガンを受け流し、アウラはマゼラトップ砲を敵のグフに投げた

大上段から敵の武器を切り捨てるヒートソード

だがそれが隙となった

「私の仲間のグフ乗りは……」

腰から二丁のザクマシンガンを取り外し、握る

「もつと動きが早かったわ！」

左手のマシンガンゲルググとドムに、右手のマシンガンをグフに、それぞれ向けるあまり大きな動きをしなかったゲルググは、スラストアージャンプであっさり射線

避けた

ドムは避けきれなかったが、その重装甲でかすり傷で済ませた  
だがグフの方は、大振りであるヒートソードを振った直後だ  
超硬スチール合金に、大粒の銃弾が徹底的に突き刺さった  
穴だらけのグフは無様に地面に横たわり、動かなくなった

「さあつ、次！」

ゲルググに両手のマシンガンに向けながら、ザクが走り出した  
その気迫に、敵の動きが一瞬固まる

そこへ、アウラはトリガーを押し込んだ

マシンガンの弾幕が両肩の黒いモビルスーツ達に襲い掛かる

だが敵は高い機動力で弾幕を飛び越えた

別の機体は横滑りで避けながら砲弾を撃ってくる

砲撃はザクⅡの肩部シールドをもぎ取っていった

「チッ！」

もう一度マシンガンを撃とうとするアウラ

だが違和感が脳裏をよぎった

弾幕を飛び越えてこちらに向かってくるゲルググが、攻撃してこない

握ったマシンガンを上に向け、裕々とアウラの上を通り過ぎた

その直後、ザクのセンサーが大音量を吐き散らした

「何を……えっ?」

センサーの指示する方向、ゲルググとは反対の方を視認するアウラ

そこには、視界を埋め尽くす量のミサイルがあつた

ドワツジが上下に分かれた

ごろんと落ちた胸から上が、大爆発で消えてなくなつた

「マーヴェル……おのれ!」

かつての戦友の名前を忌々しく吐き捨てて、ウォルターはザクのスラスターを吹かせる

先程からスラスターを使い続けて、推進材が残りわずかだ

だが、ウォルターは冷静に敵へ立ち向かった

ドダイに乗ったハイザックがビームライフルを撃ってくる

ビームを右に通り返させ、クラッカーを投げつける

ドダイに転がったクラッカーが起爆し、ハイザックもろともドダイを粉砕する

落つこちていく足のないハイザックに、ウォルター機の背後からバズーカが撃ち込まれた

ウォルターの横から突っ込んでくるドムも、ヒートロッドを受けて電流を流し込まれた

「大尉、囲まれつつあります」

ドダイの群れにバズーカを幾度か撃ちながら、レイゼンが報告する

「チクシヨー！アイアンフィストはやらせねえぞ！」

動かなくなったドムを切り伏せて、グレックフリーが吠える

「二人とも急ぐぞ！ツバイノワールを、アイアンフィストから追い払わなくては！」

マシンガンを連射しながら、ウォルターが言う

眼光はいつにも増して鋭くなっていた

「俺達の家を守るんだ！」

「どけえええええッ！」

ビームキャノンを抱えながら、ナガレボシは空を動き回っていた

その肩に、対空ミサイルが突き刺さる

ドップだ

ジオン公国の戦闘機が、ナガレボシを追い詰めている  
大柄なナガレボシでは、ハチドリのように高速で動き回る戦闘機を捉えづら  
いが相手にとってそれは逆だ

大きなでくのぼうに攻撃を当て続けるだけなのだから

一条の光線をロールで回避して、もう一度ミサイル

別の機体もミサイルを撃つ

上空からやってきた味方もミサイルを放った

三機のドップのミサイルが、ナガレボシの体を打ち据えた

「ぐああああ!!」

身体中を爆発と爆煙に包まれて、ナガレボシが地に叩きつけられる

大地にヒビが入り、大量の土煙が舞い上がった

手を着いて立ち上がろうとするナガレボシに、ドップ部隊は追撃の急降下爆撃を食ら  
わせた

機関砲の雨がナガレボシの装甲を激しく叩いた

「クソオ、まだまだ・・・」

機首を返して向こうへ行く敵戦闘機に、ナガレボシがビームを撃とうとした

だがネクストは異様な光景を見た

「あれは・・・ッ!？」

今まさに無数のミサイルを前にしている、アウラのザクⅡ  
そのミサイルの一部にたまたま巻き込まれるドムキャノン  
上空から降りてくる、両肩の黒いズサ  
ズサのモノアイが、妖しく輝いた

## スーパーエネミー

それは上空から現れた

空から来たということは、ガウから出撃したということだ

それはモビルスーツであった

低い頭身と曲線のライン、大きな肩部

それは、ネオジオンの機体だった

両手にビームライフルを握り、肩を黒く塗りつぶしたその機体は、かつてのネオジオンが使っていたズサだ

落下してきたズサは、身体各所のハッチを開いた

中には、これでもかというくらいミサイル

ギチギチに詰め込まれた、無数のミサイルだ

もちろん、発射された

迫り来る無数の弾頭

ミサイルでできた壁を目前に、アウラは一瞬狼狽えただけだった

マシンガンの両手持ちで、とにかくミサイルを撃ち落とす

連射されたモビルスーツ用の弾は、ミサイルを貫き、易々と破壊していく

ミサイルの弾幕を、マシンガンの弾幕をぶつけて相殺する

爆発の光が連続して巻き起こり、辺りを照らした

撃ち漏らしのミサイルが脇をすり抜ける

なんとか直撃は免れた

だが、敵は撃破できていない

「いっつー」

マシンガンの銃口をズサに向ける

緑に塗られたズサは、やはり両肩が黒かった

いくつもの弾がまっすぐズサに向かう

しかし敵は、ブースターを用いて連射を避けた

噴射炎の軌跡が弧を描いている

「くっ……」

片方のマシンガンが弾切れを起こす

左手に持った武器を放り捨て、アウラのザクはヒートホークを取った  
敵はゆらゆらと舞うように動いている

右に行くと思つたら左へ、左に行くと思つたら右へ

敵かな舞踊のような動作は、相手に動きを読ませない

アウラも、それに翻弄される

幾度もマシンガン撃つも、その弾丸が敵を貫くことはない

痺れを切らしてヒートホークで斬りかかるも、すんでのとこでひらりとかわされる

そして無闇に接近したのは不味かった

「しまっ・・・」

ほんの少しだけザクから離れたズサは、左手のビームライフルを放つ

その光線はザクマシンガンを貫通した

「ああっ！」

ザクマシンガンは赤く溶け、膨張してから爆発した

破片が持ち主を叩く

溶けた一部が装甲にへばり付く

アウラは武器をやられて一瞬怯んだ

だが、ズサはそこへ攻撃をしなかった

「アウラああああああ!!」

遙か向こうからとんでもない勢いで激走してくる、トリコロールの何かがいたからだ。それはビームを両手から乱れ撃っていた。

ビームに当たってはたまらないと、ズサはスラスターで高速移動した。

ナガレボシが、ズサとザクの間に入る位置に止まった。

「無事か!」

「ネクスト・・・助かった!」

「ああ、それより・・・ぐわあ!」

ナガレボシの前方から、いくつものミサイルが飛び込んできた。

それは一つ残らずモビルスーツモドキに突き刺さり、爆発した。

通信機でアウラに話しかけたネクストが悲鳴をあげ、ナガレボシが真後ろへ吹っ飛び、仰向けに倒れた。

「抵抗は無駄だ、大人しく投降してほしい!」

オープンチャンネルで、女性の声が通信機から流れてくる。

ただならぬ雰囲気だ。

「貴様は・・・?」

「マーヴェル・クミクス、ツバイノワールの頭目だ・・・アイアンフィストのパイロット、

大人しく投降し、我々に協力してほしい……」

ザクは残ったヒートホークを両手に一本ずつ握り締めた  
通信機越しにアウラが吠える

「お断りっ！」

大きく振り上げられるヒートホーク

炎を吐くスラストー

ザクが猛突進し、ズサに斬りかかる

「無駄だよ」

だがマーヴェルのズサは、ひらりと身を翻した

一本目が空を斬る

「こんのおおおっ!!」

追撃の一振りを叩き込もうと、ザクが腕を曲げたその時

「無駄だと……」

ズサがビームライフルを揺らした

その先端には、ヒートナイフ

ズサのビームライフルには、銃剣が取り付けられていた

「言った」

横振りのヒートホークを持った左手が、肘から切れる

一回転を交えた鮮やかな挙動で、ザクはもう一度斬られた

「アウラッ!?!」

上半身と下半身が泣き別れになったザクを見て、ネクストが叫んだ

「後の敵は向こうか！後詰めは任せる！」

「了解、頼まれた！」

「了解です！」

カーキ色の敵のドムをヒートホークで薙ぎ払い、ウォルターが命じる

二人の間は武器を乱れ撃ちながらそれに応答した

再びスラストを吹かし、ウォルターのザクが推進力を得る

あとの敵はベンとレイゼンでも勝てるだろう

問題は別地点だ

ウォルターは一路、アウラのいる場所へ向かった

ヒートナイフが煌めき、ナガレボシの装甲を焼く

だが内部に突き刺さるには至らない

突き込まれたビームライフルを、ナガレボシは掴んだ

ナガレボシの中のネクストは、目線を横に向けた

上下に別れたものの、ザクの胸部は外傷が確認できない

つまりアウラは生きている可能性があるのだ

ネクストは、ズサとオープンチャンネルによる交信を試みた

「何故こんなことをする！お前らの独善的な行動で、何人死んだと思ってる！」

ネクストの問いに、マーヴェルは自信満々に答えた

「スペースノイドの幸福のため！」

「ぐっ!?!」

ズサがもう片方のビームライフルをナガレボシに突き刺す

そちらもやはり、ヒートナイフの銃剣が付いていた

「ジオンの栄光のため！」

ナガレボシはビームライフルを掴む

両者、一歩も退かない組み合いになった

「そのために私は戦っている！」

ヒートナイフが赤く輝く

じわじわと、ナガレボシの白い表面が焼かれて溶けていく

「ほかの人間の言い分も聞かず、自分の意見が正しいと思っているのか！」

「スペースノイドに様々な迫害をもたらす地球連邦を叩き潰すのだ！これ以上の正義は……ないッ！」

「テメエの正義に付き合えるかぁーッ!!」

ナガレボシがビームライフルを強く握る

そして、そのままビームライフルをズサにゆっくり押し返した

銃剣も装甲から引き抜ける

パワーなら、ナガレボシに軍配が上がるのだ

「私だけの正義ではない」

だがマーヴェルは、引き金を引いた

「ジオンの正義だ！」

二つのビームがナガレボシの両腕を貫く

武器を掴んで押し返したばかりに、ナガレボシは回避運動ができなかった

そこへ、ズサが脚部に内蔵されていたミサイルを一気に放った

ナガレボシの全身にミサイルが当たる

「があああああああ!!?」

地に膝を突くナガレボシ

その装甲は、ボロボロになっていた

「まだやられないか、しづと、い」

マーヴェルのズサが、右手ビームライフルの先端をナガレボシの胸部に向けた

「だが、これで終わりだ」

引き金が、引かれる

その寸前、ズサの黒い右肩へザククラッカーが飛び込んだ

全身にミサイルランチャーを付けたズサの右肩には、まだミサイルが残っていた

「なっ!?!」

クラッカーの爆発にミサイルが誘爆し、ズサの肩が破裂した

「お前は!」

クラッカーの飛んできた方向へモノアイを向けたマーヴェルは、橙色の旧ザクを見る

それは、アイアンフィストの用心棒、ウォルター・コバックのザクだった

## 交差する敵意

ビームライフルの銃口が煌めいた

発射された細い閃光

それは目標のザクを貫くことはなかった

「ブレイク！おい、ブレイク！」

ウォルターが通信機に吠える

「起きているなら返事をしろ！」

「ク・・・ああ、無事だ・・・」

呻くような声音で、ネクストが応答する

彼の乗機であるナガレボシは、ズサのミサイルで全身黒焦げた

装甲は傷付き、凹み、挟れている箇所が散見される

それでも、ネクストはまだ無事だ

「ブレイク、母艦をやれ」

「なんだって？」

ウォルターの指令に、ネクストは思わず呆けた声を出した

だが、構わずにウォルターは続ける

「マーヴェルは強敵だが、母艦を叩かれても戦闘を続けるほど蛮勇じゃない」

そう言う間にも、ザクーにミサイルが迫り来る

だが、反復横飛びのような器用なステップで、それらはあっさりとかわされる  
「俺が抑えてるうちに、ギャロップやらダブデやら適当に潰してこい！」

続いてウォルターのザクがマシンガンを撃つ

複数の弾丸がズサのすぐそばを通りすぎた

つまり、避けられる

「よし……任せろ！」

「北西にギャロップ、北北西にダブデ、南の上空にガウだ！頼むぞ！」

くるりと向きを変えて、トリコロールの異形が走り出した

ナガレボシが地を踏む度、土煙と岩とが巻き上げられる

そちらへビームライフルを向けたマーヴェルのズサだったが、足下に転がるザクク  
ラツカーに気付いてすぐに飛び退いた

爆炎に隔てられた向こう、赤いモノアイが強く光る

「お前の相手は俺だ、マーヴェル・クミクスッ！」

クラツカーを投擲した左腕に大振りの斧を握りながら、旧ザクがスラストを噴かした

視界の向こうに、先程見ていた景色が飛んでいく

高速で流れていく景色は、何かしらの映画を見ているようだったが、移動しているのは風景ではない

ナガレボシは両足をとてつもない勢いで振り回していた地に足を着ける度、強く踏まれた荒れ地がさらに荒れる既にアイアンフィストは後方だ

ウォルターの指示通り、北北西の地上戦艦を叩く

「このままビームサーベルでやるか？ いや、無謀か・・・」

ネクストはナガレボシの火力を嘆いた

ビームガンでは大ダメージは期待できず、ビームサーベルはそもそも届かない  
「こいつがもつと威力あればなあ・・・」

そう言いながら、ネクストは背中に手を伸ばす

ネクストの動作に合わせて、ナガレボシも背中に付いたビームキャノンを触った  
そのとき、ビームキャノンが稼働し始めた

ひとりで動き出し、砲口を振り回す

だが、砲自体の位置が、いつもと違う

ビームキャノンが、頭の上に乗っていたのだ

「腰だめじゃなくて、地面と垂直……？いや、これは……」

背中と平行になったビームキャノン

その用途に気付き、ネクストが止まった

「……か！」

そのままナガレボシが四つん這いになる

ナガレボシの頭部に乗っていたビームキャノンは、そうすることで初めて地面と平行  
になった

ネクストが狙いを定める

「……見付けた！」

キャノンが向く先、ずっと向こう

四角い本体に平たくした卵形のブリッジが乗った、ジオンのダブデ級が見えた

その周りには、アイアンフィストへ向かってくるモビルスーツ

あれを近付かせるわけにはいかない

「一般人殺して自分の恨みを晴らすのが正義なら……」

視界の向こうの存在を睨み付ける

それはモビルスーツか

それともダブデか

はたまた、ジオン残党という概念それ自体か

「俺は、悪人のがマシだあッ!!」

ネクストがピストルの形にした右手の人差し指を曲げた

トリガーは引かれ、ナガレボシの背中の中のビームキャノンから、光線が放たれる

それは、ナガレボシを包み込めそうなほどのサイズのメガ・ビームだった

通過点の大地は蒸発し、空気は焼け、石はたちまちドロドロになる

巨大な光の奔流が、地上戦艦を捉えた

「すげえ……」

瞬きする暇もなく、ダブデ級は本体後部を残して消え去った

ナガレボシのビームキャノンが、本当の姿を見せたのだ

ネクストはその威力に恐怖すら覚えた

「取り巻きのモビルスーツもいなくなってる……」

ネクストは目を凝らした

ダブデ級周りで動いていたモビルスーツが見当たらない

ダブデの残った部分に隠れているのか、それとも先程のビームに巻き込まれたか

「・・・戻ろう！」

敵の撃破を確認し、ネクストはもう一度走り出した

ジオンの戦闘機トップが、ザクマシンガンに貫かれて散った

ナガレボシとの空中戦を制したトップ部隊がマーヴェルのズサを援護しに現れたが、ウォルターはそれを軽くあしらう

マシンガンを別のトップに向けようとしたザク

ズサがそれに斬りかかった

「ウォルター、我々と共に連邦を倒さないか！」

「0079くらいなら、OKだったんだがな！」

ビームライフルの先端、銃剣として取り付けられたヒートナイフが、真っ赤になって熱を発した

「なぜ断る、私達の手でスペースノイドの未来を掴むのだ！ウォルター・コバック！」

ザクに迫る、銃剣の一振り

だがウォルターは、大型ヒートホークで銃剣ヒートナイフを受け止めた

二つの刃がぶつかり合う

「俺はもう、この場所を守ることしか考えていないッ！」

ザクがスラスターを噴かした

ジャンプした橙色の影が、ズサのメインカメラにドロップキックを叩き込んだ

仰け反るズサ

着地するザク

「推進材が!？」

コクピットの計器の一つがゼロを表示した

これでウォルターのザクIはスラスターを使えない

だがズサは、頭部を左手で庇いながら後退りした

「ダブデが・・・まさかこれほどやられるとは・・・ウォルター、この勝負預けた」

ズサの後方から、ゲターが飛んでくる

マーヴェルはズサを空中に飛ばし、サブフライトシステムに着地した

空を飛んでいくズサに、残りのドップが随伴した

「二度と、来んじゃねえ・・・」

心から安堵しつつ、ウォルターは毒づいた

ネクストはやってくれた

総大将のマーヴェルが逃げ帰るのだ、残りのツバイノワールも引き返すはずだ

ウォルターはコクピットシートに身を深く沈めた

大きなため息が出た

「後片付けと、次回来たときの対処……いや、打って出るべきか……」

やることは山積している

アイアンフィストの平穏なあのときはまだ来ない

遠ざかっていく元戦友の機体を睨みながら、ウォルターは次のことを考えていた

## 満開の戦禍

酷い有り様だった

周辺はスラスタアの噴射炎で焦がされ、流れ弾がいくつかの建物を粉碎していた  
倒されたモビルスーツはそのまま放置され、屍を晒している

「酷いわね、これ」

一人の少女が、屋根を失った豚小屋を見て呟いた

「ここまで攻め込まれたのは、今回が初めてだ……連中、かなり厄介だぞ」

一人の男が、その言葉にそう返した

「早く叩かないと、本当にやられる」

「専守防衛をやめて、こちらから攻撃を仕掛けるといふこと？」

「そうだ……不本意だが、な」

シワだらけの軍服を羽織り、アイアンフィストの用心棒ウォルターはため息をついた  
つり目の少女、アウラが首を横に振る

「やられる前に、やるしかないわね」

「ああ」

二人はしばらく、そこで剣呑な面持ちをしていた

「連邦の攻撃からかなり経ってようやくと持ち直した矢先にこれだ、嫌になっちゃうぜ」

アイアンフィストの町長代理、ブーン・ゴーンバックは呻いた

積み上げられるモビルスーツの残骸、ズタボロにされた故郷

幸い、あらかじめ襲撃に備えていたために死者は出なかったものの、ツバイノワールがアイアンフィストにもたらした被害はけっして少なくなかった

なにせ、中心部でモビルスーツが暴れまわったのだ

なるべく早く撃退できたとはいえ、ダメージは計り知れない

「面目ない……」

レイゼンが謝罪を口にする

彼にとつては、役目を十分に果たせなかったことが残ったのだろう

落ち着いた雰囲気は崩れ、悔しさがにじみ出ている

「いいや、君らがいなきやもつと酷くなっていた……気にすることはないとまでは言えないが、よくやってくれた」

レイゼンの肩に左手を乗せて、ビーンが続けた  
「ありがとう」

だが、レイゼンは口を引き結んだまま俯いた  
彼の頭の中では、ネガティブな計算が進んでいた

「アイアンフィストは甚大な被害を出した・・・その上モビルスーツを一機やられた」  
「・・・ああ」

「次の攻撃には、耐えられない」

歯軋りをしながら、ドムトローペンのパイロットは声を絞り出した  
圧倒的な戦力差

戦闘の只中に立つ彼だからこそ、わかること

「ツバイノワールは・・・強い」

己の拳を見つめる

負けるつもりはない

だが、勝てる保証はない

「・・・俺達には、アンタらだけが頼りだ」

ビーンが煙草に火を付けた

煙を立ち上らせたニコチンの塊を、口に持っていく

「勝つてくれ、それ以上は望まん」

口にくわえる前に、一言を付け加えた

「そして帰ってこい」

「・・・ああ」

ビーンは力強く言った

レイゼンは空返事を返した

「・・・煙草が不味いなあ」

緑色のテントにて、五人の人間が向かい合う

ウオルター・コバック

グレッックリー・ベン

レイゼン・ハウゼン

アウラ・ドレインバーグス

そして、ネクスト・ブレイク

この五人は、全員アイアンフィストにおいて戦力として数えられている人間である。敵を武力によって倒し、アイアンフィストを防衛するための存在である。

そんな彼らが一同に会している理由はたったの一つ

アイアンフィストを脅かす敵を倒すためである

「ツバイノワールの潜伏拠点の候補だが」

まず、リーダー格のウォルターが口を開いた

「このオアシス周辺に簡易キャンプを作っていると推測される」

「まあ、そこ以外はロクな物もないしな」

地図で指差された地点を見て、グレッックリーが軽口を叩いた

アイアンフィストや連邦基地ならともかく、この周辺には土と砂と石が大半を占める

土地しかない

そこで拠点を作るとするならば、必ず水のあるオアシスに停留するはずだ

「ですが大尉、ツバイノワールがオアシスを放置してギャロップ等の中の物資だけで拠点を作っている可能性もあります」

「その通りだ、オアシスが外れな可能性もある」

レイゼンの意見に、ウォルターが言う

「長い、早く進めて」

「つまり、戦力を二つに別ける」

アウラに急かされたウォルターは、バリトンボイスを響かせながら次の言葉を紡ぐ。その間に地図にペンを走らせていく

「ブレイクとベンとハウゼンはオアシスへ向かってくれ、ツバイノワールがいたら叩くんだ」

地図上に引かれた赤いライン

楕円の上にオアシスの文字が記入され、次の瞬間その楕円にバツテンが書き込まれる。「俺とアウラは留守番だ」

「ちよつと待て、アウラのザクはやられた・・・何に乗るんだ？」

「ゲルググが残ってる」

グレックリーの質問を、ウォルターが受け流した

しかしグレックリーは食い下がる

「あれ、アナハイムの奴らが動力系に簡易サイコミュ積んだせいで動かなくなっただじゃ・・・」

その言葉に、アウラの表情が暗くなった

「どうとでもなる・・・問題はない」

ウォルターがそう苦笑した

だがその笑顔がヤケクソ気味なのを、その場の誰もが感じ取った

ゲルググは使えないのでアウラは戦力外、しかし防衛のためにモビルスーツがいなければいけない

ザクIでアイアンフィストを守りきると、ウォルターは言外に宣言したのだ

ツバイノワールを倒すために、自分以外の戦力を攻撃組に回したのだ

「メインはお前たちなんだ、頼むぞ」

攻撃組の三人に視線を巡らせ、ウォルターは頷いた

そして宣言した

「作戦開始は明日午後二時！各員の奮闘を期待する」

一人残ったネクストは、テントの外から夜空を見ていた

それから、自分の手を見つめた

自分は、ジオンが嫌いだ

自分は、連邦が嫌いだ

双方ともにエゴイストだった

自分のためならか弱い一般人を踏み潰すこともいとわないう連中だった  
そんな奴らが、ネクストは大嫌いだった

だから、アイアンフィストの人達に襲いかかる連邦とジオンを、両方とも相手してき  
た

しかしそれは、それこそがネクストのエゴではないかと思った

ネクストの嫌いな二組織は沢山の支持者に恵まれた

しかしネクストの考えは、その両方を否定する孤独なものだ

連邦からもジオンからも袋叩きにあうだけ

そんな結末すらあり得た

ネクストが、正しいこととは何かを想ったとき、空が白んできた

日が開けていたのだ

作戦まで、十時間を切っていた

## レイゼン・ハウゼンの記憶

俺の名はレイゼン・ハウゼン

元ジオン公国の曹長で、今はアイアンフィストで精密機械関係のことをしている

まあ、今はモビルスーツで戦うことが多いが

宇宙世紀0064、スペースノイドの息子として生まれた

物心ついた時にはジオン・ズム・ダイクンが死んでいた

少しも驚かなかった

当時の俺にとっては、顔も名も知らぬ男が倒れたことで、シングルマザーの母が泣き崩れたことが問題だった

ジオンの中でダイクン派が追放されるうち、熱心なダイクン支持者の母は少しずつ弾圧を受けていった

やがて、母は周囲からの社会的な攻撃と、ザビ家がのさばる祖国への悲観によって、自殺をした

残された俺は、母と別れたはずの父に引き取られた

そこで俺は、俺を生んだ両親が別れた理由を知った  
父親は、俺にザビ家のために戦えと言ってきた

父の言いつけどおり、俺はジオン公国軍に入ることにした  
そうでもないかと勘当されてしまいかねないからだ  
その頃には一年戦争は既に始まっていて、テレビ中継でコロニー落としを見ることが  
できた

その戦場には、俺はいなかったが、父がやけに嬉しそうだったのを覚えている  
もしかすると、一歩間違えたら落とされたのは俺の故郷のコロニーなのかもしれない  
と思うと、少しも笑えなかった

そういえば、俺たちの仲間はどこから落とすコロニーを用意したのだろうか  
どうやって落とすコロニーを用意したのだろうか  
そう考えると、自然に軍への入隊を辞めたくなった

入隊拒否をできるはずもなく、俺は訓練を受けた

だが中途半端なものだった  
基礎を軽く覚えておしまい

どう見ても手抜きとしか思えない

いや、むしろこれが精一杯なのだろうか

そのときにはジオンは負けそうので、戦えるパイロットがおらず、どうしようもなかったのだから

学徒動員

青二才という言葉でも足りないほど未熟な訓練生たちは、ろくな訓練も受けられず戦場に放り出されることになった

だが俺は生き残った

地獄のア・バオア・クーを生き残った

必死に逃げた

逃げて逃げて逃げまくった

幸いリックドムは頑丈で、流れ弾がかすったくらいでは撃墜しなかった

そして戦闘が終わった頃に、必死に後退したフリをして他の部隊と合流した

これで、本国に帰れると思った

その一年後、俺は地球にいた

なになんだかわからない

ガキだったからか、周りの軍人共の話についていけず、気が付いたら地球へ降りて、テロの片棒を担がされようとしていた

冗談じゃない

戦争が終わったのにまだ殺し合いをするつもりか

そんなのは御免だ

あのア・バオア・クーで充分満足だ

俺は逃げることにした

そして一人の男に協力を仰いだ

同じ残党部隊に世話になっていた、元ジオン軍大尉ウォルター・コバックという男だった

ウォルター大尉と共に残党の下から出奔した俺は、少しの間彼と地球を巡った

道中でグレックリーと出会い、そして運命の地へたどり着いた

あとは、今に至ると言っておこう

だが今は、ア・バオア・クーで戦った連邦どころか、元々仲間だったはずのジオン残党とすら戦う羽目になった

後悔はない

世界から戦争は無くならない

だが、俺の目の前から戦争は無くなるかもしれない

その日まで、精々足掻いてやる

争いの日々と、戦ってやる

親の自殺とも、狂った指導者とも、血塗れの軍人とも関わらない日々が来るまで

足掻いてやる

## 双面の戦場

「見えるか？」

「ああ、あそこのデカイ湖か」

「見た感じ、敵はいなさそうだけど……」

ドム・トローペンとグフカスタムに誘導され、異形の機体が歩みを進める  
荒地地の向こうのオアシスに、ゆっくりと

「……本当だ、猫の子一匹いやしない」

異形の機体、ナガレボシの中でネクストが眉をしかめる

彼の視線の先には、ジオン残党ツバインワールがいるはずであった

この周辺の場所では、拠点となりそうな場所は他になく、先手を打って撃滅する算段  
だった

しかし敵はいなかった

「待て、リーダーに敵影が……」

ドム・トローペンのパイロット、レイゼンが危険を察知した

レイゼンが血相を変えて報告をしようとした直後

「ぐわあああ!!」

いくつもの弾丸が雪崩れ込んできた

「グッ、くっそお!」

背後からの攻撃に振り向けば、そこにはサブフライトシステムに乗ったモビルスーツ部隊

それら全てが、肩を黒く塗っている

ネクスト達の敵、ツバイノワールのトレードマークだった

敵モビルスーツは、空中からそれぞれ武器を撃ってきている

「これでも・・・」

ナガレボシはその場に膝をついた

両手も地面に起き、馬か犬かの姿勢になったとき、変化は起きた

背中の大型器官が半回転、その先の銃口が頭部側へ回る

「喰らえッ!」

光を伴ったエネルギーチャージが、瞬きほどの早さで終わる

砲が光を吐き出した

モビルスーツを飲み込んで尚余りある照射範囲のビームが、一機のザクIIを蒸発させ

た

敵はそれに対し、キャノン砲やビームライフルを撃って反撃してくる

だが、火力集中のために纏まって飛んでいた敵へ、ナガレボシが砲を向けた

まだ吐き出されていたビームに飲み込まれ、ドダイに乗っていたザクキャノンが消える

「あと一機！」

迫り来る光の奔流を避けようとしたハイザック

それが乗るサブライトシステムに、バズーカの弾が直撃した

爆発の衝撃でバランスを崩し、ハイザックはナガレボシのビームに飛び込んでしまつた

「サンキュ、グレッックリー！」

敵の腰から上が無くなったことを見届けて、ネクストは援護してくれたパイロットへ感謝を述べた

「礼には及ばないぜ」

礼を投げ掛けられた男、グフカスタムのパイロットグレッックリー・ベンが、鼻を擦りながら快活に返す

二人の様子は、長年共に戦ってきた戦友のそれだ

「増援は・・・来ないみたいだな」

レイゼンのドムが首を左右に振る

否定のジェスチャーではなく、視界を巡らせて周囲を探っているのだ

「おいおい、そこまで神経質にならなくてもいいんじゃないやねえか？張り詰めすぎるとダメになるぜ」

その様子を見て、グレックフリーが苦笑する

オアシスに背を向けて、グフカスタムがドムトローペンの方を向いた

そのとき、湖面に影が揺らめいた

「・・・グレックフリー、避けるろー」

「えっ？」

レイゼンが叫んだ

グレックフリーが呆けた様子で返した

ドムがホバーを全開にした

グフと湖を挟んだ位置に、ドムが滑り込んだ

瞬間、機関砲の弾が飛んできた

ネクストは見た

オアシスの中からぞろぞろと、まるで這い上がるように、ずんぐりとしたモビルスー

ツが現れるのを

それは、ジオンの水陸両用機だった

「さて、ウォルター・コバック」

ザクIのコクピットで、一人の男が口角を上げた

それは喜びの笑みというよりは、諦念に似た感情によるものだろう

「もう一度問う・・・私たちと協力してくれないか」

目の前のズサの他にも、両肩を黒く染めたモビルスーツがあちらこちらにいた  
ツバイノワールが、また襲来してきたのだ

## オアシスの惨戦

丸い頭のアツガイ、卵のようなフォルムのゴツグ、頭に穴のあるズゴック、両手がキヤノンになっているジュアツグ、両手にヒートロッドのおるアツグガイ、シャープな体型のズゴックE、肩と腕が長いハイゴツグ、球体型のカプール

それら水陸両用モビルスーツは、全て両肩が黒かった

肩がない機体は、腕の付け根が黒塗りにされている

それは、敵の識別だ

グレックリーは最初、敵を見付けられなかった

オアシスの水中に潜んでいたとは、よもや思わなかったからだ

「ぬぐおッ!？」

アツガイの放ったバルカンを喰らい、ドムトローペンが大きくよろめく

パイロットの悲鳴が、ノイズ混じりに響いた

「レイゼン！大丈夫か!？」

レイゼンのドムは、グレックリーのグフを庇うために前に出た

目論見は叶い、彼は仲間の代わりに弾を受けた

「ぐ、ううううう……」

「……なくそおあッ！」

唸るレイゼン

ネクストは怒号を発しながら、ナガレボシの視線を前に向けた  
両手を突き出し開く

ナガレボシの両手の平から、いくつもの光が瞬いた

「一機だけか！」

上半身を貫かれて崩れ落ちるズゴック

他の機体は散り散りに回避し、ビームガンを避けた

「しっかりとしろレイゼン！クソッ！」

バズーカを二、三度撃つグフカスタム

しかし一発も直撃しない

グレックリーは仲間に声をかける

しかし反応は返ってこない

地上を走り回りながら攻撃を避ける水陸両用機たち

唐突にジュアッグが、立ち止まった

両手を前に向ける

三本のキャノンが付いた、その腕を

砲撃三つ、左も同様

「ぐっ、ぐお、ぐうっ！」

とつさに左腕を前に突き出さなければ、シールドで防御していなければ、グフカスタムは今頃粉々だろう

飛び込んできた砲弾はグフのシールドを叩き、外れた数発が地面に穴を開けた

「グレックリー!?!うわあっ！」

ナガレボシが攻撃を止めて振り向く

その一瞬に、ズゴックEからのミサイル攻撃

ダウンした異形の機体へ、ビームによる袋叩きが飛んだ

「わああああああッ!?!」

次々と襲いかかる光線

ナガレボシは転がってそれをかわした

幾本ものビームが、その装甲をかすめた

「コイツで……」

グフがアサルトコンボの構えをとった

空になるまで撃ち尽くされたバズーカが、敵部隊に襲いかかる

いくつもの弾を恐れ、水陸両用機は散開した

その中の一機ハイゴッグへ、細いワイヤが伸びる

バズーカに注目していたハイゴッグは、あっさりとそのヒートロッドに触れた  
強烈な電圧に、内部機器が落ちる

外側から見れば、ハイゴッグが唐突に動きを止めたように見えただろう

「決まりだッ！」

ヒートソードが振り下ろされた

真つ二つとなる、ハイゴッグ

「ついでにー！」

近くにいたゴッグへと、返す刃でヒートソードを振る

だがゴッグの堅牢な装甲は、ヒートソードの一撃では破れなかった

刃が跳ね返される

「嘘だろ!？」

驚愕するグレックリー

その背中へ、先程の意趣返しのように、ヒートロッドが叩き込まれた

「があ!？」

アツグガイである

両手のヒートロッドでグフカスタムを打ち据え、高圧電流で内部機器をショートさせたのだ

膝から倒れ込むグフ

「グレックリー！」

ネクストの叫びも虚しく響いた

グフカスタムは、ヒートソードを弾いたゴツグに、頭を踏まれていた  
屈辱を与えるようにグリグリと踏みつけられる

「てめっ……」

「ね、ネクスト……増援だ！」

怒ったネクストを抑えるように、レイゼンが声を張る

当のネクストがそれに気付いた瞬間に、それはやって来た

「あれは……モビルアーマーか！」

まずオアシスから、水を割って現れる巨大な影

続いて地平線より、ホバー移動で迫り来る高速の何か

「ネクスト、伏せろー！」

言うが早いか、ドムトローペンは横へ飛んだ

スラストが火を吹き、本体の体を飛ばす

言われた通りに身を屈めたナガレボシの頭上を、何本ものビームが越えていった  
水中から現れたずんぐりとした敵が、機体の各所からビームを放ったのだ

四方八方に光線が飛ぶ

「ええい、アサルトコンボを．．．！」

ホバー移動で滑るように動きながら、ドムトローペンは武器を構えた

バズーカが、マシンガンが、シュツルムファウストが、次々と弾を吐き出す

アツグガイがマシンガンで蜂の巣になった

アツガイがバズーカで粉々になった

ジュアツグがシュツルムファウストで燃え上がった

ドムトローペンの攻撃でいくつかの水陸両用機が倒れる

だが、水中からの巨大な敵は、いくつもの実弾を受けても、まるで動じなかった

マシンガンの弾を弾き、バズーカの爆炎を無視し、シュツルムファウストも多少震えただけ

「なんて装甲だー！」

お返しとばかりに撃たれた連装ビーム砲をスラストで避けながら、レイゼンは目を見張る

「のあッ!?!」

背後から衝撃

もう一体のモビルアーマーが、ガトリングによる攻撃をしてきたのだ

本体横のアームと一体化したガトリングから無数の弾丸が吐き出され、ドムの装甲を  
抉り抜く

背部にはいくつもの穴が空いた

うつ伏せに崩れ落ちる、ドムトローペン

「レイゼン!」

駆け寄ろうとしたナガレボシに、横から何者かが激突してきた

カプールである

巨大な質量弾となった敵モビルスーツが、ただの突進にてナガレボシのバランスを崩す

無様に倒れる異形の機体

「このヤロツ!」

寝転がりながら丸い敵機を蹴り飛ばし、起き上がって全速で走る

「レイゼン！グレックリー！返事しろ！」

味方は二人ともやられ、最早自分一人

ネクストが叫びながらグフとドムへ駆け寄り、モビルスーツとモビルアーマーが接近してきていた

包囲される、トリコロールのモビルスーツモドキ

だが、敵は決してナガレボシに近付こうとはしなかった

「おい、しつかりしろ！おい、ッ！」

ナガレボシを恐れたのではない

ただ、味方のかけた罠に嵌まりたくないだけだ

ナガレボシが踏み出した一歩が、トリガーだった

「……ッ!?!」

何かのワイヤを踏んだ

その瞬間、プロペラの付いた何かが飛んだ

ナガレボシのすぐ近くを飛び回り、それは浮かんでいた

「があああああーッ!!」

そして、周囲に強烈な電気を浴びせた

派手に転ぶナガレボシ

ネクストは見た、タジン鍋のような形の、空飛ぶ円盤を

四本足の付いたそれは、ジオンのモビルアーマー、アツザムであったが、ネクストには知るよしもなかった

そのときにはもう、意識が殆どなかった

内部機器が死んで動かない、グフカスタム

穴だらけになって動かない、ドムトローペン

ならばナガレボシは、パイロットが電気で蒸し焼きにされるのだろう

アツザムリーダーは、いまだに電流を流し続けている

「くそ……」

薄れていく意識

身体中を走り抜ける痛み

それすらも認識できなくなっていく

「くそつたれ……」

伸ばした手は、どこへ向けたのか

ネクスト・ブレイクの思考は、そこで途切れた

倒れたアイアンフィストのモビルスーツを、ツバイノワールの機体群が取り囲んでい

た

# CONVICTION

幾本もの光の筋が、目の前から視界の外へ流れていく

いくつか顔の脇を通りすぎていく

水の流れか

それとも、流星か

そう思ったとき、唐突に光は全て消え去った

突然のことに驚くと、頭の上を何かを通り過ぎた

コロニーだ

円筒形の巨大な人工物

数多の人間を宇宙に住まわせることができるその構造物は、各所から煙を吹きながら飛んでいく

そこは、地球

青い星へ、一つの巨大な物体が吸い込まれるように落ちていく

止める術はない

あつ、と声を挙げる間もなく、コロニーは地球に落ちた

落ちた場所はどこだっただろうか

いったい、何人の人間が住んでいたのだろうか

いや、地球だけじゃない

あのコロニーだって、人の住み処だった

宇宙で一生懸命生きる、誰かの住み処だったのだ

何故なのだろうか

スペースノイドのコロニーが落とされ、地球に落ちたのは、なぜか

何時なのだろうか

人々が、誰かの居場所をこんなにもむごい方法で潰そうと思いついた時は、いつか

何人なのだろうか

このコロニー落として死んだのは、地球と宇宙で、何人だろうか

どうして彼らは死ななければならなかったのだろうか

コロニーが落ちた地の人々も、落とされたコロニーの人々も、一人残らず人間だ

考え、動き、心を持った人間なのだ

時に笑い、時に怒り、時に泣き、時に喜んでいたのでろう

それが

それが、こんなにもあっさり、消えてしまった

一人二人ではなく、数えきれないほどの、命が消えた

兵隊の命ではない

死すことが前提の人間の命では、ない

何の罪もない、ごく普通に暮らしていた人間の命が、だ

地球連邦とジオン公国の戦争だ

その二つの組織は、ただ普通に暮らしていた彼らから、二度と戻らない命を奪って  
いった

今もその残滓は残り続けている

今も、幸せに暮らしていた誰かが、突然その命を散らす

大きな二つの悪意によって

「そうだよな、始めから答えは出てたっけな・・・戦争に関わらずに、フツーに生きてきた人達が、どつかのクソ野郎に殺されるのが許せなかったんだ・・・ソイツら同士が殺り合って、それに罪のない人達が巻き込まれて死んでいくのが嫌だった・・・アイアン

フィストだつてそうだ、コロニーだつてそうだ、地球の街だつてそうだ・・・殺し合ひする奴らより、普通に暮らしてゐる奴の方が遥かに多い・・・でも、力がないことをいいことに、力の強い奴等の言いなりになつちまう・・・そして終いにや、幸せを失つて、死んじまう・・・そんなの、許せるかよ・・・ふざけんな、普通に暮らしてゐる人達は、何の罪もない人達は、連邦とジオンの玩具じゃねえ・・・生きているんだ！一生懸命生きているんだ！明日のために、今日のために、誰かのために！生きているんだ！それを潰すなんて、絶対に駄目だ！俺は、俺は守りたい・・・力に押し潰される、普通の人たちを、守りたい！！」

目が覚める前に、振り向いた

最初に見たあの光の線は、無数の流星は、毎日在必死に生きる人間達の命だったのではないだろうか

気が付けば、コロニー落としの前に一斉に消えたと思つた光の線は、まだポツリポツリと残っている

その光を見つめる

ナガレボシの正体はついぞ判らないままだったが、案外、あれがそうなのかもしれないな

い

これからあの光が、沢山消えるかもしれない  
ネクストは、それを止めたいと思った

だから、戦おうと、心に誓う

並大抵のことではないかもしれない

しかし、例えば、死にかけて一人の子供を助けたとしよう

ネクストはそれを、何回も続けたいと思った

だから、自分にできることをしよう

自分に、できることを

## 起動戦志

アツザム

ジオン公国軍が地球侵攻のために開発した、浮遊するモビルアーマーである  
ベルザイム

ネオジオンが地球降下の際に開発した、高速移動モビルアーマーだ  
グランゾック

これもネオジオンが水陸両用モビルスーツをリファインする形で開発した、沿岸部攻  
撃モビルアーマー

それら地上用モビルアーマーがなんと三機

これに、アツガイをはじめとする水陸両用モビルスーツが十数機  
とんでもない大部隊が、このオアシスに置かれた  
マーヴェル・クミクスの采配である

アイアンフィストの指揮官的存在であるウォルターが、マーヴェルらツバイノワールの拠点をオアシスだと考え、そこへ戦力を送り込んだ

だが実際は、彼らの予想を上回るレベルの戦力により壊滅した

水陸両用モビルスーツによるオアシスからの奇襲と、モビルアーマーの性能による挟撃

元々お荷物的存在だったモビルアーマーや水陸両用モビルスーツを投入できる絶好の機会であつたし、何より作戦は成功した

ジオンの大義に歯向かつた愚かなモビルスーツとよくわからない何かは、全て撃破した

だが

なぜ、敵は立ち上がってきたのか

アツザムリーダーと呼ばれるアツザムの武装により、あの正体不明の敵は内部から焼かれて倒されたはずだ

だが、あの敵は確かに大地を踏み、立っている  
ツバインワールの前に、鋭い眼光を向けながら

トリコロールの異形は、両手の拳を胸の前に持ってきた

その瞬間、周囲に変化が生じ始める

まず、空気が震えた

次に、踏み締めた大地に僅かな亀裂が入った

その機体の周囲の景色が、微かに歪んだ、気がした

何かが、何かがあの機体を中心に起こっている

ベルザイムがホバー移動を始めた

横滑りに動きつつ、機体先端のビームキャノンを放ちまくる

だが、黄色い光線は、直撃する寸前に掻き消えた

バリアだ

あの機体はバリアを持っている

アツザムリーダーが再び起動した

空中を飛び回る四つのプロペラから、地面に向かって放射状に稲光が走った

全てを焼く稲妻がナガレボシを襲う

だが、効いた様子はない

アツザムリーダーの電磁攻撃は虚しく徒労に終わる

残存の水陸両用モビルスーツが一斉に射撃武器を構えた

そして中のパイロットがトリガーを引こうとした、その時

ナガレボシは両拳を胸の前で突き合わせた

それがスイッチとなった

風が吹き荒れる

強烈な暴風がソニックブームを引き起こし、辺りの全てに衝撃波を叩き付ける

地面が揺れ、ナガレボシを中心とした超局地的な直下型地震が起こる

足下の地面など、ひび割れて粉々になってしまふ

周囲の景色が極彩色に歪み、ゆらゆらと輪郭を伴わない

その場所の気温も異常な数値を叩き出す

オアシスの水が、ナガレボシから発せられる高温でたちまち蒸発した

モビルスーツもモビルアーマーも、冷却機能がフル回転する

そして一番大きいのは、それらの天変地異が一拳に起きていることであつた

ナガレボシを中心として、考えうるありとあらゆる異常事態が発生しているようだつ

た

そして、最後と言わんばかりに、唐突にナガレボシの周辺が爆ぜた  
炎が燃え光が瞬き音が轟き煙が舞う

その大爆発に、いくつかの敵モビルスーツが宙を飛び、砕けて散った  
爆発が収まったとき、そこにあつたのは誰も知らぬ何かであつた

モビルスーツでも、モビルアーマーでも、人でも、ナガレボシでもない  
そこに在るのは、

## ナガレボシ・マックスモード 前編

溢れ出る光を湛えながら、数秒前までナガレボシがいた地点に全く別の何かが立っている

それまでに起きた天変地異を鑑みると、むしろあまり驚くべきことではないのかもしれない

だが、それにしてもツバイノワールのパイロットは行動が早かった様子見の目的でその変化を見届けた後、攻撃態勢に移ったのだから

ネクスト・ブレイクは目を開いた

本人には、その感覚だった

今まで眠っていた自分が、瞳を開いて目を覚ましたのだと、最初は思った

だが、彼が最初に見たものはナガレボシの内部ではなく外の風景で、彼の体感はずっと二十メートルオーバーの巨人のそれだった

ナガレボシのコクピットというべき場所は全天周囲で、足下の地面を含めた360度を見渡せるので、視点に関しては違和感はない

だが、その他の感覚には、少し異常があった

握る手のひらは、柔らかい人のそれではなくなっている

どちらかと言えば、ナガレボシのそれと似ていた

握った感触も人肌とは程遠いものだった

だが、ネクストは、その握り拳に、かかってない力を感じた

そして一つの結論に至った

ナガレボシと自分とが、一体化している

触れる風の感覚も、踏み締める大地の感覚も、握るその手の感触だって、ナガレボシが感じているであろうものだ

コクピットにいるのなら、それは自分には届かないはず

だが、ネクストは、自分と愛機との境界線が消えたことに大して頓着しなかったもともと大事なことが、目の前にある

ジオンのモビルスーツと、モビルアーマー

あれらを放っておけば、アイアンフィストや多くの人々にその火力が振るわれる普通の、力無き人間達には、アレに立ち向かう術はない

ならば、だ

「俺が、その力になる！人々が理不尽に立ち向かう術に！」

右手と左手を曲げて、ボクシングに近いファイティングポーズをとる  
ウォルターのものを見よう見まねした

「デヤアッ！」

掛け声一発

腹から気合いの声を出した、瞬間に四方八方からミサイルが飛んでくる

ズゴックか、ハイゴッグか、カプールか、もしかしたらモビルアーマーからのものもあるだろう

「トオッ！」

両足を踏みしめて、ジャンプ

先程までにナガレボシがいた地点に無数の爆発が起き、地面は派手に抉れた

そしてネクストは、一跳びにより地上千メートルにいた

そこから自由落下ついでに拳骨をチョップの形に変える  
約十数秒後、その手刀は地面に着いた

「ゼエアッ！」

ハイゴックグを通過した上で、だが

上空から落つこちてきたナガレボシのチョップにより、ジオンの水陸両用モビルスーツハイゴックグは真つ二つになり、爆発四散

至近距離からの大爆発を振り払い、ナガレボシは走る

変化する前と比べて荒々しさは消えたが、速度は以前以上にある

そして、次の相手を見定めた

ズゴックである

自分に向かってくると踏んだか、ズゴックは両手のクローの中心部に備え付けられた  
ビーム砲を撃った

二つの光が、間違いなくナガレボシを捉えた

直撃

ネクストの体に痛みが駆け巡る

だが耐えられないことは、全くない

メガ粒子を思い切り浴びた敵が速度を変えずに突き進んでくる

攻撃で仕留めたと思ったのだろう

この宇宙世紀にてビームを完全に耐えるモビルスーツなどそうそういないのでズゴックのパイロットの慢心もけして責めるほどではない

だが、ナガレボシは敵の常識を超えてきた

ずんぐりとした水陸両用機の前に立ち止まり、足を伸ばした

「デアッー！」

強烈な金属音が鳴り響く

そのキックはズゴックの装甲を貫き、内部にまで足首をめり込ませていた  
刺さる右足を引き抜く

「デアッー！」

左足による追撃の左回し蹴り

二機目の敵機が二つに分かれた

振り向くナガレボシ

飛び掛かるアツガイ

ヒートロッドを伸ばしてくるアツグガイ

キャノンを向けてくるジュアツグ

味方がやられている間に連携を組み立てていたのだろう、その動きには無駄がなかった

た

位置取りも同士討ちを避けた場所

まずアツガイが、片腕から伸ばした爪でナガレボシの腕を掴む

「シンンン!!」

ナガレボシはその爪を別の手で掴み、握り潰す

解放された左腕

それを後ろに引く

「ジャッ!」

掴む爪を引き寄せ、その勢いと共に左アツパーを叩き込む

アツガイは貫通され、倒された

アツガイのヒートロッドも、同様に引つ掴み、引つ張る

ビリビリとした刺激が手を痛め付ける

だが、それでも、ネクストは腕に力を込めた

「ダアアッ!」

まるで釣り上げられた小魚のように飛んでくるアツガイ

その巨大なカメラアイへ、ナガレボシの片腕が延びた

「リャーッ!」

敵モビルスーツは、腕にシユシユのごとくまとわり着いた

実際には、ナガレボシの腕がアツグガイを貫通し、機体がグシャグシャになっただけであったが

アツグガイを振り払う間もなく、ナガレボシの背中に砲弾が三つ突き刺さる  
衝撃が闘士を倒れさせる

否、ただ倒れるだけではない

倒れる前に、体が地に着く前に、両手の平を地面に突き立てている

そのまま回転

空中で回り、着地する

バク転のような方法で、ナガレボシが体勢を立て直した

ジュアツグはもう一度、片腕のキャノンに向けた

カプールとズゴックEもそれに便乗し、それぞれの射撃武器をナガレボシに向ける  
だが闘士は怯まず

両拳を額にあて、振り下ろしつつ頭突きのモーション

「ジエイアッ！」

突き出した頭から、目映い閃光が迸る

ナガレボシの頭部から光線が撃たれた

避ける暇もなく、ジュアッグは胴体にその光線を食らった

ビームは正面から入り、背中から通り抜ける

一秒に満たない照射時間だったが、ジュアッグの腹には真つ赤に熱せられた空洞ができた

そこから黒い煙を吹きながら、またもツバイノワールの機体は倒れた

だが戦闘は終わらなかつた

ズゴックEが頭部からミサイルを連射

両腕からビームも放ってくる

攻撃が飛んでくる方を向くナガレボシ

その両脇から、素早く移動したゴッグとカプールが襲いかかる

比較的新型で足の速いカプールが、瞬く間にナガレボシの左側へ攻撃を加えた

前面装甲を開いて、その中に収まったミサイルランチャーが起動する

放たれるミサイル

白煙を引いて迫る弾頭

だがネクストは冷静だった

まず一番早く到達するズゴックEの攻撃から捌く

飛んだ

ナガレボシは空中へ浮かんだ

いったいどんな原理を使っているかは不明であったが、ナガレボシは空を飛べる  
そして、力強く変化した今の状態ならば、音速を容易く凌駕できる

ナガレボシが空気を切り裂く

追い付ききれない風が、ソニックブームとして舞い散る

空を旋回するナガレボシ

くるつと一回転

そのまま、凄まじい勢いで急降下する

「ブヤアーツー」

右足を伸ばす

すると、爪先から二の足の半ばまでに、白い光が渦を巻いた

重力と自らの推力による相乗効果

ナガレボシは、足首を鎌にした矢となった

敵に突撃したときの軌跡が、薄く残像を引いて残り、消えた

一瞬の猶予もなく、カプールの光を纏った飛び蹴りを食らう

今ここにいるモビルスーツの中で唯一ガンダリウムを部材に使っているカプールの

並大抵の攻撃には怯みもしない

装甲は二重構造になっていて、破壊するのが非常に難しい

アツガイやハイゴッグを撃破してのけた、今のナガレボシの格闘技であつても、一撃必殺は難しいだろう

それでも、カプールの食らった飛び蹴りは、その自慢のガードを一撃のもと通した蹴りを打つ直前に足から出た閃光が、一種のビームサーベルのような役目を果たしたのか

はたまた、あの白いフラッシュの効果でナガレボシの能力が一時的にさらに上がったのか

その答えを、カプールのパイロットが知ることはない

ナガレボシはカプールの正面装甲から入り込み、背部装甲から飛び出した

キツクのポーズを崩し、着地

その時、カプールの粉々になった

味方機の破片が降りしきる中で、ズゴックEとゴッグがナガレボシと対峙した

というと、まるで正々堂々と戦うつもりのように見えるが、彼らが行つたのはナガレボシとぶつかり合うことではない

着地した瞬間を狙つての集中砲火である

転ばないように地面に足をしっかりと着けたところへの、メガ粒子砲とミサイルの嵐

それらのほとんどがナガレボシの体を叩く

「グオ……」

だが、ネクストはまだ耐えきる

痛覚を叩く痛みなど、歯を食い縛って我慢すれば終わる  
今のナガレボシなら、この攻撃で怪我をすることはない

ならなんの問題はない

俺は負けない

「ンンンン……！」

ミサイルの爆炎の中で、ナガレボシは細長い棒状の物体を取り出した

メガ粒子砲に炙られながら、その物体から光の刃を生む

「エイイヤアツ！」

そしてそのビームサーベルを、はるか遠方の敵に振るう

斬撃の軌跡が、三日月のような光の塊となった

出現と同時に飛び立ったその斬撃は、ズゴックEをあつかりと両断した

それぞれの断面を晒しながら、モビルスーツは地に伏せた

ツバイノワール水陸両用機の最後の一機となったゴッグが、死なば諸共と突貫をかける

伸ばされたアームの先端のアイアンネイル

屈むようにしてそれを避け、ナガレボシは左アッパーを繰り出した

拳の八割が埋まり、ゴツグが天へ打ち上げられる

敵が落下する前に、闘士は掌を向けた

閃光一発

掌から撃たれたビームが、ゴツグを撃ち抜いた

火花が大空を照らす

赤い炎と爆風が、周囲に散った

その光景に背中を向けて、ナガレボシは拳を構えた

モビルスーツは倒した

残るは、モビルアーマー三機

## ナガレボシ・マックスモード 後編

最初に行動したのはベルザイムであった

ホバー移動と大量のスラスタで凄まじいスピードを手に入れたベルザイム  
通常のモビルスーツでは全く敵わない地上移動速度で、敵に躍りかかる

機体両脇ガトリングアームが駆動、回転を始めた

そして吐き出される大量の弾丸

いかなる装甲も削り、砕くその攻撃が、弾のシャワーが、ナガレボシに振りかかる  
アツザムもそれに続いた

平たい水滴のような本体にある二連装メガ粒子砲の一つを、モビルスーツモドキへ向  
け、二回三回放った

水が大分消えたオアシスに浸かっているグランゾックも、味方と共に敵を撃つ

機体の側面、一列にズラリと並んだ連装メガ粒子砲を一斉に発射

ついでとばかりに頭頂部のビームキャノンも連発する

弾丸、ビーム、ビーム、ビーム

間断無く迫る攻撃の数々が、全てナガレボシへと集結した  
「ヘェアー！」

最初に飛んできたベルザイムのガトリング弾を高高度のジャンプで足下に  
アツザムのメガ粒子砲はそのまま空中で上体をひねりかわした

着地したその時、戦場を薙ぐように一列に放たれる、グランゾツクの連装メガ粒子砲

「ンンンッ！」

腰と膝を屈めて、その全てを間一髪頭上にやる

頭の上を通り過ぎる無数のビーム

それも終わり、立ち上がる

「グォアー！」

だが甘い

グランゾツクは頭頂部にあるビームキャノンを異形の機体へ叩き込んでいた  
直撃に吹っ飛ぶナガレボシ

背中側から倒れ、地面を転がりながらももう一度立ち上がろうとする

そこへベルザイムがミサイルを発射

白煙を引いて飛ぶ六つの弾頭が、ナガレボシの背中と腹を強かに打ち据える

「グァアアアア!!」

命中時の衝撃と爆発

その二つにダメージを食らう

足を止めたところへ、グランゾックもミサイルを撃った

アツザムはもう一度連装メガ粒子砲を撃ち込む

ベルザイムは高速で動き回りつつ、他二機のモビルアーマーによる集中攻撃を見守っている

次々に当たる攻撃

炎に照らされるナガレボシは、傷ひとつないものの苦しみがいている  
決着が見えていた

身体中に生まれる痛み

意識と心を容赦なく苛むダメージ

だが、体には怪我ひとつない

「ぐっ、ううう……ぐぬッ！」

頭の鈍いネクストも、現在の状況は薄々把握していた

恐らく、今のナガレボシに関して、ネクスト以上に知っている者はいない

何故ならば、彼はナガレボシと文字通り一心同体となっているのだから視覚や触覚、聴覚も共にし、痛覚すら同じくする

それも、ノータイムで

もはやネクストの体はナガレボシと化していると言っても過言ではない

極めつけは、ナガレボシの能力が、ネクストとの一体化により強化されているのだ

旧ジオンのモビルスーツならば拳や蹴りで撃破できる

エネルギーを使った《技》ならば、ガンダリウムも怖くない

飛行速度も走る速さもとてつもない程向上した

防御力においては、メガ粒子砲の直撃すら装甲を破るに至らないほど

しかも、一体化による感覚の共有で、ノータイムで動き回れる

いや、その感覚の共有こそが今、ネクストを追い詰めている

強化されたナガレボシは攻撃を受けても破壊されない

だが痛みを感じていない訳ではないようだ

敵からの攻撃による痛みは、ネクストにも当然流れ込んでくる

装甲を破らないといっても痛みは痛み

それは確実にネクストの精神にダメージを付けている

ピークに達したとき、ネクストは敗北する

「あぐ、うああっー！」

それを認識した瞬間、ダメージの感じ方が変わった  
もしも、もしもだ

このままダメージを受け続け、気を失ってしまえば、この辛い戦いから逃げられる  
「う、お」

だが、それでいいのか  
何のために力を欲したか

力に虐げられる人々のために、力を持つ者を倒すためではなかったか  
なのに、負けるのはいいのか

「お、お、お」

絶対に、負けられない

「おおおおおおおッ!!!」

腹と心の底から渾身のウオークライ

喉に裂けるような痛みが広がる

それが、外部からのダメージを和らげてくれた

「デエヤア！」

まず、打ちのめされ続けていたナガレボシは、一条のビームを弾いた纏わりつく虫を振り払うような動作で、メガ粒子を片手で受け流した黄色い閃光は爆ぜて消え、続く二発目はあつさりと避けられた

反撃が始まった

そうモビルアーマーのパイロット達が感じる前に、ナガレボシは奇怪な構えをとった  
「ジャッ！」

両手の平を合わせ、右腰に持っていく

そのポーズをとった瞬間、闘士の手に光が生まれた

「ハアアアア……」

眩い明光が両手の中で膨らんでいく

ある程度まで巨大化したそれを、ナガレボシは敵に向かって突き出し、解放する  
「デアアッ！」

巨大な弾丸、もしくは地上に生まれた流星か

スクリューしながら超速で飛ぶ光球は、空中を浮遊していたアツザムへ向けられていた  
機体底部へその攻撃を受け入れたその瞬間、アツザムは、旧ジオン公国の誇る対地攻

撃モビルアーマーは、爆砕した

脚の欠片やスクラップになったメガ粒子砲が空中より落ちてくる中、ベルザイムが高速機動を再開した

ガトリングを撃ちながら、残心のように佇むナガレボシへ突撃する  
機体両側にあるミサイルランチャーを全開放、次々と飛ばす

「グッ……フーン！」

強烈な連続攻撃に、ナガレボシは両手を交差させて防御体勢となる  
背中にグランゾックからのビーム攻撃を受ける

前からはベルザイムによる実弾の嵐

「グアッ！」

じり貧と感じたか、ミサイルが止んだところで防御を崩し走り出す  
それが隙

ホバー移動しながらベルザイムは、機体前面にあるメガ粒子砲をチャージする  
地上用の高速機とはいえモビルアーマーだ

ジェネレータ出力はビーム兵器を使用できるレベルなのである  
黄色い直線が糸を引く

高熱の光が敵に当たる、寸前ナガレボシは跳んだ

「シユアッ！」

重力に逆らい、空へ、空へ

泳ぐように自在に飛行する

やがてその速度は速くなり、風も音も置き去りにする

純白の光を纏う、ナガレボシ

背筋を張って両手を伸ばし、自らより遙かに遅いベルザイムへと、正面から飛び込んだ

「シユアアアアアアッ！」

頭から入り、尻尾から出る

超硬スチール合金が濡れ紙が如く引き裂け、地上モビルアーマーは二つに別れた

挟れた断面が、狂ったように火花を吐いている

ごろごろと転がるベルザイムの成れの果てを無視して、ナガレボシは空中でUターン

加速の勢いを散らし、大地にふわりと軟着陸した

その目の前には、グランゾック

モビルアーマーは連装メガ粒子砲も、ミサイルも、機銃も、頭頂部メガ粒子砲も使わない

ただ一つ、目の前のしぶとい敵を焼き払う武器をチョイスした

それは胴体中央の大型メガ粒子砲

極太の巨大ビームは、モビルスーツの大群すらも一撃のもと消し飛ばす

それが、たった一機へ放たれる

そのビームは最早壁だ

迫り来る閃光の壁に、闘士は真つ向に立ち向かう

「ハッ！」

両手を横へ

「ズアアアア・・・」

指先から肘に至るまで、白い光が左右の腕を覆った

光はすぐに大きくなり、辺りをこれでもかかと照らし出す

そしてナガレボシは、立てた左腕に右拳を横からくつつけた

「デエエエエアアッ！」

その行動がスイッチとなる

真つ白い光線が両手の接合点から溢れだし、目前の敵へと迸る

空気を焼き、大気を貫く、白き光線

ナガレボシの放った光線は、グランゾックの大型メガ粒子砲と正面からぶつかり合う  
ビームとビームが押し合い、一瞬の膠着が起きる

それは、すぐに終わる

白き光はメガ粒子を押し退けて、敵の元へと突き進んだ

ビームの発射口から光線を飲み込んで、モビルアーマーは沈黙

瞬きの後、全身から炎を吹いて崩れ落ちた

全身のメガ粒子砲から、関節から、一つ目からも炎を出して、最後に後半身が弾けた

くるくると舞う破片を最後に、モビルアーマー部隊は倒された

最後の敵の最期を見届ける

腕を降ろしたナガレボシが、拳を握って空を見上げた

姿を変えて丁度三分、ナガレボシは敵に勝利を納めた

そして、変化した姿は消えて、元の異形の外見へと戻った

「ネクスト、聞こえる!? ネクストっ!」

通信機から少女の声

「ツバインワールが、アイアンフィストに!」

勝利の余韻はまだ遠い

異形の機体は、両手を胸の前に置いた

平行に揃えた両拳を、思いきり突き合わせる

ナガレボシは、  
凄まじい閃光に包まれた

## アウラ・ドレインバーグスの記憶

私はアウラ・ドレインバーグス

宇宙世紀0074生まれ、コロニーの生まれ

私の生まれ故郷はもうない

コロニー落としに使われた、サイド2のアイランド・イフィツシュなのだから

私が物心ついた頃、両親とサイド3へ引越した

両親は、ジオンに賛同し、ジオン本国のあるサイド3へ移住した

その一月後、アイランド・イフィツシュに毒ガスが注ぎ込まれ、それはコロニー落としに使われた

引越した前の土地が地球に落ちた所を見て私の親が何を思ったかは知らない

その時私は、幼かったから

私自身、生まれ故郷が消えたことにはなんの感慨もない

その時私は、幼かったから

月日が流れ、ジオンの地球降下作戦が始まる

どんな手を使ったかは知らないけれど、その時両親はジオン軍の高官の地位を持っていた

平時なら税金泥棒のようになっていたその職だが、今回はそれが仇となる

両親は、地球降下作戦に指揮官補佐のようなポジションで参加することになってしま

う  
理由はわからない

両親が仕事熱心だったためか、他の官僚に押し付けられたか、同僚に引きずられたか、もしくは役立たずの始末の代わりか

理由などわからない

だが、両親は地球降下の際に私を連れていったのは確かだ

地球は私の育ち故郷となった

知つてのとおり、ジオンは地球占領に失敗、拠点オデッサを失い連邦に追い回される

連邦の攻撃で親と離れ離れになった私は、ジオン残党の一部隊に拾われた彼女は私を、子供として扱わなかった

モビルスーツの操縦法を教え込まれ、兵士として幾つかのテロに参加させられた生きるために、私はそれに従った

だがそのテロリストとしての生活は長く続かなかった

私のいた残党の仲間の一人が、連邦に内通していた

大部隊の待ち伏せにあい仲間は全滅

裏切り者も逃げ出す前に粛清された

乗っていた機体はボロボロ

止せばいいのに、何故か私はモビルスーツに乗ったまま逃げ出した

生身のまま逃げていれば、スムーズに逃走できただろうに

ほうほうの体で逃げ続けた私は、砂漠の一集落と出会う

乗っていたモビルスーツが限界を迎え、転倒

這いずり出した私を、現地の女性が心配して駆け寄ってきた

私はその人を、ピストルで撃ってしまった

撃たれた本人の弁明により、私はその集落に拾われた

しかし、ここもまた消えるのだと私は思っていた

私のいた場所は、みんな消えてしまったから

その時の私は、動かないモビルスーツの隣で座り込むことが常だった  
そうするしかなかった

現地の女性を撃った私はノケモノにされて当たり前だった

うざったい男がいつも声をかけてくるが相手にはしなかった

彼は元ジオン軍人だったからだ

私を戦乱に巻き込んだ奴らを、私は許せない

集落に拾われて少ししたある日

私は例のうざったい男に引きずられて妙な場所に連れてこられた  
ベッドの上に、苦しむ妊婦

その妊婦は私が撃った彼女だった

手伝えと言われた私は、訳もわからぬままがむしやらに働いた

取り上げて抱えた赤ん坊

わんわんと泣くその子を見て、私は目が覚めた  
私のいた場所は全部消えた

だから、私は、守らなければならない

私を守れば、私の居場所は消えない

だから、私はこの場所のために戦う

そのことを、彼女の子を抱いたまま彼女に伝えた  
すると彼女はこう言った

じゃあ、私の赤ちゃんも守ってくれるのね

ありがとう、と

私は戦う

私の居場所を守るため

私は戦う

それが、私にできる全てなのだから

## 再び

アイアンフィストの外れ、町からほんの少し離れた地点

アイアンフィストの防衛戦力、モビルスーツの格納庫にてそれはやってきた

ギヤロップ

旧ジオン公国が保有していた、陸上戦艦

物資輸送のための大型コンテナユニット・カーゴを後部に取り付けたその艦は、ホーククラフトで迫り来る

その進路上に立つ、一機のモビルスーツ

橙色に染められた、汚れたザクIだ

カーゴが開く

次々と現れる、一つ目のモビルスーツ

あるものはマシンガン、あるものはヒートサーベル、あるものはミサイル、そしてあるものはビームライフルを装備する

それらは、外見的特徴は目前のザクIと似通う部分もあった

だが現れたモビルスーツ部隊が醸し出す雰囲気は、味方に対するそれではない  
カーゴから降り立ったモビルスーツは、カーゴの前に回り込んだ

新旧バラバラのそれらは一列に並び、武器を構える

最後に、優雅な動きで、空から一機降りてきた

ネオジオンの重攻撃モビルスーツ、ズサである

両肩を黒く塗ったその機体は、オープンチャンネルでもって通信を開く

「さて、ウォルター・コバック」

ジオン残党、ツバイノワール

その首魁マーヴェルの、妖艶な声音

「もう一度問う、我々に協力してくれないか」

「ノーだ」

両肩の黒いズサヘザクマシンガンが火を吹いた

ウォルターのザクがツバイノワールとの戦闘に向かう中、アイアンフィストの外れに  
位置するモビルスーツガレージに少女はいた

アイアンフィストのパイロットの一人、アウラ・ドレインバーグスである

「来たな……こんな状況なのに！」

地上レーダーでギャロップの接近を察知したウォルターは、モビルスーツを失なったアウラに残るよう言った

ネクストらがオアシスから戻るまでの時間稼ぎのためだ

ツバイノワールの本隊がアイアンフィストにやってくるなら、ネクスト達の向かったオアシスには大した戦力はないはず

すぐにトンボ返りしてくれるはずだと

それまで自分が時間稼ぎをすると

「そんなことできるわけないじゃない、たった一機でっ！」

ザクに乗るウォルターに投げ掛けた言葉を、一人しかいないガレージで叫ぶ

無線機を引っ掴んで他の仲間に通話を試みる

聞こえるのは、通信が繋がらない証拠のノイズ

「どうして誰も出ないのよー！」

ナガレボシに乗るネクストも、グフカスタムに乗るグレックフリーも、ドムトローペンに乗るレイゼンも、三人とも通話に応じない

頭をかきむしりながら無線機を放り投げる

このままではウォルターが死ぬ

アウラは上を向いた

ザクと比べると大柄な、夕焼け色に塗られたモビルスーツ

アイアンフィストが今まで使わなかった一機

「やるか……っ！」

そして、アウラはゲルググのコクピットに駆け出した

胴体を一閃され、鉄の巨人が二つに別れる

斬られたモビルスーツは、他の三、四機の仲間と同じように地面に横たわる

「次……っ！」

敵の反り血を振り払うようにヒートホークを回す

次に攻撃を仕掛けてきたのはハイザックであった

連邦がザクⅡの優秀な基本設計を使って産み出したモビルスーツ

それが巡りめぐってジオン残党の手にあるとは、皮肉としか言いようがない

ビームライフルの閃光をギリギリで屈んでかわし、クラッカーを投げ付ける

ハイザックどころか他のモビルスーツも散って爆発から逃れるが、爆発発生点の至近

距離にいたハイザックは破片を食らいよろめいた

そこへ一瞬で間合いを詰め、大型ヒートホークを叩き込む

頭から溶断されたハイザックの頭

赤熱化した刃は、コクピットに及んでいた

急いで武器を引き抜き、モビルスーツの死骸を蹴つ飛ばす

ウォルターの旧ザクを狙って放たれたバズーカが、ハイザックの亡骸に遮られた

爆発

「次……イッ！」

ウォルターは実際、かなり奮闘していた

ツバイノワールはウォルターの立ち回りで苦戦していた

包围して一斉射撃すれば簡単だが、一機を囲むと距離が短くなり、誤射が怖い

かといって一対一を繰り返して消耗を狙うには、ウォルターの腕は高い

この戦いのなかでウォルターは、何故ツバイノワールが戦力を小出しにしているか気付いた

彼らにとって正念場はここではない

こんなちっぽけな連中に力を使いたくない

連邦を倒すための戦力を、ここで使いきりたくない

「甘しい！」

ウォルターはそう断じる

アイアンフィストを守るために修羅となったウォルターが  
また一機を倒す

すると、モビルスーツ隊の後ろの方から大きな影が現れる

「ええい、らちがあかん！退けい！」

オーブンチャネルを開いたそのモビルスーツは、ザクIとは比べ物にならないほど  
力強い印象を与えてくる

噂には聞いていた、アクシズが開発した化け物機体

「アイアンフィストとやらのパイロット、この儂ガレス・バドラーズと……」

両肩はやはり黒く、暗い緑に染められた全身の上に、ザクIIとよく似た頭部がある

一体、ウォルターの旧ザクの何倍の性能を持つのだろう

「ザクIIIが相手になってやろう!!」

巨体を揺らして、現代最強クラスのモビルスーツが迫る

ウォルターは口角を吊り上げた

やるしかない、と

## ウォルター、猛る

閃光、ビームライフル

銃口から放たれた光線は空気を焼いた  
しかし目標の旧ザクにはかすりもせず  
もう一度ビームライフル

右へ傾いたからその先を狙って撃った  
が、旧ザクはそれを左にかわした  
右へ行くと見せかけて左へ

小癩なフェイントである

「ええい、煩わしい！」

ザクⅢのパイロットが吐き捨てる

目の前の敵は旧式に乗った老いぼれのはず

それなのに、何故こうも手こずるか

また右手に握る銃を振り、相手へ向けて引き金を引く

瞬きより早く出現した光の矢は、やはりザクIには当たらない

敵は脚部ミサイルランチャーを外して、機体を軽くした

それもあり、ザクIIIは命中打を与えられない

相手の予測不可能なスラスターの動かし方には、流石のビームライフルも当たらぬのだ

他の仲間には手出し無用と言っておいた

この戦いは一対一の真剣勝負

有象無象がいては、むしろ邪魔になるだけだ

「これならどうだー！」

スカートアーマーを上げ、ビームキャノンを起動する

目標はオレンジ色のザクI

ついでに頭部のメガ粒子砲もドライブ

三つの砲口が煌めき、光が迸る

爆発

「おお、やったかー！」

感嘆の声を挙げた、直後装甲に衝撃が走る

ザクマシンガンである

相手はザククラッカーかなにかで爆発を起こし、目眩ましを試みたのだ

しかし旧ザクの攻撃ではガンダリウム製の装甲は破られない

「こやつめ、叩き潰してくれ!!」

まったく進まない戦況に苛立ち、ザクⅢはスカートアーマーからビームサーベルを引き抜いた

細長い光の刃が、柄から伸びる

仕掛けるのだ

爆発を注視する敵モバイルスーツの頭を飛び越えて、背中側に回ってマシンガンをつル  
オート射撃

撃った弾の殆どは敵に直撃した

しかし効いた様子はない

「チツ、いい部材使ってやがる」

自分の武器にすら耐えられない自機の装甲を省みて、ウォルターは舌打ちした

相手は新型、こちらは旧式中の旧式

一体どれ程の性能差があるだろうか

考えても仕方ない

「いつもどおり、やるだけやってみるだけさ」

口角を吊り上げる

そう、いつも通りだ

どんな敵であろうと、いつもと変わらぬ

ザクIはヒートホークを取り出した

通常より二回りは大きいモビルスーツ用の斧だ

「さて・・・行くか」

これが、相手が取り囲んできて袋叩きなら勝ち目は恐らくなかった

だが、相手は慢心でもしたのか、単独での一騎討ちを要求してきた

ならやりようはある

敵モビルスーツはビームサーベルを引き抜き、こちらへ振り回してくる

斜め上からの降り下ろしを機体を屈めさせて避ける

ザクIIIのパイロットは、恐らく目を丸くしただろう

接近しての攻撃さえも避けられたのだから

だが、一年戦争のモビルスーツは、アクシズ製重モビルスーツとは違う

機体が軽いので動き方によっては近接攻撃もかわせる

そう何度もできる芸当でもないが

「ツアアッ！」

掛け声一つ

大振り一回

装甲に一文字

これは直撃ではない

ヒートホークは、慌てて後ずさりしたザクⅢによつてカス当たりとなつた

電熱により真つ赤になつたヒートホークなら、ガンダリウムもなんとか溶断できる

ウォルターの勝ち目はここにある

しかし当たらなければどうということはない

ザクⅢの頭部が光つた

「うおっ」

情けない声をあげ逃げる

ザクⅢには頭部にメガ粒子砲が搭載されている

出力は雀の涙ほどだが、ウォルターの旧ザクには充分に致命傷になるだろう

スラストターを噴射

地上を高速で動く

右へ、左へ

敵のビームライフルが機体に当たらず通りすぎる

相手は性能に頼りきった戦い方をしている

なら勝てる

ウォルターは仕掛けた

「アサルトコンボだ……！」

右手のマシニングを撃つ

闇雲に撃つても、仮に相手が動かなくても、ザクマシンガンではガンダリウムを壊せない

ではビームライフルに当てるとどうなるか

「ビングォツ!!」

百二十ミリの口径の武器が、精密化された繊細な機械であるビームライフルを壊せないはずがない

上手い具合に当たったマシンガンの弾は、ザクⅢのビームライフルを砕いた

使えなくなつた武器を投げ捨て、敵はビームサーベルを引き抜いた

その武器変更の瞬間の間を見逃すウォルターではない

先程パージしたミサイルランチャーが、遠隔操作で発射される

ザクⅢは、そのスラスタ出力で旧ザクにあつという間に接近していたやほり速い

流星に性能差が出る速度勝負ではまったく勝ち目がない

このままでは、敵のビームサーベルに切断される

だがミサイルは発射された

直撃、爆発

ザクⅢにミサイルが当たる

ロツクオンもされていけない、カンで適当に発射した遠隔操作のミサイルランチャーだが、上手くいった

ザクⅢはダメージにより動きを止め、そして今はビームサーベルを当てるべく接近していた

重りになったザクマシンガンを放り捨て、ヒートホークを振り、頭部をはねる

空中へ躍るザクⅢの生首は、とても旧ザクと同じザクシリーズとは思えない

消えた頭部の代わりに、残りのザククッカー三個全部を載せてやる

全速離脱

スラスタを吹かしてザクⅢから離れた

大爆発

碎ける装甲、跳ね飛ぶ燃えカス

モビルスーツの頭部の下は、大概コクピットの入っている胸部だ

いかに強力な装甲に包まれようと、装甲を剥がされて爆弾をコクピットの真上に置けば、どうにもならない

「モビルスーツの性能差は戦力の決定的差じゃない、らしいな」

倒れたザクⅢの残骸は、ピクリとも動かない

「こんな形で証明できるとは・・・な」

この一騎討ち、ウォルターの勝利である

「勝利の余韻はどうだ？ウォルター・コバック」

オーブンチャンネルから、妖艶な女の声

敵の声だ

「マーヴェルか」

「覚悟はいいな」

恐らく、背後にはマーヴェル・クミクスの乗るズサがいる

性能差はもちろんのこと、パイロット能力も備わった相手だ

マシンガンを投げ捨て、ミサイルランチャーを外して、クラッカーを使いきった今、ウォルターの旧ザクが勝てる相手ではない

「・・・俺の負けか」

ウォルターは呟く

彼の視線の先には、アイアンフィストがある

彼が命を懸けて守ろうとした町がある

ネクスト達は間に合ってくれようか、あそこに住む仲間達は大丈夫だろうか

息子は強く生きていけるだろうか

心配は、尽きない

光線が伸びる

オレンジに染められた旧ザクの胸部が、ビームライフルによって貫通した

## 新たなる目醒め

薄暗いコクピットの中で、一人の少女がモニターを弄っていた。様々な機器を点けたり消したりしてみる。

しかし、コクピットの機械は一切反応を見せない。拳を叩き付ける。

「どうして動かないのよっ!」

苛立ちを声にしたところで、モビルスーツはウンともスンとも言わない。機体の状態は完璧だ。

今まで使われていないとはいえ、アウラの乗るゲルググのコンディションはちつとも問題ない。

今まで整備してきたからわかる。

「アナハイムの奴らが、サイコミュなんか入れるから……!」

このゲルググは、ウォルターがアナハイムに譲渡したものだ。

経緯はわからないが、色々と手を加えられた後アイアンフィストへ送り付けられてき

た

天下のモバイルスーツ業者が改造したのであればきつと高性能なものに生まれ変わったのだろう

パイロット一同はそう考えた

が、真実は違った

動かなかったのだ

起動すらしなかった

これは一体どういうことかというところ、ゲルググにはサイコミュが搭載されたのだという

今だ不明な点が多数あるサイコミュを、無理矢理搭載されたのだと

それで機能不全を起こし、機体が動かなくなつた

処分に困り保管するにも金がかかったため、元の持ち主のウォルターが押し付けられる形で受け取つたのだ

アナハイムですらどうにもならなかつた機体が、辺境のカス組織に動かせるはずもなく、ゲルググは倉庫で置物と化していた

だが、この状況では、藁にもすがりたくなる

「動け！動けえ！」

起動ボタンを何回も押す

レバーを引く

何も反応はない

「動いてよ……」

アウラの目元が赤くなる

気が強そうな目が、弱々しく歪んだ

「みんなが……しんじやう……」

迫り来る敵

動かないモビルスーツ

必死に戦う仲間たち

何もできない自分

どうしようもできない状況

「……あつ……?」

そんなとき、アウラの脳髄に電流のようなものが走った

「……ウォルター?」

声が聞こえる

誰のものだろう

ウォルター

自分を拾ってくれた人の、苦悶の声

「助けに、いかなきゃ・・・」

アタマの中が澄み渡る

意識が一瞬のうち、地球を越え、宇宙へ飛んだ

体が軽くなった

それを自覚した瞬間、コクピットモニターが灯りを点しだす

ゲルググのモノアイが光った

「う、動いた！」

先程までの不調ぶりが嘘のように、ゲルググが起動した

その動きはスムーズで、モビルスーツというより人間のようであった

一挙手一投足が滑らかだった

まるで、自分の体のように

「こちらアウラー！ネクスト、聞こえる？」

機体の覚醒と共に稼働した通信機に吠える

周波数は合わせていた

「ネクスト、聞こえる!?ネクストっ！ツバイノワールが、アイアンフィストに！」

返ってきた声

相手にしつかりと通じていた

「了解した、すぐ行く！」

「私もモビルスーツで出る！」

「は？お前の機体は……」

壊れているはずだ、と続くであろうネクスト・ブレイクの言葉を切つて、通信機を止める

ここからは、本格的なバトルが始まるからだ

おしゃべりの暇はない

「ウォルター……」

ネクストの前に通信をかけた相手の名前を呼ぶ

こちらは、返事はなかった

「今、行く！」

ゲルググは、全身からスラスターを覗かせた

そこから生まれる燐光

吐き出された推進力に、機体が空を飛ぶ

方角はわかっていた

頭で、  
感じた

## アウラ、猛る

膝をつき、胸から地にふせるザク

胸部に空いた穴からは、高温による湯気が立っていた

撃ち抜かれて倒れる様は、銃殺刑を受けたかのようにであった

「あつけないものだな、旧世代の英雄もここまでか」

土埃にまみれるモビルスーツの死骸に、マーヴェルは一瞥をくれた

乗っていた男は、生きてはいまい

胸部へビームが直撃したのだ

メガ粒子に包み焼きにされあの世へ旅立っただろう

「だが貴様の強さが衰えていかなかったのは事実……まったく、恐ろしい男であった」

両肩を黒く塗られたネオジオンのモビルスーツ・ズサは、落ち着いた戦場を見回した

今倒した敵パイロットによって撃破されたツバイノワールの機体は決して少なくな

い

中には虎の子の高性能重モビルスーツもあった

たった一人のパイロット、たった一機のザクにこうもやられたのである

戦力差を考えれば、こちらにとって最悪な結果だ

だが、戦いは終わった

かなり暴れたザクは墜ちた

アイアンフィストの残りの戦力はオアシスの伏兵によって足止めされていることだ  
ろう

もう、目障りな大集落に戦力はない

「さあ、もう障害は皆無である・・・踏み潰し、焼き払え」

マーヴェルによる攻撃命令

目標は、アイアンフィスト

幾つものモビルスーツが、武器を手に進む

だが、三步進んだところで全軍の動きが止まった

「マーヴェル大佐、リーダーにモビルスーツの反応が」

「アイアンフィストはしぶといな・・・陣形を固める、迎撃してから町を破壊しよう」

マーヴェルのズサが足を止め、モノアイを左右に動かす

カメラアイが揺らめく

「前方、来ます！」

別のモビルスーツに乗るジオン残党兵が叫んだ

その瞬間、彼はビームに吞まれて消えた

胸部にぽつかりと大穴を空けて、一機のザクが倒れた

「ロックオンの外から攻撃だ」と

もう一度レーダーを見る

敵の位置はけして近くない

レーダーの範囲ぎりぎりの場所だ

「アレイン、ヘクスがやられたー！」

「ぐわあああつー！」

「遠すぎてロックオンができない．．．」

「敵は正面なんだろう!？」

そのレーダーの表示から、味方の識別がどんどん消えていく

この距離から、ロックオン無しで、動いているモビルスーツに当ててくる

「何者なんだ!？」

マーヴェルが毒づいたそのとき、正面からビームが伸びてきた

ズサのブースターを全力にして、転がるように横へ避ける

すぐそばを通り抜ける光線

マーヴェルは応射をしなかった

手がある場でこちらを狙撃しているとは考えられなかったからだ

「あの動きの激しい、小娘か！」

オアシスにいる部下の報告の情報と、さっき倒したザクIのパイロット

情報を整理すれば、残ったアイアンフィストのパイロットは、マーヴェルが前回撃破

したザクIIのパイロットであるはずだ

名前は知らないが、あのパイロットはやたらと動いていた

全力の速度で突き進んでいく

味方の殆どは付いてこれていない

ビームを避けるのに精一杯で前進できないのだ

「あれか！」

マーヴェルは目を見開いた

敵をついに見つけた

オレンジ色に染められた、ゲルググの姿を

「ジオンの絞りカス！……ここで終わりだっ！」

「おのれええええええ！」

オープンチャンネルによる罵倒を無視して、マーヴェルはコクピットのボタンを押し

た  
ズサの全身の装甲が開き、中から無数の弾頭がせり出した  
ミサイルである

大量のミサイルが全で一気に発射される

噴煙により一瞬ズサの姿が消えた

「来た……！」

た  
ゲルググのスカートアーマーとレッグアーマーが開くと、スラスターの噴射口が現れ

吹き出す炎がモビルスーツに推進力を与え、宙に飛ばす

アウラはミサイルの弾幕へ自ら飛び込んでいった

最初に現れたミサイルの先端を、体勢を捻ってかわす

二発目や三発目もどうように

時折横へ大きく逸れて進路を変える

一瞬前までゲルググがあつた場所へミサイルが殺到し、墜落した

まだ全部いなしきれていない

「当たるか……！」

ミサイルが後ろへ来る方向へ動いた

背中を襲わんとすぐ近くに迫る弾頭に対し、アウラは上へと素早く飛んだ  
そして大きく速度を落とした

進路変更をできなかったミサイルは、先程とはあべこべに背中へ標的を迎える  
肩のガトリングが回転をして、弾丸を吐いた

いくつもの弾は寸分たがわず、ミサイルの群れを蜂の巣に変えた

ミサイルはダメージに耐えきれず爆散した

破片も爆炎も無視して、アウラは進路をマールヴェルへ向けた

「うあああああーっ！」

フルスロットル

ゲルググのブースターの炎が、一際大きく輝いた

ミサイルを撃ち尽くし、その全てを叩き落とされたズサには、両手のビームライフル  
しか武器はなかった

あんなに恐ろしかった火力が、消えた

「そこだー！」

二度引き金を引く

ビームは正確にアウラのゲルググへと向かった

だが、ゲルググは最初からどう避ければ良いかを知っていたかのように攻撃を回避した

さらに幾度もライフルを撃つが、ゲルググは苦もなく避ける

ズサに迫るゲルググ

迎撃は当たらず

「行けえっ!」

アウラのゲルググが左手を突き出した

腕上部にはグレネードランチャーが内蔵されていた

放たれる二発が、ズサの装甲を捉える

「ぐ、おとおお!」

飛んできたグレネード

ビームライフルへ一発が突き刺さり、二発目は機体の肘を砕いた

爆発

ズサの片腕は無くなっていた

ゲルググの攻撃は素早く、正確だった

たった二発の実弾武器に狼狽していると、ゲルググはマーヴェルの頭上を一瞬で通り

抜けた

「く、おのれ」

残った右腕で、背を見せたゲルググにビームライフルを放つ

だがゲルググは後ろ向きにビームライフルを避けた

「バカな！」

視界外の攻撃を避けられたマールヴェルは、慌ててブースターを起動した

ブースターで地上を進みながら、ゲルググがビームサーベルを手取る

ガトリングで敵モビルスーツを攻撃

弾を避ける相手に、サーベルの切っ先を叩き付ける

腰を切断された哀れなグフを捨て置き、アウラは別の目標に躍りかかる

目前には敵部隊

弾丸の雨を潜るように抜ける

マシンガンを撃ってくるドワツジへ右手の銃を向けた

トリガーオン

ビームマシンガンの弾が敵を抉り抜く

ビームの輝きが辺りを焼いた

「でりやああつ」

すれ違い様、近くにいた奴にビームサーベルで切りつけた

煌めきがドムトローペンを通り抜けた

切り裂かれた一機が転がる

ツバイノワールが橙色のゲルググを追う

ロツクオンが終わり次第、次々と一斉射が飛んだ

ビーム、マシンガン、バズーカ、ミサイル、ロケット、キャノン

ありとあらゆるモビルスーツ用武器が放たれた

アウラはそれら全てを回避した

弾道を予測してミサイルをかわし、弾幕の穴を避けてマシンガンをかわし、直感に任

せてビームをかわした

そして反撃にビームマシンガンを撃つ

無数に吐き出された光線が両肩を黒く塗ったモビルスーツを破壊する

空からビームが飛んできた

ネオジオンの可変モビルスーツ、ガ・ゾウムのものだ

変形したガ・ゾウムは空中を飛行できる

普通ならそんな相手には手も足も出ないだろう

「……行くわよー！」

だが、アウラは迷いなくスラストスターを動かした

推力に身を任せ、ゲルググが、飛ぶ

可変モビルスーツのビームライフルがゲルググに向けて放たれた  
メガ粒子は肩に当たるか当たらないかの位置を通り抜ける

オレンジのゲルググはビームサーベルの刃を出した

「おりゃあああつー！」

ツバイノワールのガ・ゾウムとアウラのゲルググ

二つの影が空中で交差した

片方が上下に分かれた

腰にビームサーベルを戻して、ゲルググは着地した

遅れて、ガ・ゾウムの残骸が地に落ちる

可変モビルスーツの成れの果てが爆散した

炎を背に立つアウラのゲルググ

その姿に、ツバイノワールのパイロット達は浮き足だった

「追い付いたぞ……！」

だが、アウラの独壇場へ緑色のモビルスーツが滑り込む

ズサだ

マーヴェル・クミクスの機体がビームライフルを向けてアウラに突貫する  
「この数相手にそう長く持つまい、終わりだ小娘!」

ライフルの銃口にメガ粒子が集まり、マーヴェルが引き金を引こうとした  
その瞬間であつた

「・・・ネクスト?」

「デュワアツ!」

一個の流れ星が、ツバイノワールの陣形の真ん中に落ちてきたのは

地面に落ちたそれは、地面から大小の破片を撒き散らさせた

衝撃波もしくは破片を大量に食らつたモビルスーツが、一機また一機と粉々になる  
土煙を振り払い現れたのは、威風堂々とした闘士であつた

「な、な、な、なん、何だ!?! あれは?!」

いつも余裕綽々な態度をとっていたマーヴェルが、この時ばかりはとてつもなく慌て  
ふためいた

震える操縦レバー

そんな様子を、彼女の部下達は気付かない

新手に視線を奪われていたからだ

「て、撤退！」

ウオルター・コバックによる大打撃、とんでもないエース級のゲルググ、そして今現れた新手の敵

歴戦の指揮官であるマーヴェルが逃げの一手を選択するのに、そう時間はかからなかった

あるいは、強敵に恐れをなしたか

「全機、撤退だ！」

マーヴェルの命令を聞き、ツバイノワールのモビルスーツは我先にと踵を返して逃げ去っていった

いくつものブースター光を見送るように睨み付けていたゲルググの横で、新たに現れた闘士はその姿を変えた

光に包まれたあとに出たシルエットは、ナガレボシであった

通信機から声が聞こえた

「遅い、でももうすぐ来ると思った」

「どうしてそれがわかったんだ、アウラ？」

少女の一言に、ナガレボシのパイロットが問う  
「カンだよ」

アウラは何気なくそう答えた

そして微笑んだ

二人は勝利した

アイアンフィストを、守り抜いたのだ

その喜びを、少しだけ噛み締めた

## 傷だらけの戦士たち

転がる残骸

落ちていく夕焼け

胸に穴を開けたザクイーの前で、ゲルググがひざまずいていた  
手のひらにはパイロットを乗せ、ザクの胸に近寄る

「ウォルター！」

文字通り掌の上、パイロットの少女が叫んだ

アウラは確信していた

何かの直感のままに、ウォルターは生きていると感じていた

近付くにつれて、胸の風穴が広く見えてくる

夕焼けに照らされたせいで、オレンジの装甲がよく見えない

「ウォルター、生きてるんでしょ！返事して！」

ゲルググの掌の上から旧ザクの上に飛び乗ったアウラは、ウォルターの名を必死に呼びながら見回した

ザクの胸部に穿たれた穴は広く、その部分だけ装甲はドロドロだった  
もしや、自分のこの直感に正しいものではないか

本当は、ウォルター・コバックは死んでしまったのでは

「ウォルター……まさか……」

その可能性が頭のなかを支配して、アウラは顔面を青ざめさせた

その直後だった

「おい、そこにいるのはアウラか」

妙に落ち着いた、呻き混じりのバリトンボイス

素早く首をそちらに向ける

「助けてくれ、出るのに少し手こずってる」

「ウォルターっ!？」

生きていた

ウォルターは、死んでなどいなかったのだ

急いで旧ザクのコクピットへ向かうアウラ

だがその時、再びウォルターの声がした

「そつちじゃない、下だ」

アウラはその場から、倒れた旧ザクの下を覗いた

そこには、旧ザクの下でうつ伏せになっている、古軍服姿の男がいた

目を開けると、コクピットではなく、露天の下だった

その隣に、見慣れた顔が二つ

「グレックリー、大丈夫？」

リーア・カストレルが、自分の頭に冷えたタオルを置いた  
病人のような扱いだ

夕焼けに染まる大空を見上げて、パイロットはため息をついた  
しくじった上に仲間の足を引っ張っている

情けない、と自分をなじった

「腕が足りねえなあ俺」

グレックリーが悔しさ半分の調子に言った

彼の愛機は、ヒートロッドによる電流攻撃でダウンしていた  
彼自身、協力的な電流の余波を受け先程まで意識がなかった

「そんなことはない、お前はよく頑張ったさ」

リーアの反対側で、相棒のレイゼンが言う

「奴等の戦力が大きかっただけだ」

レイゼンの頭には包帯が巻かれている

確かこの男のドムトローペンは穴を開けられてやられたはずだ

被弾の衝撃でどこかにつつけたのだろう

「そうだ、ツバイノワールは・・・？」

慌てて起き上がる

自分が生きているなら戦闘は終結したのは明らかなのだが、目を覚ましてすぐのグレックリーにはその思考にたどり着くことはできなかった

痛む頭を振り、視界を巡らす

心配したリーアを無視して見回すと、モビルスーツっぽい何かを見付けた

リング状の関節、色鮮やかなトリコロール、あれはナガレボシだ

アイアンフィストの貴重な戦力のひとつ、宇宙から降ってきた謎の兵器は、グレックリーのグフカスタムを担いでいる

輸送をしているつもりなのだ

「ネクストが、やったのか」

アイアンフィストへ運ばれていく愛機を見送り、グレックリーは一人ごちた

彼もレイゼンも動けないなら、残るナガレボシがあ  
の状況をなんとかしたのだ  
恐らく、敵戦力をなんとかした

なにも言わずにレイゼンを見ると、彼も頷いた

「ナガレボシに、新しい能力が発現したそうだ」

「そうか・・・」

その新しい能力には興味を示さず、グレックリーは再び空を見た

「頑張らなきゃなあ」

夕焼けに染まる大空を見上げる

「こら、怪我人は大人しくする」

リーアの一言に従って、グレックリーはもう一度寝転んだ

「なんとかなかったか・・・」

土と皺だらけの上着をはたき、ウォルターは呟いた

その右腕は、肘と違う方向に曲がっている

「ウォルター・・・」

「ビームが当たる前にコクピットから飛び降りた……マールヴェルがわざわざ通信して来てくれて、飛び降りるタイミングと隙ができた」

左腕で奇妙に曲がった右腕をさする

心配そうに見るアウラに、彼は笑いかけた

「問題ない、落っこちたときに手足は折れたが命はある……暫くモビルスーツには乗れんが安いもんさ、息子が一人立ちするまで死ぬつもりはない」

肩をすくめて冗談混じりにそう言うウォルター

しかし痛みに脂汗を垂れ流す姿は、いまいち様にならない

それよりも、と前置きをして、ウォルターは懐から何かを取り出した

「ツバイノワールは上手いこと追い払えたようだな、よくやった……が、ここからが正念場だ」

「正念場……戦いが終わったわけではないってことね」

「そういうことだ、敵と決着を着けなくちゃならない……そのための準備を進めよう」  
無事な左腕を使つて、ジオン軍服のポケットをまさぐる

そこから取り出したのは、艶と光沢のある高級そうな通信機器であつた

裏側にはAEの文字

ウォルターはそれで電話をしようとし、手を止めた

先にアウラに色々と伝えることを優先した

「いいかよく聞け、そろそろ連邦も力を戻す」

いつになく真剣な面持ちで言うウォルター

眉間には皺が寄っている

「ツバイノワールもこのまま黙っていることはない」

だが、だんだんと面構えが穏やかになり、最終的に笑みを浮かべた

なかなか悪そうな笑みを

「奴等はまた必ず、アイアンフィストを襲撃するだろう・・・俺たちが打って出ることはできない」

「つまり待ち伏せ？それとも籠城戦？」

「どちらでもあり、どちらでもない」

片手で器用に通信機を操作しながら、ウォルターはアウラに話し続ける

時折折った手足が痛むが、構っていられない

時間は有限だ

怪我人の手も借りなければ

「さあ準備だ」

## 編 戦いとは始まる前から終わっている アイアンフィスト

ウォルターがとある通信機でとあるところに電話をしたところ、その十時間後にある一団が現れた

ミデア級大型輸送機の編隊である

一年戦争時とそれ以前に、大規模な物資輸送に活躍した連邦開発の代物だ

だが、今アイアンフィストに現れたミデアには、例外なくAEのマークを機体にペイントしている

アナハイムエレクトロニクス

地球圏全域にて、様々な組織の兵器を開発提供してきた大企業である

そしてまた、ウォルターが持っていた通信機にも、AEのマークが刻印されていた住民が見守るなか、ミデアはゆつくりと着地する

滑走路もなしに着陸できるのは、一重にパイロットの腕が良いのだろう

天下のアナハイムは、輸送機パイロットすら一流である

「やあ、くろろうさん」

車椅子の上で、元ジオン軍人が折れてない方の腕を挙げた

車椅子を押すのはビーンズだ

彼はミデアが出てきた辺りから苦笑いを隠せないでいた

今や宇宙世紀を牛耳る企業が、こんな辺鄙な場所に御足労するとは

「お待たせしましたミスターコバック、ご注文の品はこちらですね」

眼鏡をかけた男がウォルターに挨拶を返した

手に何かのリストと計算機を持っていた

「これとこれと、あとこれだな・・・メカニックは？」

「あまり多くはありませんが、連れてきております」

「こちらにも何人か整備士はいるから、彼らと一緒に修理を頼む」

「わかりました、やっておきます」

アナハイム社員が了解を返すと、ウォルターは幾度か頷いた

そして、そのまま質問をした

「ところで、今まで作ったスクラップはいくらで買う？」

折れた片腕で一方を指し示すと、山と積まれたモビルスーツの残骸などがあつた

旧式のものとはいえ、アナハイムにモビルスーツの修理を頼むのは並大抵の金では無

理だ

ウォルターらアイアンフィストは、今まで倒したモバイルスーツをジャンクにして売り込むつもりだ

かなりの量のジャンクを眺めて、アナハイム社員は電卓を見せてきた

だがウォルターは渋い顔をした

「安いな・・・俺達はあるたらにとつてあれらがどんな価値を持つか知ってるぞ・・・ティターンズやアクシズとかの、もう手に入らないスクラップだつてある」

ぼったくることができず、アナハイム社員は渋々電卓を打ち直した

ウォルターは自分の車椅子を押してくれる男の方へ目をやった

ビーンはひきつった顔を戻せない

「なんだ、あれは」

「客と店だ」

なんとなしに答えたウォルターに呆れつつ、ビーンは話を続ける

「だがいくらモバイルスーツをどうこうしたつて、今度の作戦はどうするんだ？」

そう、アイアンフィストがモバイルスーツを直すのには、敵を退けるためという理由がある

機体だけではどうにかなる問題ではない

「もう準備はできている」

「なに？」

「連邦もジオンも、どうにかすればなんとかなるもんさ」

　　獯猛な笑いを浮かべて、ウォルターはビーンの方を向いた

## 戦いとは始まる前から終わっている 連邦編

地球連邦軍、辺境の一基地

怒鳴り散らす男の声が聞こえる

「何故だ！」

クラウン隊の隊長、ヴィランの声だ

見開いた目と食い縛った歯が、怒りを見事に表現している

そんな怒れる御曹子のストレスの元は、一つのモビルスーツであった

「何故使えないんだ！あれが来てから大分経ったんだぞ！」

ヴィランが指差す先、一機のモビルスーツが静かにガレージに鎮座していた

全体的にマツシヴで、重量感のある外見

力強さとスタイリッシュユさが両立されたデザインも特徴的だが、何よりもその機体のシンボルとして際立っているのは頭だった

二本の角と、デュアルアイ

宇宙世紀でそのシンボルを持つ機体は、特別な意味を持つ

「何故なんだ!」

「ですからアレは試作品のテスト機の段階でして、それに大気圏内での運用にも手がかりがあまりありません」

「時間がかかりすぎだろう! アイアンフィスト攻略作戦はもうすぐなんだぞ!」

しつかりとした理由を言う整備員に、ヴィランはなおも怒鳴り付ける

目の前の相手の機嫌を損ねると様々な意味で首を飛ばされかねないので、喚かれる側はたまったものではない

しかし、確かにかなり時間がかかっているのは事実

こここの連邦部隊は、アイアンフィストを攻撃してから大分時間を空けた

アイアンフィストとの戦いで消耗した戦力を補充するためだ

その中でヴィランは、父親のコネでもあるものを買い付けた

当初彼は次のアイアンフィストへの攻撃までにはそれを使えると考えていたが、その機体は往々にして癖が強く、メカニックマンは頭を抱えていた

「アナハイムの人間がもうすぐ到着します、彼らにも協力してもらい、できるだけヴィラン様の機体をなんとかいたします」

終いには他力本願する始末だ

「なんでもいいから急げ！」

一通り怒鳴り終えたヴィランは、踵を返してクラウン隊の所へ戻っていった

冷や汗を拭う整備員

その近くへ一人の男が近寄っていた

「いやはや、ご苦労様です」

「あ、どうも！アナハイムの方で？」

「あ、はいーそうですー本日雇われましたアナハイムか出向のメカニックマンの一人ですーよろしくお願いいたしますー」

そう名乗った男は、二本角に目をやった

「ウチが売ったとはいえ、なかなか整備しづらそうな機体ですねえ」

なんとなく呟いたその一言に、同情してくれると思つた連邦の整備士は涙ぐんで返す  
「そうなんですよ……次の日曜日までに使えるようにしないと、またあのボンボンに怒られるんです……」

「へえ、次の日曜日ですか」

「そうなんです、納入してから大分経ちますけどあんなの無理ですって……」

肩を落としたその姿は、とても天下の連邦軍人とは思えない

「じゃあ先にあの機体の調整に戻りますから、お願いしますね」

相槌を嬉しそうに聞き入ると、整備員は例の機体に向かって走っていった

その場には、アナハイムのメカニックマンしかいない

するとメカニックマンは、おもむろに通信機のようなものを取りだし、耳に当てた

「次の日曜日だそうです、ウォルターさん」

それだけ言うと、メカニックマンはすぐに通信機のようなものをしまった

「さーて、仕事仕事」

軽く延びをして関節をほぐした後、メカニックマンは道具片手にデュアルアイへ近

寄った

## 戦いとは始まる前から終わっている ジオン残党編

### 空中空母ガウ艦内

この巨大航空機は、かつてジオンが公国として地球と戦争をしたときに運用されたモビルスーツ運用を前提としているジオンが開発しただけあって、大量のモビルスーツを輸送できる能力を与えられていた

そして量産され、ジオンの地球攻略作戦に大いに活躍する

結局ジオン公国の地球攻略作戦は失敗に終わったが、後の時代にはガルダ級やミデア改などのモビルスーツを輸送できる航空機が多数開発されている

ガウの特性はそれほど優れていたことになる

大気圏内で素早く物を運ぶには、空輸が一番であるからだ

そんなガウの、ジオン残党が保有する一機に、ツバインワールがあった

モビルスーツを使ってテロを行う狂暴な組織

彼らは心から、地球連邦打倒がジオンの、ひいてはスペースノイド全体を救う術であると信じている

その心意気が、既に危険であると気付かずに

「マーヴェル大佐……」

ガウのブリッジ

ジオン残党の通信兵が首魁を呼んだ

「アナハイムの社員から通信が……」

「繋げろ」

組んだ両手に顎を乗せ、マーヴェルは不敵に笑う

アナハイムとツバイノワールは協力関係にある

ツバイノワールは、アナハイムからテロ行為に

使えそうな情報を買っている

アナハイムとしても、自社の商品を積極的に買ってくれる可能性のある、つまり毎日

戦争している組織との繋がりは大事故だ

双方に利益のある関係、それが両者に交わされていた

「どうもどうもーツバイノワールの皆さん、本日もいい情報を仕入れてきました」

「話せ」

「実は、私共アイアンフィストの秘密を知ってしまいました」

画面の向こうの男はペコペコしながら言う

その表情は全く変わらず、営業スマイルを継続している

「アイアンフィストの用心棒、それなりの痛手を負っています」

「痛手か、もう一押しだな」

「次の月曜日まで、助けがなければ戦闘もままならないでしょう……もし襲撃をかけるならモバイルスーツをお売りしましょうか？我々、すぐ近くまで来ているので」

営業スマイルの男がそう言うのを聞いて、マーヴェルは軽く微笑んだ

あくまでも優雅に

「いや、まだいらぬ」

「そうですか、かしこまりました……またのご利用をお待ちしておりますー」

通信が切れる

その瞬間、マーヴェルは組んでいた両手を解した

頭の中で、残りの戦力を数える

マーヴェルは、アイアンフィストに驚嘆していた

まさかあそこまでやってまだやられていないとは

そのしぶとさは、流石ウォルター・コバックが惚れ込んだだけはある

しかし奴はもういない

コクピットにビームライフルを受けていられる人間はいない

「よし」

沈黙考を終え、マーヴェル・クミクスは立ち上がった

隣にいる副官に尋ねる

「傷付いたツバイノワール全体の回復には、どれ程かかる？」

「次の土曜までには」

そしてマーヴェルは頷いた

「では、次の日曜日、アイアンファイトに三度目の攻撃をかける！全戦力を以て、アイアンファイトを確実に仕止める！」

## 最後の戦い

アイアンフィスト作戦本部として使われているテントは、夜風に吹かれてバタバタと音を立てていた

ここで寝たのがいつだったか、ネクストはもう覚えていない  
思えば、ここに来てから本当に色んな事が起きた

時間の感覚が麻痺するくらいに

「作戦は簡単だ」

ウォルターは車イスに座りながら話始めた

「目下のアイアンフィストの脅威、連邦とツバイノワールを、なんとか八時間後にアイアンフィストに集めることに成功した」

「アイアンフィストに全部!？」

「すっごくいいことになるよな、それ．．．」

一同に同様が広がる

連邦とジオン残党を一ヶ所へ

アイアンフィストで、二つの大部隊がぶつかることになるのだ  
彼らの故郷はただでは済むまい

「が、アイアンフィストは消えない」

だがその心配を感じ取ったように、ウォルターは説明を続けた

「人、物、ついでに建物や重要な施設なんかをアナハイムのミデアでもってゼーくんぶ運び出す・・・殴り込みに来た連邦がここに来たときには、夜逃げ後の何も無いポイントしか残らない」

「そして偶然巡り会わされた二勢力を、ドンパチしてるうちに私達が纏めて潰せばいいのね」

「その通りだ」

補足するように纏めたアウラの一言に、ウォルターは称賛を送った

腕が折れているので拍手は送れないが

「アイアンフィストの移転場所は選定中だ、追って伝える・・・だが、この作戦は少ない戦力で大乱戦に飛び込まなくてはいけないことを意味する」

ウォルターの声のトーンが下がった

特徴的なバリトンボイスが、その場に深刻な空気を作る

同時に、その声音には仲間達を気遣う思いが滲んでいた

「連邦の大部隊とジオン残党の大部隊が来て、戦争を起こす……そんな中に飛び込めば並大抵の腕では生き残れない」

悔しそうに歯を食い縛りながら、ウォルターは言葉を絞り出した

「情けないが、こんな状態では俺は戦えない……お前達に全てを託す」

アイアンフィストのパイロット達の顔を一人ずつ見つめて、ウォルターは最後に言った

「必ず勝つて、必ず帰ってこい！」

「了解！」

「了解しました」

まず、付き合いの長い部下二人が即答した

「ええ、任せて」

次に、アウラが自身たつぷりに言う

そして、ネクストは目を閉じた

その場の視線がネクストに集まる

「俺には、正義だとか悪だとか、何が正しいとか悪いとかはわからない……だけど……」

男は顔をゆっくりと開く

そこに宿る決意の光は、どんなものよりも輝いていた

「こんなに暖く生きてきた人達を苦しめてきたアイツらを許せない、だから……」  
「ぜってーアイツら、ぶっ倒してやる……だろ？」

ネクストの言葉を遮るように、ウォルターがおどけて言う

それは、ネクストがアイアンフィストのために戦うと心から決意したときに、ウォルターに伝えた言葉だった

「……ああ！ぜってー勝つ！」

笑顔で頷き、ネクストは親指を立てた

「はいはいはい！それじゃ聞いてな」

ビーンが両手を振って場の雰囲気を変えた

ネクストに集中していた視線が、今度はビーンに向く

「アイアンフィストのほぼ全部は、さっき言った通り戦闘の被害が届かない所へ移される！君らはこの場所で潜み、ノコノコやって来た連邦とツバイノワールがゴチャゴチャやってるところを漁夫の利する！いいね？」

乱暴な口調で素早く纏めたビーン

流れるようにペラペラと捲し立てられて、歴戦のパイロット達は呆けるばかりだった  
だがビーンは、落ち着いた口調で更に言った

「君らもアイアンフィストの大切な一員だ、死ぬなよ、帰ってこいよ」

そして全員が見詰めるなかで、こう締めた

「それじゃ、解散！」

もうすぐ夜が明ける

暗闇は登り始めた日の光に切り裂かれ、少しずつ明るい空が現れてくる

その光に逆らうように飛び去る数機の航空機

ミデアは西へ飛んでいた

残ったのはもぬけの空となつたいくつかの建物だけ

その向こうに、アイアンフィスト最後の戦力は待機している

グレッツクリーが固唾を飲み、レイゼンが深呼吸をし、アウラは飴を口に放り、ネクス

トは静かに目を瞑る

グフカスタムは新装備のガトリングシールドを持ち上げ、ドムトローペンはシュツル

ムファウストを掴み、ゲルググはビームマシンガンを起動させ、ナガレボシはひたすらに佇む

これから始まる最後の戦いに、全力の備えをしている

ここに集まるのは、地球連邦軍辺境基地の最終攻撃部隊と、ジオン残党ツバイノワールの残存全戦力である

双方とも、アイアンフィストを目の敵にしていた

だが、連邦とジオン残党が、一つの場所で偶然鉢合わせたらやることは一つだ  
戦争である

ネクスト達は互いに潰し合う連邦とジオン残党の戦場へ飛び込み、双方を攻撃して共倒れを狙う

これで全てが終わる

アイアンフィストを脅かしていた全ての相手を、一挙に畳むチャンス  
アイアンフィスト最大の戦いが始まるうとしていた

やがて空が完全に朝の色へと変わりかけてきた

そのとき、モビルスーツのリーダーは、数え切れない光点を示す

「来た……！」

誰かが言った

そして、こう続けた  
「始まった！」

## グレックリー・ベンの記憶

おっす俺はグレックリー！

グレックリー・ベンだ

昔、ジオンで少尉やってたんだ

今はアイアンフィストが俺の帰る場所さ

生まれはサイド3、宇宙世紀0065年だ

ダイクン派とかザビ派とかよくわかんねーし、親父もお袋も死んでたから食うものにも困ってた

んで、待遇がいい公国軍に入って、訓練受けて、軍人生活つてとこだ

頭はともかく体は丈夫だったもんで、訓練自体はそこまで辛くなかったかな  
筆記は不味かったけどな

歩兵として地球降下作戦に駆り出された俺は、まず地球の環境にひっくり返った  
いくら似せてたって、人工物のコロニーと地球じゃ、自然とかに色々と相違点が出て  
くる

特にキツかったのは重力のかかりかただ

詳しいことはよくわかんねえが、地球とコロニーとじゃ重力の作り方すら違う  
体が丈夫って言っても重力に敵うハズもなく、俺はシャトルから降りてすぐヘトヘト  
になった

ま、他の連中も似たようなもんだったから、俺だけ超ひどかったわけじゃない

さて肝心の戦争だったが、負けた

途中までいい感じだったけど、足を止めた隙に返り討ちにあつてボツコボコにされた  
いや、戦略的に詳しいことはよくわかんねえけど  
でもジオンが喧嘩売った相手に負けたのは事実だ

宇宙へ逃げ出すチャンスも見当たらない俺は、地球に居残って残党活動をすることに  
した

このときにグフに乗せてもらったけど、やっぱり全然違うね

歩兵のまんまやってたらいつモビルスーツに踏み潰されるかわかったもんじゃねえもん

真つ正面から踏み潰されないように戦えるから、歩兵より断然モビルスーツのがいいと俺は思うね

まーでも残党って言ったって水天の涙にもデラースフリートにも接触できなかったから、本当平和だったね

両親ともにいねえから宇宙に未練もないし、あの頃の仲間と比べてジオンに対する熱はなかった

地球の生活にも大分慣れたし、残党やつてる理由も特にない

なので、突如現れたオッサンと澄ました顔の男の誘いに乗ったのも、そう重い決断じゃない

残党なんかやってたら連邦にぶち殺されるじゃん、なんて考えたら一も二もなく飛び出してしまったよ

まー、トレーラーでグフカスタムまで持ち出し地待ったのは不味いと思ったけどなでもかなり思い入れあるもん

だつて俺だけのモビルスーツだぜ

そんなこんなでボロボロの街をウォルター大尉やレイゼン達と一緒に建て直して、色々と生活基盤を整えていって、そうするとアイアンフィストに愛着が湧いてきたわけやっぱあれかな、苦労して育てた花ほど思い入れが強いってのと同じなのかな

それじゃあ絶対守らねえといけないな

俺の帰る場所はここだからな

連邦だろうがジオンだろうがどんと来やがれ

纏めて返り討ちにしてやるぜ

俺と、俺の仲間と、グフカスタムがな！

ところでさ、アウラってかわいいいな

## 三つ巴

ジムⅢのコクピットでケイロンは叫んだ

「何もねえじゃねえか！」

ジムの頭部メインカメラが取り入れた映像を写し出すメインモニターには、目標の街などどこにもなかった

座標はここで合っているのだ

だが何度瞬きしても、荒野が寒々と続く光景が見えるのみである

「どういうことだ？場所はここだよな」

「街どころか、人っ子一人いないぞ……」

「一体これは、この状況はなんだ！」

味方に動揺が広がる

作戦に大きな支障が出たことが余程堪えたのだろうか

「いや、待て……レーダーに感あり」

ケイロン機の隣に、巨大な鶏冠状のアンテナを備えたモバイルスーツが近付いてきた

乗っているのはブルース大尉だ

機体は、テイターンズのモビルスーツ・バーザムを改修したバージムである  
頭部に付いた大きなブレードアンテナは、外見に変わらず高い索敵範囲を持つ

「リーダーに、何が写っていたんですか？大尉？」

彼の部下の一人が聞くと、ブルースは彫りの深い顔に皺を作る

バージムのコクピットに同乗者がいれば、リーダーにあるのがあまり快くない情報であることが、その表情から読み取れるだろう

ブルースは一言を、絞り出すように、言った

「所属不明のモビルスーツの反応、多数」

ガルスJを駆るジオン残党のパイロットは、遙か向こうに見えるゴーグルカメラの大群に震えた

彼の記憶では、これから自分達はジオニストによる聖戦を否定する愚かな元ジオン兵達を急襲するはずである

しかし、彼の目には、連邦の主力モビルスーツ・ジムが列を組んで居並ぶ姿しか見え

ない

「連邦だ！連邦のモビルスーツだ！」

「アイツら、俺達をやるつもりか！」

「殺してやる！殺してやる！殺してやる！」

「地球の犬共に裁きの鉄槌をおおお」

「待て、落ち着け！落ち着いて対処を！」

ツバイノワールが大きくざわめいた

連邦という永遠の宿敵の前に、正常な判断力が失われていた

そのとき、ゴーグルカメラの群れの一体から、眩い閃光が生まれた

ピンク色のメガ粒子が、僚機のドムを貫いた

「あああああつアースノイドめえっ！」

反撃のロケットランチャー、避けられる

彼らの仲間たちも、それぞれの武器を撃ち始めた

走り寄る連邦モビルスーツ

否、ツバイノワールのモビルスーツも、連邦の方へ全力疾走していた

両者の距離は直ちに縮んでいく

その合間にも、飛び道具が相互に絶えず飛び交っている

ザクキャノンの砲がジムキャノンIIの胸部を抉り、ジムIIIのミサイルがグフを粉々にし、ドムのジャイアントバズはジムコマンドを転倒させ、バージムは一射でガルスJを仕留めた

回避しても次の攻撃が来る

そんな激戦

やがて、壮絶な射撃戦は凄絶な格闘戦へと移り変わっていく

グフヘジムIIIが斬り付け、ジムIIにドライセンがビームガトリングを直撃させ、ハイザックをバージムが一刀両断して、ジム改がデザートゲルググにマシンガンで蜂の巣へと変えられる

スラスターを使い空中へ跳んだジムは、戦闘空域を飛行していたガ・ゾウム二機がナツクルバスターで撃ち貫いた

両腕を失つて尚も戦おうとしたドムキャノンに、ジムスナイパーIIの小隊が一斉射撃を叩き込む

無数のモビルスーツ同士が各々の武器を敵へ叩き込み、残骸は爆発し、あちこちへ鉄の巨人の一部が飛んでいった

弾や光線はあちこちを飛んで回って、格闘武器がしっちゃんかめっちゃんかに振り回される

アイアンフィストがあつた場所で、連邦の田舎部隊とジオン残党が大乱戦を引き起こしていた

そこへ紛れ込む、三機のシルエット

ドムトローペンがシュツルムファウストとマシンガンを放つた

シュツルムファウストはデザートザクの上半身を消し飛ばし、マシンガンの弾がジムⅢのシールドに防がれる

「うお、何だーアイアンフィストのモビルスーツか!？」

乱戦の中へ潜り込んだため、ケイロンは今の敵機を補足できなかった

その場所とは別地点に、上空へ弾幕を張ったグフがいた

マシンガンとガトリング、さらに腕部の機関砲も使った弾丸の壁

ガ・ゾウムの一機がそれをかわしきれず、大量の弾を受けた

飛行の機動がおかしくなった敵へ、グフカスタムがヒートロッドを振った

高圧電流により内部機器の死んだ可変モビルスーツは、落下したところを待ち構えたヒートソードでバラバラにされて撃破された

オレンジ色のゲルググが飛ぶ

斬りかかって来たジムⅡの腰にガトリングを叩き込んでダウンさせる

ブースターで進みながら、鏢迫り合いをしていた二機のモビルスーツに纏めてビームマシンガンを浴びせる

土煙を突つ切り、振り返り様ビームキャノンを撃つ

上手い具合にハイザックが射線に飛び込んで、メガ粒子に焼かれて消えた

そのハイザックが標的として飛び掛かろうとしたジム改へグレネードを送り込んで、ゲルググは振り返った

サーベルを振り上げるジム改

敵がそこに来るのがわかっていたように、ゲルググは予め手に取っていたビームサーベルを展開した

打ち付け合う刃と刃

だが、鏢迫り合いは起こらない

サーベルによる防御と同時に、橙のモビルスーツはジムの腹を蹴つ飛ばして後退りさせた

そして、手に持っているビームマシンガンで胸部周りを撃った

動かなくなった敵を放っておき、ゲルググはスラスターで跳んだ

着地と同時に、ガトリングを食らってダウンした先程のジムⅡにビームサーベルを突

き刺した

止めを確認すると、ゲルググはブースターで地上を滑走していった  
アイアンフィストのメンバーは、順調に敵の数を減らしている

「野鼠が、考えたな……」

緑に塗り上げたズサの中で、マーヴェル・クミクスがそう呟いた

ガウから出撃する一機の大型航空機

戦域上空に現れた敵空中空母へ、連邦のモバイルスーツは怖じ気付くことなく対空攻撃を加えた

そして、バージムのビームライフルによるダメージが、ガウの主翼をもいだ

地へ落ちていく公国陸軍の誇りを省みることもなく、マーヴェルのズサブースターが機首を地上へ向けた

ミサイル、ミサイル、ミサイル

ズサブースターに装填されたありったけの誘導ミサイルが、地上へ降り注ぐ

ズサブースターをパージして、本体のミサイルも発射するマーヴェル

地上へ降り注ぐという表現もおこがましいような、そんな数のミサイルが大地を焼いた

起爆する度に、荒れ地に炎の花が咲く

敵味方関係なく、避けられなかったパイロットはその花の中に燃えカスとして消えた  
「連邦だろうとアイアンフィストだろうと、我々ジオンの理想を止めることなど、できは  
しないのだ」

両方を黒く染めたズサ

ビームライフルを振り上げ、突撃する

爆発で巻き上げられた破片が周囲に散る

その中心へ、マーヴェルが突撃する

## 宿命の対決

連邦のモビルスーツ・ジムⅢがビームライフルを撃った  
閃光とともに加熱されたメガ粒子が伸びる

ビームは敵機のマラサイの背部ランドセルに直撃する

ダメージに耐えきれず、旧ティターンズのモビルスーツは爆発四散した

「一機撃墜ー！」

ケイロンは高揚と恐怖とを心に込めて吠えた

「これで五機！次はどいつだ！」

ジムの頭部が首を振る

攻撃できそうな相手を探しているのだ

視界には乱戦の様相が広まっているが、無闇に敵に攻撃を加えると味方に弾が当たり

かねない

ハイエナのようなやり口になるが、こちらの味方を撃破して手が空いた相手から順繰りに倒すしかない

その時、ケイロンの視界の左側から何かが飛び込んできた  
グフカスタム

旧ジオン公国の量産モビルスーツ

真つ赤に熱せられたヒートソードを、振り上げていた

グレックリーはブースターを最大出力にして叫ぶ

「食らえええええええ！」

「ぬああああつ!?!」

渾身の一太刀はシールドによって阻まれた

だがタダでは転ばないのがアイアンフィスト流だ

グフカスタムが、シールドで防いでいない脇腹へガトリングシールドを撃った

「あぐぐつ!チイ！」

ジムⅢは慌てて飛び上がる

グフカスタムと距離をとると、ケイロンは相手をじっくり睨んだ

「動きが鋭い、アイアンフィストの機体だな・・・?」

ジムⅢが離れると、グレックリーは相手の構えを見た

「そこそこやる奴か、いけるか・・・?」

一定の間合いを保ちつつ、両者はじりじりと動き始める

砂埃と煤をはらんだ風が、二機の間を通り抜けた

ビームライフルの弾が、レイゼンの乗るドムトローパーの脇を高速で通り過ぎた。ただのジグザグ軌道で動いては補足されると、レイゼンはブースターを吹かす

「不味いのに当たったな……」

心中で舌打ちをひとつ

敵はバージムだった

旧テイターンズのモビルスーツ・バーザムをジムに似た外見に改装した連邦の機体

カラーリングは青と白

「ぬ、おっー」

ビームがまた飛んでくる

肩に焼け跡が付き、腕に溶けた装甲が垂れてきた

もう何メートルかずれたら、胸部へ直撃するコースである

一発ごとに精神力が大きく削られる

モビルスーツの性能だけではここまで正確な射撃は難しい

凄まじいパイロットが乗っているのがわかった

「あの機体色、あの腕前……前に戦ったことがあるぞ」

レイゼンは回避の最中、余裕のない思考の余りを使って敵機の様子を観察していた。相手が以前戦ったことがないか思い出していた。

そして、アイアンフィストに来た中で最強のパイロットの名前に行き着いた。

「……ブルース・ウエイン大尉か！」

その答えがもしも正解だとしたら、現状で考えうる中で最も厳しい。

なにせそのパイロットは、レイゼン、ウォルター、グレッツクリーの三人が束になってかかって尚互角以上に戦うスーパーエースなのだから。

しかもあの時は旧式のジムクウエルで現れたのが、今回はバージムである。

最新とは言わずともかなりの高性能だ。

性能差が広がり、さらにこちらはたったの一機。

さてどうするかと思案していた、その時だった。

「ジオニズムに反逆する愚か者共がっ！」

まずゲルググキャノンがビームキャノンを向けてきた。

「連邦の兵か、覚悟してもらおうぞ！」

続いてハイザックがビームサーベルを握って突貫してくる。

「二機まとめて俺のスコアになれえ！」

最後にドライセンがトライブレードを取り出しながら現れた

二機の追いかけてこへ唐突に乱入してきた三機のモビルスーツ

ツバインワールの機体だろう、両肩が黒く染められている

この混乱した状況でも一塊で動いていた

バージムはその三機へ首を向ける

そして、ブースターを起動した

ゲルググキャノンが放ったビームキャノンを空中へ上昇することで回避

縦に回避、ビームライフルを撃ち込む

斬りかかってきたハイザックとビームサーベルで鏝迫り合いし、蹴りで体勢を崩させ

る

そしてコクピットへ一突き

背中へ飛んできたトライブレードは、振り返って一閃切り捨てる

ドライセンはビームガトリングを撃つ

バージムは空中で体を捻り、すれすれのところで光弾の群れをかわす

次の刹那にはドライセンの片腕がビームガトリングごと溶断した

ビームライフルが命中したのだ

そして飛び込むような急接近を経て、バージムはドライセンの傍を通り過ぎた

ドライゼンの上半身は地面に転がった

三機のモビルスーツはそれぞれ大爆散する

様々な破片が辺りに飛び散る

僅かな時間のことであった

少なくとも三機が倒れた時点では、全力で離れようとしたレイゼンの視界にはいまだ

あのバージムがいる

爆炎と煙を掻き切るように飛び出してくるモビルスーツが一機

疑うまでもなくブルース・ウェインの乗るバージムだった

その一機はまたビームライフルをこちらに向けてくる

「一体どうしろって言うんだ？」

レイゼンは誰にともなく言った

バージムのライフルから閃光が迸った

緑の影があつた

それはミサイルの嵐を全身から放った

それに混ざる光線

橙の影が攻撃を左右に避ける

地上を滑るように動き、直線に飛んでくる攻撃をかわしていく

ビームマシンガンが向けられた

ズサは銃口の先から逃げた

右へ行くと見せかけ左へ行き、回転しながら前進する

フェイントをいくつも混ぜた舞うような動き

ゲルググは迷わずビームマシンガンのトリガーを押した

そして武器を、滅茶苦茶に振り回した

乱射である

避け方など関係ない、弾幕を形成する

ズサは直ぐ様回避行動をやめ、空中へ逃れた

ビームキャノンを撃たれ、肩のミサイルランチャーを吹き飛ばされながら

撃ち尽くしたお陰で誘爆はしなかったが、ミサイルが入っていたら小さくないダメー

ジを受けていただろう

緑のズサは空中で静止した

スラストアーから噴射される炎を調節し、相手を見下す位置で止まる

「誰だ？」

ズサのパイロットは問う

「アイアンフィストのパイロットか？」

オープンチャンネルであるので、相手には伝わっているはずだ

対するゲルググのパイロットは答えた

「だったらどうしたの？」

「ジオンの理想を捨てたのか」

「テロリストの福音なんかに興味はないわ」

ズサは銃剣の付いたビームライフルを夕焼け色のゲルググへ向けた

モノアイが銃口を睨む

「正しき未来のために、スペースノイドのために戦いが必要なのだ……地球連邦を退け、

宇宙に住む者達がさらに発展する土壌を作らねばならないのだ」

マーヴェルの声が徐々に低くなっていく

「ジオンに正義はある！」

幽鬼を彷彿とさせる恐ろしいげな意思を、アウラは受け取った

「正義？そんなもの、ありはしない」

そして拒絶した

「着飾ったエゴと共に沈め、勘違い野郎」

「小娘が、消えるのは貴様の方だ！」

相対する両機が、互いに向かつて突撃した

緑の影と橙の影が交差する

あまりの速度に、そのモビルスーツ達の機動は線のように見えた

グリーンとオレンジのラインが複雑に絡み合う

ビームと実弾が、互いから発射され、互いから逸れた

## 意地の戦い

荒野の乱戦の最中に、二機のモビルスーツが相対していた

片方は連邦のモビルスーツ、ジムⅢ

もう片方はとある集落の防衛戦力、グフカスタム

両者は絶えずお互いを倒そうと攻撃を仕掛けている

閃光が一つ目に映る

フットペダルを思い切り踏み込み、ブースターで避けた

メガ粒子がグフカスタムの肩の大きな突起を炙り、溶かす

機体本体に影響はなく、戦闘能力は低下していない

お返しとばかりにマシンガンのトリガーを引く

一秒間に何発もの砲弾が吐き出され、それらは全て走り回るジムⅢへと突っ込んでいった

だがジムⅢは先程のグフカスタムと同じように、ブースターを使って急加速し弾のこごとくを回避する

マシンガンの弾に誘導能力などあるはずもなく、シールドに阻まれた三、四発を除いて明後日の方向へ消えた

ジムⅢはブースターを吹かしたまま姿勢を変える

空中へと昇った連邦のモビルスーツ

そのまま眼下の一つ目にビームライフルを向けた

慌てたようにグフカスタムは飛び退いた

一瞬前に立っていた場所へビームライフルの弾が着弾する

砂塵が巻き上げられ、空気が焼かれ、地に穴があく

「クソツタレ！」

グフカスタムのコクピットでパイロットのグレックリーは毒づいた

「これじゃ罅があかねえぞー！」

その一言の後に降り注ぐバルカンをシールドで受け止め、グフは立ち止まった

ジムⅢはグフカスタムなど簡単に屠ることができる性能を持つ

だが、グレックリーが派手に逃げ回るおかげで、二機の間には決着は未だつかない

互いに攻めあぐねている状態だった

「落ちろおおおお」

連邦パイロットのケイロンが操縦桿のボタンを押し込む

ジムⅢの肩に装備されているミサイルランチャーが開き、中から対モビルスーツ用の誘導弾が次々と発射される

グフカスタムは両手をミサイルが来る方向へ向けた

ガトリングシールド、マシンガン、腕部機関砲が吠える

「うおおおおおっ!!」

空中で爆発の華が開いた

三つの射撃武器がミサイルを全て撃ち落としたのである

数えきれない連射弾によって、ミサイルによる被害はない

だが爆風を貫いて光の槍が突き立つ

ビームライフルの一射であった

「あつぶねッ!」

ビームがまたグフのすれすれを通る

もう少しずれていたら、一撃死とは言わずとも痛手を負った

「外したッ!」

ケイロンの頭に焦燥感が積もる

ミサイルが迎撃された事で発生した爆発が視界を遮り、射撃の狙いを一瞬狂わせた

敵がミサイルを避けた後に必殺の一撃を叩き込むつもりであったのに

相手はこれを狙ったのだろうか

「この、野郎！」

ビームライフルをもう一度撃とうとする

しかし右手の武器は引き金を引いても反応しない

エネルギーが、尽きた

それを理解し、ケイロンは背中に寒いものを感じる

ジムⅢが、ビームライフルを弾切れにするまで追い込まれている

そう判断した時、一瞬の隙が生まれた

「エイサーアーツ！」

腕を大きく振りかぶり、一本のワイヤーを投げ付ける

ヒートロッド

強力な電流を流し込むことで敵モビルスーツの動きを止める兵器

ジムⅢはシールドでその攻撃を防いだ

しかしシールド越しの電流が、ジムⅢを襲う

「くそ、こんな、一年戦争のロートルモビルスーツが、こんな・・・」

空中から地上へと落下していく一機

もう一機はマシンガンを投げ捨てて、ヒートソードを引き抜いた

「トドメだああああああ！」

「ふざけんなあああああ！」

横薙ぎの一閃にシールドを叩き付けて抑える

ジムⅢの機能は死んでいない

ケイロンは勝ちを諦めていない

弾無しのビームライフルの銃口が、ガトリングシールドのガトリング部分に突っ込まれた

双方がぐしやりと潰れる

「だらしゃあッ！」

ビームサーベルを抜き、そのまま斬激

バックステップでその反撃は空振りに終わる

シールドのヒートソードを受け止めていた部分が、溶け落ちた

もう防御は難しい

だがケイロンは諦めない

連邦の軍人が、こんな奴等に屈するわけにはいかないからだ

「クソツタレがあ！」

バルカンを撃つ

シールドで防がれる

突進してからのビームサーベル

巧みな動きでかわされる

「コイツ、大分・・・」

「るおああああ!!」

「大分やばい!」

迫るジムⅢ

やたらと振り回されるビームサーベルはそれだけで脅威であり、性能差との相乗効果は計り知れない

何より、グレッツクリーが、目の前の敵の気迫に圧されていた

サーベルを避けたとき、脚が浮いた

そこに叩き込まれる割れたシールド

「ぐっはア!」

倒れ込むグフカスタム

「うおッおおお!!」

ケイロンの機体はビームサーベルを手に、体勢を崩したグフへ飛び掛かった

「うるおあ!」

「ぬおおおー！」

倒れたままブースターを吹かす

剣先が乗機を貫く前に、グレックリーは逃れた

滑るようにブースター移動する先にあつたのは、先程捨てたマシンガン

拾い上げ、向ける

何発もの大口径弾が容赦なくジムIIIを削る

だがケイロンは、ブースターでグフカスタムへと猛進した

まだ、倒れない

「こいつでッ……」

彼には勝算があつた

敵がマシンガンでは決定打を与えられないと判断し、ヒートソードを使ってくる瞬間

を待つ

そして振るわれたヒートソードを再びシールドで防ぎ、今度こそビームサーベルを刺し込んでやるのだ

「終わりにしてやるッ!!」

グフカスタムがマシンガンを捨て、ヒートソードの切っ先が揺れた

今だ、とジムIIIはシールドを突き出した

だが何も起こらない

グフカスタムは、目の前の敵は、ケイロンのフェイントに、フェイントを重ねてきた  
ビームサーベルを振るタイミングを捨ててシールドを出しても、敵が行動しなくては  
意味がない

グフカスタムはヒートソードを持っていない方の腕を叩き付けた

シールドごと弾かれる左手

一瞬触れ合った互いに、接触回線が開く

「テメエがどうしてそこまで執念あるのか知らねえがな……!」

「コ、イ、ツ?!」

グレックリーは叫んだ

「こつちには我が家がかかってんだよツ!!」

グフカスタムがヒートソードを降り下ろす

だがケイロンは、咄嗟にブースターを起動した

「ぎっ……!」

熱された刃が、ジムⅢの右手を断つ

## 信念の戦い

レイゼンは引き金を引く

次々と飛んでいく弾

バズーカやマシンガン、シュツルムファウストの弾

それは全て、たった一機の敵に向けられたものであった

青と白に塗り上げられた、連邦のバージュム

大きな鶏冠を揺らして、その機体は攻撃を全て避けてみせた

そして回避のモーシヨンを崩さぬままにビームライフルを一射してくる

「まずいな・・・くッ！」

ホバーによる急速な横への移動

ビームはドムトロローペンの脇を通り過ぎる

「相変わらず、デタラメな強さだなー！」

相手のコクピットにいる連邦軍人をレイゼンは皮肉を籠めて評した

ブルース・ウエイン大尉

アイアンフィストを追い詰めた、この戦場ではまず間違はなく最強のパイロットそんな敵が、自分の機体より遥かに高性能のモビルスーツで襲い掛かってくるレイゼンの背中を脂汗が湿らせた

再びのビームライフル

慌てて進路を変更する

延びる光がドムの少し横へ到達する

あそこは、レイゼンが先程移動しようとした場所だ

あのまま動いていたら、予測射撃によってやられていた

恐怖を紛らわせるように武装を連射する

マシンガンの連射弾はバージムの装甲を食い破らんと真つ直ぐ飛んでいった

だがバージムは、右に左に機体を動かして弾丸を一発も食らわれない

それなら次の手だとばかりにシュツルムファウストを取り出した所でレイゼンは見た

ブルース機が一本の細くて短い筒を握り込むのを見た

「ビームサーベルかっ!?!」

ライフルを避け続けたことで相手は痺れを切らした

一本の光の刃が姿を表す

バージムはブースターを起動

ドムトローペンへ一直線に突撃してくる

接近戦で一気に決着をつけるつもりだ

マシンガンをもう一度撃つ

無数の弾丸に相手が恐れをなして接近中止するのを狙った

だがブルース・ウエインは少しも物怖じせず、砲弾のシャワーマシーンをつ突つ切つてくる

距離があつという間に縮んだのは、機体性能だけによるものだろうか

振り上げられる刃

降り下ろされる刃

「くお、ッー」

レイゼンは、あえて機体を転ばせた

直立しては三枚に卸されてしまうと踏んだからだ

その読みは当たる

虚空を切り裂く光の刃

だが片手に持っていたシュツルムファウストは真つ二つになってしまふ

最後の一本である

レイゼン機の最大火力が封じられた  
バージムの二振り目が襲う

レイゼンはヒートサーベルを抜いて相手の剣を受け止めた

だが文字通りの付け焼き刃である

ドムトローペンのヒートサーベルよりもバージムのビームサーベルの方が出力が高  
い

よつてレイゼンの武器は瞬く間に切り捨てられる

罅迫り合いも長くは起きない

だがブルース・ウェインに詰められた距離を引き離すには、レイゼンには腕も機体性  
能もまるで足りなかった

「悔しいな、俺だつてそこそこ腕は立つと自負してるんだが……?」

ドムトローペンは空いた左手で拳を握り、バージムの右手を押さええた  
相手はビームライフルを持っている

罅迫り合いの間に至近距離から撃ち殺してくる可能性も否定できない  
蹴りを叩き込んでくるバージム

鶏冠が揺れる

性能によるものか、または当たり所が良かったのか、ドムトローペンが少し浮き上

がった

キツクの威力によるものである

「ぐふっ……そう来るよな」

手が使えないなら足で攻撃

そんな戦法をやる程の戦術能力も判断力もブルース大尉にはあると、そう踏んだ  
だからこそ、両手を封じられた相手が足を使ってくることも予測できた

「だからそれを待っていたんだ……」

レイゼンはフットペダルを全力で踏み込んだ

ブースター起動、噴炎放出

高速移動でレイゼンは距離をとった

バージムの動きはその逃走に追い付けなかった

蹴りの姿勢から復帰するために、ビームサーベルを振る前にドムトローペンに逃げられた

逃げるレイゼン

読みは当たり、賭けには勝った

だが一世一代の賭けを行って尚一時的な延命にしかならない

ブルース・ウェインはそんな相手であった

まったくもって化け物級のパイロット

正面からやり合って勝てるはずもない

なのでレイゼンは、正面以外から攻めることにした

「おい、聞こえてるんだろ」

先程の殴り蹴りで接触回線が繋がった

敵の無線情報を取得し、通信機に登録、話しかける

レイゼンは対話を試みた

「地球連邦の軍人だろう、もしかしてブルース・ウエイン大尉か」

敵モビルスーツはブースターで迫りながらビームライフルを撃ち込んでくる

こちらには返答してこない

「貴様は何故戦う？金か、富か、名声か！」

相手には繋がっているはずだ、無線機はしっかりと調整した

だったら向こうがこちらの言葉を無視しているだけか

「だが、連邦は長くは保たない！何故だかわかるか、それは歴史が証明している！」

「・・・何を言っている？いったい貴様に何がわかる？」

食い付いた

間違いない、奴には付け入る隙がある

ビームを必死にかわしながらレイゼンはまた叫んだ

「宇宙にいる人間を連邦は全く抑えきれていない、ジオニズムを持った者共は宇宙で次の機会を伺っている！だが連邦の高官は自分の富と欲望にばかりかまけて、その対応をできていない！それがデラーズフリートであり、それがアクシズであり、それが！」

「スペースノイドが自らの幻想を掲げて斬りかかってくるのだ、それに反撃しているのが我々だ」

「ならば何故スペースノイドの待遇を良くしようとしめない？宇宙を、地球のように水も食い物も富も自然も楽々と手に入るような場所に、何故しない！」

ドムトローペンのバズーカは、バージムにはなんてことのないように避けられる

レイゼンの攻撃は敵を捉えられない

掠り傷すら付けていない

「そんな中で、自分の身だけを可愛がっているからだ！手を取り合えば全て終わるのに、宇宙を敵と定めてテイターンズなど作り上げ、スペースノイドのヘイトをひたすらに稼ぎ続けている！そしてひたすら起こる連邦上層部の汚職！職権乱用！不祥事！」

「ツ！・・・貴様！」

「連邦は大した時間も経たずに力を失うぞ、こんなことをいつまでも繰り返しているからな！」

「連邦は大多数の人間を庇護する組織だ！そんな組織が潰れるはずはない！」

「そんな大多数の市民を害した奴らがいたな！ティターンスの大量虐殺を、連邦が黙認したことがあった！他にも連邦が罪なき市民を殺した事例はいくらでもある！」

「貴様アアアア!!」

サーベルが迫る

だがレイゼンにはわかった

ブルース大尉は、論破されたのだと

相手を否定し、判断力を鈍らせた

まず頭が落とされる、次に左腕、右腕

トドメのкокピットへの斬撃

だがレイゼンは至って冷静だった

胸部メガ粒子砲のスイッチを、押した

目眩まし用のビームが、バージムのカメラアイを直撃した

## 魂の戦い

黒い肩が揺れ、緑色のモビルスーツが腕からミサイルを放つ

噴煙を吹き出して追い掛けてくる誘導弾に、対する夕焼け色のモビルスーツは正面から突き進んだ

肩のガトリングを発射

ミサイルは無数の連射弾によって粉碎される

爆炎が発生、双方のモビルスーツの視界が遮られる

「チィ!?!」

緑のズサに乗ったマーヴェル・クミクスは、煙幕と化したミサイルの爆発が収まるまで様子見の姿勢をとった

だが彼女と戦っている敵は違った

「うおおおおおっー!」

一人の少女が腹から声を絞る

橙色のゲルググは煙を突っ切って現れた

一つ目がぎらりと輝く

敵の思わぬ行動に、マーヴェルはビームライフルを向けて対応した

だがゲルググは銃口の先から素早く退く

そして、手に持ったビームマシンガンを引き金を引き、多数のビーム弾をばら撒いてくる

それにも動じず、マーヴェルのズサは回避モーションをとる

右へ、左へ

舞うような不規則な動きでビームの弾の全てをかかわす

「無駄だ・・・」

マーヴェルは再びミサイルを放った

しかし数発のミサイルが接近してきても、ゲルググは突進を止めない

なおも緑色のズサへと迫る

マーヴェルがライフルを突き出した

ビームライフルにはヒートナイフが銃剣のように付けられている

闇雲に突撃して動揺を誘おうと言う魂胆だろうがそうはいかない

ビームサーベルの間合いに入ったら、コクピットへ一撃を

マーヴェルがそう思った次の瞬間、ゲルググは飛んだ

真上へ飛び上がった

反射的にズサのカメラがその方向を向く

太陽を背にしたゲルググがあつた

日輪を背負うようなアングルの映像

だがマーヴェルがそれを綺麗だと感じることはなかつた

太陽光に網膜が焼かれる

敵の動きが激しすぎて初歩的な罠をかけられることを失念していたのだ

「ぐっ、おのれエー！」

ライフルを捨て、ビームサーベルを抜く

ゲルググは雷のように急降下して、ビームサーベルを降り下ろす

ズサのサーベルとゲルググのサーベルがぶつかり合った

回復した視界の中に、ゲルググの顔が写る

カメラアイが強く光った

「舐めるなあッ！」

ズサがゲルググの脇腹に蹴りを入れる

体勢を崩した相手にビームサーベルの刃を突き入れるが、敵はすんでのところで身を

仰け反らして回避する

「ジオンから離反した愚か者が、この！私に！」

ズサにサーベルを振り回させながらマーヴェルは、叫ぶ

彼女の言葉は呪詛のようにおどろおどろしく、自分の正義しか見えていない

「スペースノイドの自由と！平和を！勝ち取るために！」

先程まで優勢に立ち回っていたゲルググは、間断無く迫るビームサーベルの連撃に防戦一方という風情だった

サーベルの切っ先が振るわれる

別のサーベルが抜き放たれ、その一閃を受け止める

ビームとビームがぶつかり合う鏖迫り合い

「私は勝つ！」

「ふざっけんな」

至近距離からのミサイル

ゲルググはあえて避けなかった

爆発

炎と煙が辺りを包み込む

「ジオニズムがそんなに正しいって？」

煙が晴れていく

「お前達の行動は、」

夕焼け色が顔を出す

「ただのテロに過ぎないのよ……！」

左肩の装甲が剥がれ落ちる

地面に落ちた超硬スチール合金がボロボロに割れ、砕け散った

ゲルググはずいと顔を近づける

怨敵の面を見据える

「テロ行為が悪だど？ 力でないと連邦を下せない！ 奴等は言葉では動かないからな！」

マーヴェルは叫んだ

恨み辛みを込めた言葉を、目の前の敵に叩き付けた

その言葉はしっかりとゲルググのパイロットに届いた

「だったら」

それを受け止めて、それどころかその真つ黒な思念を受け止めて、そしてアウラはこ  
う断ずる

「返り討ちも認められるよなッ!!」

ビームサーベルが弾かれる

ズサの手からすっぽ抜けた剣が、刃を失い地へ刺さる

それと同時にゲルググは下がった

このときマールヴェルはビームライフルに付いていた銃剣ではなく、もつと必殺性の高いビームライフルで攻撃をした

向けた銃口の先に敵がないことに気付かずに

「なに?!」

「アサルトコンボ、レディー！」

上空にいる

そう感付いた時にはもう遅かった

ゲルググは地面へと武装を向けて飛んでいた

ビームキャノンを、ガトリング砲を、腕部グレネードランチャーを、ビームマシンガンを

全てが放たれる

マールヴェルも負けじと、ズサの内蔵ミサイルの全てを発射した

腕から脚から肩から胸部から、ミサイルが一斉に飛び立つ

だがズサの攻撃は全て弾幕に遮られて粉碎された

空に花開く無数の爆炎は、アウラが粉碎したミサイルの残滓

それら一つとして目標にはたどり着けなかった

まるで、マーヴェル自身の過激な理想のように

ビームキャノンが肩から先を焼き切る

グレネードランチャーが頭部を砕く

ガトリングが装甲を破る

ビームマシンガンが内蔵機器をズタズタにする

「ぐっ・・・はぁー！」

痛みに見開いた視界の中に、落雷のように突っ込んでくるゲルググの姿が見えた

「何故だ、何故・・・何故ウォルター・コバックやあのゲルググのような者達がジオンの理想のために戦わない！何故、何故私にはあの力がない！スペースノイドを救える者が、何故！」

光がズサのカメラを埋める

マーヴェルの視界を埋める

「わ、た、し、はッ!?!」

ビームサーベルは、ズサの天辺から爪先までを通過した

大地に降り立ったゲルググは、サーベルを腰に取り付ける

そして、アウラは振り向いた

黒い肩の敵を見た

「私はっ間違っていたのか!？」

「そのとおり」

ズサは、核融合炉の爆発により、消えてなくなつた

「ジイイイイイクウウウウウウ・・・ジイイイイイオオオオオオントツ・・・」

爆発の炎に照らされて、アウラのゲルググは紅く光つた

乱戦で生き残つたジオン兵士はゼロ

マーヴェルの撃破によって、ジオン残党テロリストツバインワールはここに壊滅した

## 立ちはだかる者

人っ子一人いない荒野

砂埃をあげて、鉄の巨人達がマラソンしている

その中心には、連邦の陸上戦艦ビッグトレイ級があつた

ビッグトレイ級のブリッジには、ベテランとは程遠い、ナヨナヨとした男達

彼らは、地球連邦のボンボンで構成されたクラウン隊である

連邦高官の息子だったり、高額出資者の御曹司だったり、兵器を駆って戦場へ向かつているのだ

それも、自分たちより戦力的に圧倒的に劣る相手を、治安維持に格好をつけてすり潰すために

クラウン隊の移動ルートは、彼らが所属する基地の本隊とはまた違った者だった

あえて分かれ道し、後から戦場にたどり着き、うざったい本隊もろとも敵部隊を吹っ飛ばしてしまう魂胆なのだ

これはクラウン隊の実質的リーダーであるヴィランの指示だった

ヴィランは大局的なことには全く目を向けられない典型的な俗物だった

しかし、ずる賢い知恵が必要な場面だと一変、悪辣な手段を平然と考えるようになる  
汚いコネと賄賂の金とで連邦の高い位に登った彼の父親同様に、ヴィランの性根は腐っていた

「戦場まであとどれくらいだ？」

「はい、あと十分程で戦場にたどり着けるかと」

「よしよし、では八分後に停止、諸共に砲撃を加えよう」

そうしてヴィランは、ビッグトレーの外の自分のモビルスーツへと向かった

ガンマガンダム、というらしいそのモビルスーツは、マツシブで強そうな印象を持たせてくれる

顔も素晴らしい

二本のツノとデュアルアイは、まさしくヴィランが求めた最強のモビルスーツ、ガンダムそのものだ

「これさえあれば、俺の力は世界中に響き渡る……！」

意気揚々と頭部に乗り込んだヴィラン

そのモビルスーツは、かつてグリプス戦争で使われたリックディアスの頭部をガンダムっぽくしただけの代物であることは、彼には知る由もない

そしてガンダムっぽいビームライフルや大型シールドを携えたガンマガンダムは、堂々と出陣しようとした

しかし、着地の瞬間、背後のビクトレーが、大きな光の波に飲み込まれた  
「なんだあ?!」

爆風で派手に転ばされ、振り向いてからヴィランは叫んだ

ビクトレーが、消えている

四つん這いのナガレボシを立たせて、ネクスト・ブレイクは指を鳴らした

右手

左手

「いるわいるわ、うじゃうじゃと」

連邦の別働隊だろうか、ネクストの眼前には、無数の陸戦部隊がひたすら突き進んでいた

もつとも、先ほどのビームキャノン攻撃で旗艦であろうビクトレーを吹っ飛ばしてやったので、すっかり浮き足立っている

前に戦ったことのある、装備だけはいっちょまえの下手くそ部隊だろう

今のネクストと、ナガレボシの敵ではなかった

「さあて、こっから先に通してやるわけにやあいかねえ」

息を吸い、吐く

今の彼には迷いはない

罪もない人間を脅かす全ての脅威と戦うために、そのために立っているのだから

ナガレボシは両手の拳を突き合わせた

天が轟き、地が割れ、空間が振動する

旗艦の消滅で狼狽えた敵部隊を、唐突な天変地異が襲う

荒野に、炎の華が咲き乱れる

それらは、ナガレボシを中心として始まった

「俺がお前らをぶっ倒す」

全てが終わったあと、姿を変えたナガレボシは、敵へと突撃した